

41075
~~43218~~

教科書文庫

4
220
41-1906
20000 81610

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

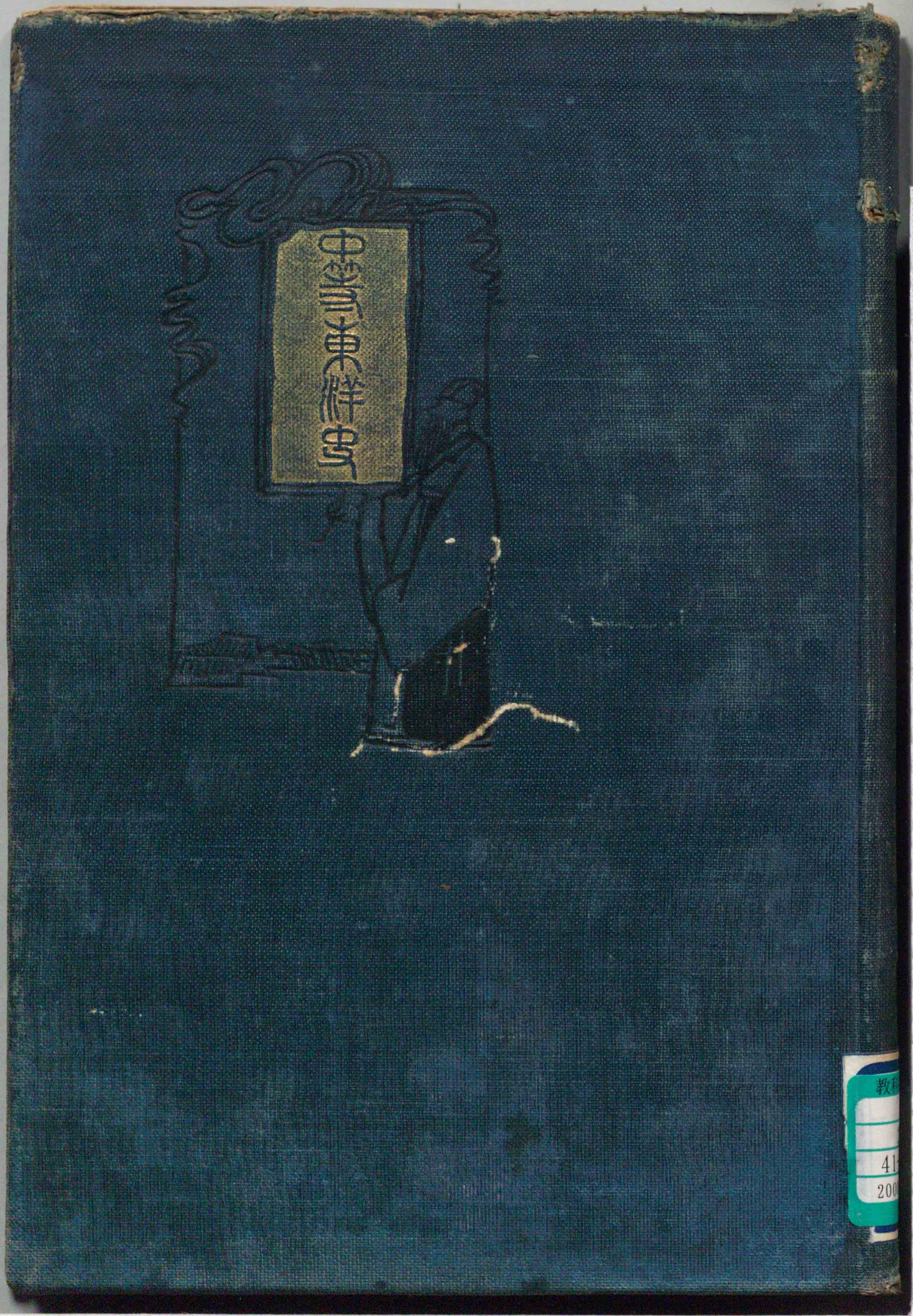
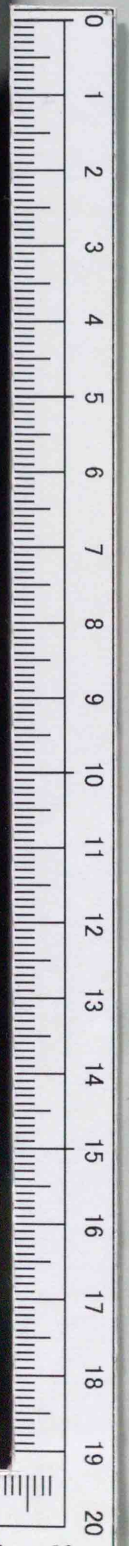
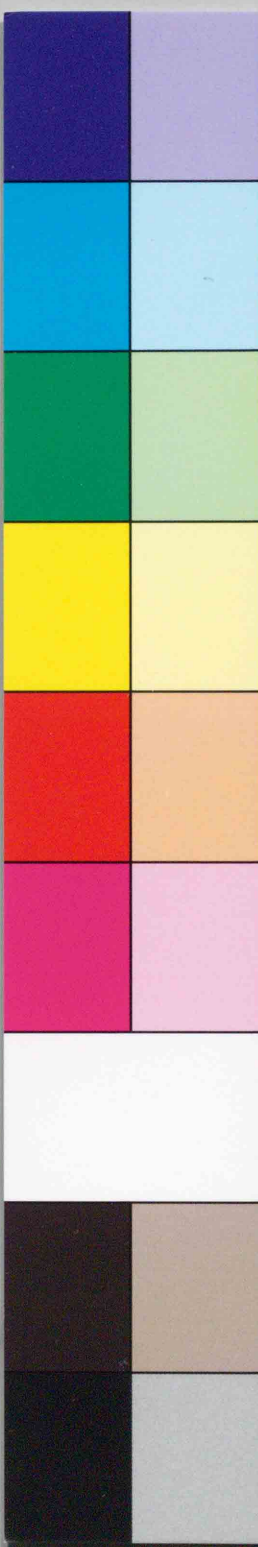
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



中華大辭典

教科
41
200





Joyoski

42

Joyoski

42

42

220

明39

資料室 日十月一年九十三治明
濟定檢省部文
科史歷校學中

中等東洋史

全

文學士中野禮四郎
猪狩又藏 合著



東京

學海指針社

広島大学図書

2000081610



猪狩又藏



東洋の重なる諸民族

広島大学
蔵
81610
印

Handwritten notes in Japanese and English, including the name 'W. W. W. W. W.' and other illegible characters.

- (一) シンガポ。古の東胡、鮮卑、契丹、女真、滿洲人、皆同族。
- (二) チベット人。古の氐羌、月氏、吐蕃、西夏、皆此の族。
- (三) 支那人。漢族なり。
- (四) 朝鮮人。韓族なり。
- (五) 蒙古人。元國をなせる族、古人、これと同族。
- (六) 苗人。印度支那族なり。國越、南越、南詔、大理は此の族也。
- (七) 印度人。アリア種。
- (八) 安南人。印度支那族なり。
- (九) 土耳其人。土耳其種なり。匈奴、柔然、突厥、回紇、これと同種。
- (一〇) カツベク人。
- (一一) キルギス人。共に土耳其種、今中亞に在り。
- (一二) 阿富汗人。アリア族。
- (一三) 暹羅人。印度支那族。
- (一四) 緬甸人。印度支那族。
- (一五) 亞拉比亞人。セミチツク族。
- (一六) 波斯人。アリア族。

例言

- 一、本書は中學校師範學校及び之と同程度なる諸學校の教科用に供せんため、編述せるものなり。
- 一、本書は大體に於て、文部省の教科細目に準據したること勿論なれども、組織に就ては、聊か斟酌を加へたり。
- 一、記述を簡單にして紙數を減じ、文字を平易にして講讀に便せしは、著者の最も意を用ゐたる所なれども、猶地名人名等の讀み難きものには、多く振假名を施したり。
- 一、東洋史の興味乏しくして、學習に困難なることは、學生一般の口にする所なり。よりにて本書は、欄外に史中人物の著名なる言行及び重要な事柄を摘記して、教授諸氏の趣味ある講話の一助たらしめんことを期せり。
- 一、本書卷頭には、東洋諸民族の寫眞版を附せるのみならず、本文

中にも出處正しき多くの繪畫を挿入して、學生の興味を増し、且つ記憶を助けんとせり。唯古代人物の肖像の完きものを得ること能はざるに苦しめり。本書收むる所の支那人物肖像(宋時代までの分)は、概ね歴代君臣圖像を縮寫せるものなり。

一、本書卷尾には、沿革地圖、支那歴代興亡表、並に歴代系譜朝鮮李氏王朝系譜、大事年表等を附して参照の便に供せり。

一、著者才短く學淺きが故に、本書通編幾多の缺點を免かれざるべし。幸に博識なる君子の教を得て、訂正に重ぬるに訂正を以てせん。

明治三十八年七月

著者誌

本書訂正の際日露の講和既に成りしを以て之を追補す。

同年十月

著者再識

中等東洋史

目次



第一編 上古史

第一章	上古の支那	一
第二章	夏殷周	三
第三章	春秋時代	六
第四章	戰國時代	九
第五章	周の制度學術	三三
第六章	古代の印度。佛教	四九
第二編 中古史		
第一章	秦の統一	一八

第二章 漢の初世……………一〇

第三章 漢武帝時代……………三

第一節 儒學の興隆……………三

第二節 武帝と匈奴西域……………四

第三節 武帝と南方諸蠻……………五

第四節 武帝と朝鮮……………六

第四章 漢の末世……………七

第五章 後漢の初世……………九

第一節 光武帝……………一〇

第二節 匈奴西域との關係……………一三

第三節 佛教の東漸……………一三

第六章 後漢の末世……………一三

第七章 三國。晋の初世……………一六

第八章 東晋。五胡(上)……………一六

第九章 東晋。五胡(下)……………一〇

第十章 南北朝時代……………一四

第十一章 隋の世。唐の興起……………一六

第十二章 唐初の内政。制度……………一六

第十三章 唐初の外征……………一五

第一節 唐と朝鮮……………一五

第二節 唐と突厥吐蕃印度……………一五

第三節 唐と諸外國との交通……………一五

第十四章 唐の中世……………一六

第十五章 唐の衰滅……………一六

第十六章 漢唐の學術宗教……………一七

第十七章 五代。契丹……………一七

第十八章 宋遼夏の對立(上).....七二

第十九章 宋遼夏の對立(下).....七三

第二十章 宋遼金の盛衰.....七五

第二十一章 南宋と金.....七七

第二十二章 宋の學術宗教.....七九

第三編 近古史

第一章 蒙古の興隆(上).....八二

第二章 蒙古の興隆(中) 金の滅亡.....八四

第三章 蒙古の興隆(下) 宋の滅亡.....八六

第四章 元の盛運.....八八

第一節 元と高麗及び日本.....八九

第二節 元と南亞諸國.....九〇

第三節 元の領土と東西の交通.....九二

第五章 元の衰微.....九三

第六章 明の初世.....九四

第七章 帖木兒の雄圖.....九六

第八章 明の中世.....九九

第九章 明の末世.....一〇一

第十章 元明の儒學宗教.....一〇五

第四編 近世史

第一章 清初の盛運.....一〇八

第一節 三藩の亂.....一〇八

第二節 清露の交渉.....一〇九

第三節 清朝と西北諸族.....一一一

第四節 清朝と南亞諸國.....一一三

目次終

附錄

第五節 清朝の制度學術……………二五

第二章 歐人の東漸……………二七

第一節 葡蘭英佛人の東漸……………二八

第二節 英領印度……………二九

第三章 清朝の衰運……………三三

第四章 中亞に於ける英露……………三六

第五章 南亞に於ける英佛……………三八

第六章 日清韓の關係……………三一

第七章 極東の近事……………三五

第八章 日露戦争……………三七



中等東洋史

文學士 中野禮四郎

猪狩 又 藏 合著

第一編 上古史

第一章 上古の支那

第一節

東洋史 東洋史は亞細亞諸國民の歴史なり。就中支那は上下五千年の文明を有するを以て、自ら東洋史の中心を爲せり。

第二節

漢族 支那の文明をなせるものは漢族なり。漢族は凡そ五千年前に、西方より黄河に沿ひて東遷し來り、支那土著の苗族を南方に逐ひ、黄河の附近に國を建てたり。

苗族の支那土著の苗族を南方に逐ひ、黄河の附近に國を建てたり。此苗族、漢族より三千年前より支那に在りて、漢族と共に漢族をなせるものなり。

傳説
燧人火食之道
伏義神農
十八會
神農
中國
燧人
燧人火食之道
燧人火食之道
燧人火食之道

第三節

古傳説 太古の世燧人伏義神農など所謂三皇ありて、或は漁業耕作を教へ、或は醫藥を製したりと云ふ。三皇の後、黃帝顓頊帝嚳帝堯帝舜相次ぎて立てり。之を五帝といふ。黃帝の領土は東海に至り、南揚子江に及び、北は今の直隸山西兩省、西は今の甘肅省に及びたり。

第四節

堯と舜 帝堯は黃帝の後、凡そ二百年にして立てり。平陽(山西)に都し、羲和二氏に命じて曆法を定め、又至孝を以て聞えたる舜を擧げて政を委ね、遂に位を譲れり。舜は蒲坂(山西)に都し、禹を擧げて洪水を治せしむ。禹は精勵刻苦して、能く堯以來の洪水を治めたるを以て、遂に舜の禪を受けて位に登れり。(西紀前二〇〇〇頃)堯舜の二代を唐虞の世といふ。

第五節

九官 舜の世の政府には、九官ありて政務を分掌し、又四

△禹は外に居ること八年、三度家門を過れども入らず

岳十二牧ありて地方の政治を行ひ、巡狩述職の制あり。

九官表	司空。百官を總理す	納言。帝命を出納す
司徒。教育を掌る	秩宗。祭祀を掌る	后稷。農政を掌る
士。刑法を掌る	共工。百工を掌る	虞。山澤を管理す
		典樂。音樂を掌る

第二章 夏殷周

夏の世 禹は國を夏と號し、安邑(山西)に都して能く民心を服せり。其の子啓、父の後をうけて位に登り、世襲の風ここに定まる。十七代桀に至りて暴虐甚だしく、遂に湯王に滅ばされたり。(前一六〇頃)

第一節
△禹曰く後世必ず酒を以て國を亡さんとすものあらんと

第二節

△微子は去り箕子は伴は殺さる

殷の世 湯王は、もと一諸侯なりしが、伊尹を用ゐて國政を治め、夏の桀王を滅ぼして、支那革命の先例をなし、都を亳(河南)に定めて、國を商と號したり。これより其の子孫相次ぎて王たること凡そ三十世、六百餘年なり。第十九代盤庚のとき、國號を殷と改む。最後の王紂は、日夜淫樂に耽り、微子・箕子・比干等の諫を用ゐず、暴虐日々につのりしかば、終に周武王に滅ぼされたり。(前一頃)

第三節

周の武王 周武王は、父を昌(文王)といふ。文王曾て太公望を擧げて相となし、仁政を施ししかば、天下三分の二を領するに至れり。武王立つに及びて、太公望なほ輔佐の任にあり。武王遂に殷を伐ちて之を滅ぼし、自ら帝位に即きて、都を鎬(後長安、陝西省)に定めたり。

第四節

△刑を用ひざることを四十年

成康の治 武王崩じて、成王位を承け、周公旦政を攝す。周公は才徳共に秀でて、能く制度を定め、禮樂を起し、以て周室の基礎を堅からしめたり。成王の後、康王位に即き、天下頗る平安なりしかば、世に成康の治と稱す。

第五節

△幽王褒姒を寵す



周 公 旦 稱す。
周室東遷 康王の子昭王より旦して王權漸くに衰へたり。第十一代宣王に至りて、中興の美をなし

しが、其の子幽王、また國政を顧みずして、犬戎に弑せられたり。平王(幽王の子)位に即くに及びて、都を洛陽(河南)に遷しければ、之を周室の東遷といふ。時に西紀前七七一年なり。

第三章 春秋時代

第一節

覇者 周平王の四十九年以後二百四十餘年を春秋といふ。王權益衰微して、諸侯相争ひ、戎狄内地を侵略して、國中紛亂を極めたり。是に於てか、戎狄を驅逐し、又諸侯の平和を維持し、民をして安らかならしめんと奮起するものあり。之を覇者といふ。最初に興りたるは、齊桓公なり。

第七節

△管鮑の交

齊桓公と管仲 桓公は管仲を擧げて政を執らしむ。管仲能く國を富まし、兵を強くし、屢諸侯を會して、平和を誓ひ、楚を伐ちて之を服し、戎狄を驅逐して、中國を安んじたり。所謂五霸のうち、桓公を以て最も盛なりとす。されど管仲死するに及びて、(前六四)其の覇業忽ち衰へたり。

第三節

△宋襄の仁

宋襄公晋文公 宋襄公は齊桓公の後をうけて、覇業をなさんとししが、楚と泓(河南)に戦ひて敗れたり。次ぎて覇たるものを、晋文公となす。大に楚軍を城濮(山東)に破りて、(前六三)覇業をなせり。これより晋は久しく覇權を握りて、秦楚と争へり。

第四節

秦穆公 晋文公と同時に、西方に於て覇たるものを、秦穆公とす。秦は形勝の地を領したるのみならず、百里奚(秦)の如き賢臣ありて、國力次第に振興したり。

第五節

楚莊王 秦穆公の後、南方に於て覇たるものを、楚莊王となす。莊王は郟(河南)の戦に、晋軍を破りて、(前五九七)勢ひ大に振ふ。これより數十年の間、晋楚兩國中原に覇を争へり。

第六節

吳越の争 楚は平王に至りて内亂あり。時に吳王闔閭(吳)は、伍子胥(申)を擧げて將となし、楚國に侵入して、其の都を陥れた

△夫差越王
を會稽山に
圍む
△越王の臣
に范蠡あり

り。既にして闔閭は、越王勾踐アセと戦ひて死せしかば、其の子夫差、また越王と相戦ふ。西紀前四七三年、越王終に吳を滅ぼして、南方に覇たり。

通常五霸とは齊桓・宋襄・晋文・秦穆・楚莊を謂ふ。春秋の世、諸侯百餘國。中にも強大なるもの、所謂十二列國あり。吳越は加はらず。

二十列國表		國名	爵	國	都
魯	衛	晉	鄭	燕	曹
侯	侯	侯	伯	伯	伯
曲阜	朝歌	絳	新鄭	蒗	定陶
(山東省)	(河南省)	(山西省)	(河南省)	(直隸省)	(山東省)
蔡	陳	齊	宋	秦	楚
侯	侯	侯	公	伯	子
蔡	陳	臨淄	商丘	雍	郢
(河南省)	(河南省)	(山東省)	(河南省)	(陝西省)	(湖北省)

第四章 戰國時代

第一節

七雄國 春秋の末より諸侯の間には、陪臣の專横多かりしが、周の威烈王の二十三年、晋の權臣、韓魏趙三氏を封じて諸侯となせり。以後凡そ二百年間を戰國の世といふ。この間小國は殆んど亡びて、秦・齊・燕・趙・韓・魏・楚、所謂七雄國の對峙となり、互に攻争を事とす。就中秦は西方形勝の地に據りて、國運大に興隆せり。

第二節

秦孝公と商鞅 秦は孝公に至り、商鞅シヤウキヤウを用ゐて政に當らしむ。商鞅奇才あり。農業を以て富國の基とし、爵位を以て軍功を勵しければ、十年にして國力強大なるに至れり。

第三節

合従の策 秦の勢ひ強大なるを以て、六國皆之を恐る。時

△蘇秦曰く
我を洛陽に
陽郭の田を
二頃あらし
めば豈能く
六國の相印
を佩びんや

第四節

に洛陽の人蘇秦といふものあり。合從の策を按じて、先づ燕に説き、次に趙に至り、又韓、魏、齊、楚の諸國に入りて、六國同盟の利を説きしかば、諸王侯大に喜び、西紀前三三三年遂に合從の約を結び、以て秦と相當れり。

連衡の策

六國の合從成りしを以て、秦は大に之を憂ふ。時に張儀といふものあり。亦才辯に富む。秦に仕へて相となり、先づ魏王に説きて、秦に服事せしめ、次で韓、楚、齊、燕、趙に説きて、皆秦に事へしむることとせり。之を連衡と云ふ。(前一)蓋し從は縱(南)衡は横(西)をいふなり。

第五節

△燕の樂毅
齊を伐ちて
七十餘城を
下す

遠交近攻の策

從横の策は成りて破れ、破れて復成り、列國動搖して定まらず。齊、燕兩國の如き、屢相戦へり。獨り秦は、著々として其の勢力を養ひ、范雎を相として、遠交近攻の策

第六節

を行ひ、連りに近國を侵略せり。

秦の統一 秦の勢ひ益強大なるを見て、周赧王は、列國に命じて之を伐たしめんとし、却て秦に滅ぼされたり。(前一)其の後、凡そ十二年にして、秦王政(後、始皇帝)位に登り、先づ韓を滅ぼす。これより趙、魏、楚、燕、齊相次で滅亡し、西紀前二二一年に至りて、天下全く秦の統一に歸せり。

七國表			
國名	國	都	滅亡年代
韓	陽翟(河南省)	前二三〇年	燕
趙	邯鄲(直隸省)	前二二八年	齊
魏	大梁(河南省)	前二二五年	秦
楚	郢(湖北省)	前二二三三年	
國名	國	都	滅亡年代
燕	薊(直隸省)	前二二二年	
齊	臨淄(山東省)	前二二一年	
秦	咸陽(陝西省)		

第五章 周の制度學術

第一節

△六官

官制 周の制度は頗る完備せるものにして、後世の模範となれること多し。中央政府には、天・地・春・夏・秋・冬の六官あり。天官の長をば冢宰(總理)といひ、地官は大司徒(邦教)、春官は大宗伯(祭祀)、夏官は大司馬(兵馬)、秋官は大司寇(國法)、冬官は大司空(農工)を長として、政務を分掌せり。

第二節

五等の爵 地方には數多の諸侯ありて、爵は公・侯(共領地百里)、伯(七十里)、子(五十里)、男(共里)の五等に分れ、百里を大國といひ、三軍を置き、七十里は中國と稱して二軍、五十里は小國といひて一軍を置く。一軍は一万二千五百人なり。

第三節

田制 所謂井田の法にして、一井九百畝、之を八家に分つ

第四節

△上古は古の文を用ひ、篆書に於ては漢代に成れり。初めに毛筆を製し、紙の製造あり。

第五節

△孔子卒する年、七十三年、魯の城北に泗水の上を、聖廟といふ。

こと各百畝、残れる百畝を公田とす。

學制 支那の象形文字は、黃帝の時既に發明せられたりといふ。周に至りては、大學・小學の設けありて、禮・樂・射・御・書・數の六藝を教授し、學事頗る發達せり。

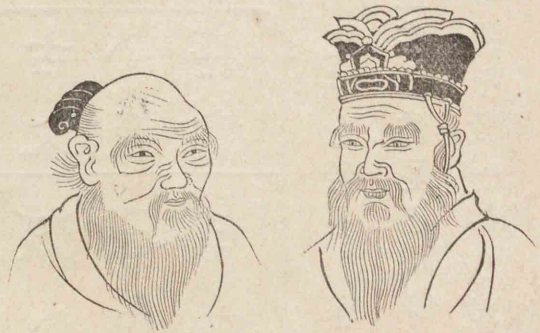


孔子と老子 春秋の世に、孔子は魯に生れたり。(前一五)名は

丘、字は仲尼といふ。初めて儒教を唱へ、修身齊家、治國平天下の道を教へたり。弟子三千人の多きに及ぶ。孔子は不遇の間に身を終りしが、死後に至りて、其の教へ廣く人心を風化せ

△老子道徳
經を著す其
言の五千餘

第六節



老子

孔子

り。老子は殆ど孔子と時を同じうして出づ。楚人なり。姓は李、名は聃、其の教へ無爲自然を尊びて、道家の祖をなせり。

戰國の諸學派 戰國の世には、

學術最も盛に起り、名士輩出せり。

孟子は孔子の學統を繼ぎ、莊子は

老子の學説を受く。楊子は爲我を

主張し、墨子は兼愛を唱ふ。其の他

法家、詭辯家などありて、大に世に行はれたり。

第六章 古代の印度。佛教

第一節

印度アリア人 西紀前二〇〇〇年頃、アリア人種は中央亞細亞地方より南下し來りて、次第に土著のドラヴィダ人を征服し、數多の國を爲せり。

第二節

社會の四階級 土人征服の結果、左の四階級を生じたり。

- (一) 婆羅門 宗教學事を掌る
- (二) 刹諦利 政事軍事を掌る
- (三) 吠舍 商工農に従事す
- (四) 首陀羅 賤役に従事す

第三節

婆羅門教 印度アリア人の宗教を婆羅門教といふ。教理甚だ高尚なるものあれども、僧侶專横を極め、他の三階級を抑壓して、弊害百出せり。

第四節

佛教の興起 西紀前五六四年頃、中印度なる迦毘羅城の

△釋迦年八十にしてクシナガラに歿す

△阿輸迦王

第五節

王子に悉達多あり。初めて佛教を唱ふ。釋迦とは其の族名なり。平等の教を説き



(像石在所島蘭錫) 迦釋

て、階級の弊害を打破せしかば、民心靡然として之に歸依せり。釋迦の滅後凡そ二百年にして、中印度に阿輸迦王あり。深く佛教に歸依するに至れり。

外人の侵入 印度は古來數多の小國に分裂して、互に相

争ひければ、數外人の侵入を蒙れり。西紀前六世紀頃、波斯のダリウス大王印度河畔に入り、西紀前三二七年にはマケドニアのアレキサンダー大王、西印度を攻略したり。

第二編 中古史

第一章 秦の統一

第一節

● **始皇帝の政治** (一)秦王政は自ら始皇帝と稱し、諡を廢す。
 (二)封建をやめて郡縣の制を定め、天下を分ちて三十六郡とす。
 (三)中央政府には丞相(總理)大尉(兵馬帥)御史大夫(百官監察)を置き、全國の政權を收む。
 (四)丈尺衡石を一にし、文字を改め、書を焼き、儒を坑にして、民心の統一を圖る。
 (五)阿房宮の大建築を營み、又屢、海内を巡狩して、天子の威權を示せり。時の丞相は李斯なりき。

第二節

● **始皇帝と匈奴南越** 當時支那北方の遊牧民に、匈奴族あり。屢、北境に寇す。始皇帝は良將蒙恬(まうてん)に兵三十萬を授けて、之

△支那國名の起源



としければ、民心之を恨むもの多し。

第三節

秦の滅亡 西紀前二一〇年、始皇帝崩じて二世皇帝の立

を伐たしめ、且つ萬里の長城を修築せり。(前二)加之、帝は南越をも征略して桂林(廣西省)南(廣東省)海(象郡)を置きければ、秦の國威四方に振へり。故に諸外國は秦を訛傳して支那と呼ぶに至りしといふ。此の如く帝は外夷に對して、能く其の威名を輝したれど、内は自ら豪奢を極め、壓制を事

△趙高鹿を
二世皇帝に
辭して曰く
馬なりと

つや、趙高權を専らにして政大に亂れ、陳勝、吳廣を初として、群雄各地に蜂起せり。此の時、項梁、項籍(字は羽)は兵を吳(江蘇省)に舉げて、楚懷王を立て、劉邦も亦沛(江蘇省)に起る。懷王乃ち項羽、劉邦をして秦を伐たしむ。秦の朝廷は趙高の專横益甚だし、李斯を殺し、二世皇帝を弑し、更に子嬰を立てたり。子嬰立ちて趙高を族殺したれども、劉邦の軍既に逼りしかば、遂に之に降れり。(前二〇六)

第二章 漢の初世

第一節

漢楚の爭 秦滅亡の後、天下は自ら項羽、劉邦、兩雄の爭抗となれり。項羽は彭城(江蘇省)に都して西楚霸王と稱し、劉邦は漢中に在りて、蕭何、張良、韓信(所謂三傑)を用ゐ、兵を練り糧を積み

△項羽を走
下を脱して
八騎も走
二八騎も
日く我れ
を起し七
餘八歳七
て戦未だ
今茲に困
も亡ぼす
非戦のぼ
殺奮す
殺奮す



劉邦 項羽

しが、西紀前二〇五年、劉邦先づ兵を擧ぐ。これより戰爭四年に亘り。劉邦は諸所の戰に敗れしが、遂に垓下(安徽省)の一戰に勝ちて楚を滅ほし、自ら帝位に登れり。(前二〇二)之を漢高祖となす。

高祖の内治

高祖は都を長安(陝西省西安府)に定め、王族及び諸功臣を各地に封じたり。されど韓信、英布の如きをば、相次で之を滅ほし、専ら同族の諸王を以て、帝室の藩屏となししが、亦後年の禍根となれり。

呂氏の亂 高祖崩じて後、呂太后政を攝して、頗る專横な

△韓信曰く
走狗死して
高鳥盡きて
長弓藏る我
るべしと

第二節

第三節

第四節

り。呂氏數人を王とす。呂太后の崩するや、呂祿・呂産等、亂を企てたるが、陳平、周勃と力を協せて之を平げ、代王恒を迎へて位に即かしむ。(前一)文帝これなり。

文帝の治 帝は寛仁の政を布き、自ら節儉を守り、農業を奨励せしを以て、國富み民安し。されど當時諸王漸く傲りて、帝室を輕んずるに至れり。

第五節

七國の亂 文帝の後景帝の位に即くや、鼂錯(チイソク)の勸めによりて、楚・趙・吳等の諸郡を削りければ、吳王遂に反し、膠西・膠東・淄川・濟南・趙・楚の六國も之に應じて兵を擧ぐ。帝は周亞夫を將として之を伐たしめ、其の亂を平げて、全く諸王の驕威をくじきたり。(前一)景帝の後には武帝位に即き、(前一)國威を四方に輝すに至れり。

第三章 漢武帝時代

第一節 儒學の興隆

第一

儒學の振起

りてより、文教漸く復興せり。武帝位に即くに及びて、深く儒を好み、五經博士を置きて、之を奨励せしを以て、儒學大に起り、董仲舒・公孫弘等の大儒輩出し、

漢 文章には司馬相如・司馬遷の二名
武 家を出せり。帝又初めて年號を建てて建元といふ。

漢室の富裕 文帝・景帝の世よ

り、漢室大に富裕なりしを以て、武帝は守成に安んずるを得



△初めて年號あり

第二

ず。遂に四方の諸國を征して、國威を輝かせり。今節を分ちて之を述べん。

第二節 武帝と匈奴西域

△冒頓單于

匈奴は漢高祖時代に、冒頓單于立ちて、漠南・漠北の地を領し、一大邦國を成して、屢、漢に寇せり。高祖之を親征して、白登(山西省)に圍まれ、纔に免れ歸るを得たり。高祖已むを得ずして婚姻を通じ、和親を求めしかば、是より匈奴常に漢室を侮れり。

第一

武帝と匈奴 漢武帝の時、匈奴は軍臣單于の世なり。武帝は前朝の耻辱を雪がんとし、衛青・霍去病の二名將をして、匈奴を伐たしめ、河南の地(内蒙)を取りて朔方郡を置き、益進で匈奴を撃破せしかば、匈奴遂に漠北に遁れたり。(前一)

第二

武帝と西域諸國 當時匈奴の西方に當りて、小國二十餘

△張騫初め
て行く時百
餘人と、唯
一人、還
るを得たり

大國七八あり。所謂西域三十六國是なり。概ね今の支那新疆と、露領中央亞細亞との地なり。武帝は西紀前一三八年、張騫を遣はして大月氏國(カラ)に使せしめ、東西相應じて匈奴を攻めんとす。張騫は途にして匈奴に捕はれしが、遂に脱して葱嶺を喩え、大宛(コカ)康居(サマルカ)大月氏の諸國を経歴し、十三年にして歸れり。匈奴夾撃の目的を達すること能はざりしも、西域諸國これより漢と交通するに至れり。

第三節 武帝と南方諸蠻

第一

武帝と南越 秦の始皇帝、曾て南越を平げしが、秦室亡びて、南越再び獨立し、今の廣東・廣西・安南の地を領せり。加ふるに閩越(福建)東甌(浙江)の二國起りて、互に相争ひしかば、武帝悉く之を平定し、南越の地を九郡に分てり。(前一)

第二

武帝と西南夷 當時西南夷と稱せしは、今の雲南、貴州、四川の地を領せし蠻族なり。夜郎(貴州省)、邛笮(四川省)、滇(雲南省)の諸國あり。武帝また悉く之を服して、數郡を置けり。(前一)

第四節 武帝と朝鮮

△古朝鮮

周武王曾て箕子を封じて朝鮮王とす。其の子孫代々王險(平壤)に都して、朝鮮半島の北部と、遼東の一部とを領せり。四十一代の孫箕準の時に至りて、支那は漢高祖の世なり。燕の人衛滿といふもの、朝鮮に入り、箕準を襲うて之を破る。準、南方に遁れて、茲に所謂古朝鮮は亡びたり。(前一九四)

第一

武帝と衛氏の王朝 衛滿は箕準の故地を領して、次第に境土を擴張し、勢ひ頗る盛なりき。滿の孫、右渠の世に至りて、漢室に對し、輕侮の所爲少からず。是を以て武帝は兵を出して、衛氏を滅ぼし、其の地を分ちて、眞番(盛京省)、臨屯(江原道)、樂浪

第二

(平安道)玄菟(咸鏡道)の四郡を置けり。(前一)

三韓 漢の四郡は、概ね漢江以北の地なりしを以て、江南には、別に馬韓(全羅忠清京畿の大部分)、弁韓(慶尙道南部)、辰韓(慶尙道東北部)の三國あり。三韓の歴史各明かならず。後多年を経て、新羅、百濟の分領する所となれり。

第三

武帝の晩年 武帝は連年四方を征し、且つ神仙の説を好みて、樓閣宮殿を造營せしかば、財政大に窮乏し、白鹿皮を以て皮幣を作るに至れり。隨て重税を課し、酷吏を用ゐしかば、内政漸く亂る。帝遂に悔悟の詔を發し、在位五十四年にして崩じたり。(前一七八)

△武帝曰く、朕即位以來、天下無事、朕所恃者、天下無事、朕所恃者、愁苦せしむると

第四章 漢の末世

第一節 △霍光の攝政

宣帝の中興 武帝の後、昭帝の位に即くや、霍光政を攝して寛大を旨とし、務めて前朝の疲弊を醫せり。昭帝の後、宣帝立つに及びて(前七)賢相良吏を用ゐ、國運再び隆盛なり。故に帝を中興の主と稱す。

第二節

宣帝と匈奴西域 宣帝の時、匈奴なほ北方に跋扈す。帝は烏桓(内蒙)烏孫(新疆)丁零(外蒙)と同盟し、四方より之を攻め破りしかば、匈奴大に衰へたるに、加へてシ支ン呼ン韓カ邪ヤ二單于の争ひありて、呼韓邪敗走し、遂に漢に降りぬ。當時西域の諸國も、亦叛服常なかりしかば、帝は都護府を烏壘城(ウイ)に設け、鄭吉を都護として、天山南北の地を統べしめたり。(前六)

△西域都護

第三節

王莽の篡立 宣帝の後、元帝位に即きて(前八)漢室これより衰ふ。成帝に至りて、外戚王氏權を専らにせしが、王氏の族

△吏民上書して王莽の徳を頌するもの四十八萬に至る

第四節

に莽といふものあり、恭儉を装ひて衆望を得、遂に大司馬となりて、政權を恣にせり。成帝の後、哀帝を経て平帝に至る。王莽帝を弑して、孺子嬰を立て、後二年にして又之を廢し、自ら皇帝の位に即き、國號を新と改めたり。(西紀八年) (以下單に年數を擧ぐ)



王莽の貨錢

● 群雄の蜂起 王莽天下の制度を一變せんとし、官制を改め、井田を復興し、錢貨を改造して、急激に失せ

しかば、人民其の業に安んずる能はず。群雄四方に蜂起し、新は十五年にして滅びたり。

第五章 後漢の初世 (後漢又東漢といふ)

第一節 光武帝

第一

△昆陽の戦

△光武帝曰く人生は足らぬことを知る

又蜀を望む

△瀋異は所謂大樹將軍なり

第二

第二

漢室復興 王莽の失政に當り、漢の一族劉秀も亦兵を春陵(湖北)に擧げ、昆陽の戦に大勝せしが、王莽の滅後、衆に推されて帝位に即き、(五)洛陽に都せり。之を後漢の光武帝となす。時に天下なほ未だ平かならず。蜀には公孫述、隴西には隗囂、河西には竇融などいへるものあり。帝は馮異、吳漢等の諸名將に命じて、漸次に之を征服し、即位より十二年にして全く天下を統一せり。



後漢光武帝

光武帝の施政 帝は王莽の諸政を改めて、漢の制度を復興し、内政を休め、文を起し、外は玉門關

第一

第二

△班超曰く虎穴に入らざれば虎子を獲ずと

(甘肅省)を閉ちて、西域諸國の交通を謝絶し、専心に内治を勵みしかば、天下平安なりしが、其の後明帝、章帝相次ぎて、盛に外蕃と交渉を開けり。

第二節 匈奴西域との關係

明帝と匈奴 光武帝の時、匈奴漸く驕傲なりしが、西紀四九年、南北二部に分れて、勢ひ稍衰ふ。明帝位に即き、竇固を將として、北匈奴を討たしめ、大に之を破れり。(三七)

班超と西域 光武帝の時、西域と漢との交通絶えしが、明帝は班超を遣はして、再び西域に通じ、以て匈奴の勢ひを挫かんとす。超先づ鄯善(ロブノ湖邊)に至りて、匈奴との好を絶たしめ、次で于闐(ホクダシ)、疏勒(カク)、喀什噶爾(カキ)、龜茲(クイ)、等(庫車)の諸國を威服して、皆漢に通ぜしめたり。和帝の世には、班超、西域都護に任ぜら

れて、都護府を龜茲に置き、以て西域の五十餘國を威服せり。
(九)超は更に甘英といふものを、西の方大秦國(馬羅)に遣はししが、達する能はずして還れり。(七)班超西域にあること三十年、老いて歸りしかば、是より西域また匈奴に通じたり。

後數代を経て、桓帝の世に至り、大秦王安敦(フントノキウス)使を發して、海路より日南を過ぎ、洛陽に達せり。(一六六)これより大秦の商人、時々南方に來りて絹を貿易せしといふ。

△羅馬にて
は大に絹を
尊重し金と
同じ重量を
以て交易せ
り

第三節 佛教の東漸

大月氏國と佛教 佛教は、曾て阿輸迦(アソカ)王の布教によりて中亞に入りしが、西紀六〇年頃、大月氏國に迦膩色(カニシカ)迦王(カカ)出づるに及びて、深く佛を信じ、之が布教に盡力せり。これより佛教は漸々東流するに至れり。

第二

○明帝と佛教 後漢明帝は、西域と交通して、西方に佛教あることを知り、蔡愔(サイキ)を遣はして教法を求めしむ。愔即ち大月氏國に達して、經文を得、僧侶を伴ひて歸り、西紀六七年、洛陽に白馬寺を建てたり。之を佛教の支那に傳はれる始とす。

第六章 後漢の末世

第一節

後漢の衰運 章帝の後、は、和帝、安帝、順帝、冲帝、質帝、桓帝六代の間、外戚政權を弄せしに加へて、宦官の横恣を極むるあり。政令日々に亂る。桓帝の世には、李膺(リウエイ)、杜密、郭泰等(清節の士)の諸名士ありて、宦官を惡むこと甚だしく、大に之を非議せしを以て、宦官の徒は、清節の士二百餘人を捕へて獄に下せり。(一六六)之を黨錮の禍といふ。

△黨錮の禍

第二節

黄巾の賊 靈帝の世に至り、李膺等百餘人、宦官の爲に殺されて、帝室紛亂を極めたるに當り、張角といへるもの、鉅鹿キョロク（直隸）に反し、（黄巾の賊）遂に海内争亂の端を開けり。（四一八）

第三節

董卓 靈帝の後を承けて、

太子辨立に及び、袁紹といふもの、宦官二千餘人を殺して其の禍を去れり。時に董卓トクも亦兵を率ゐて都に入り、遂に帝辨を廢して獻帝を立て、專横を極めたり。是に於て關東の豪族、相共に兵を擧げ、袁紹を盟主として以て董卓を伐



孫 權 劉 備 曹 操

許劭曰く問曾て曹操は如何に人我を治むの能はざるを亂世の奸雄なりと

第四節

魏

曹操 董卓殺されて關中亂れ、獻帝出奔せしを以て、曹操は帝を迎へて許（河南省）に居り、これより勢力大に振ふ。先づ強敵袁紹を破り、更に南下して荊州の劉琮を降し、悉く江北の地を領せり。（二〇八）

第五節

吳

孫權 孫堅の子、孫策武略あり。江東を攻略せしが、壯にして死せし故、弟孫權代りて其の地を領す。時に曹操は劉琮を降し、劉備を追ひ、大軍を以て吳に迫る。孫權乃ち周瑜に兵三萬を與へて、之を赤壁（湖北省）に邀へ撃たしめ大勝を得たり。（二〇八）

第六節

蜀

劉備 劉備は曾て袁紹に依り、又劉表（劉琮の父）に依る。諸葛亮

△草廬三顧

が備に仕へたるは此の時なり。既にして劉琮は曹操に降りしが、曹操赤壁に敗れ還りしを以て、劉備は荊州を取り、更に兵を進めて蜀を略し、成都(四川省)に都せり。(三一)是に於て三國對立の形勢全く成れり。就中曹操最も強大なりしが、操薨じて、其の子丕遂に帝位を篡す。後漢こゝに亡びたり。(三二)

第七章 三國 晋の初世

第一節

三國對立 今三國の形勢を察するに、魏は江北の地を領して、土地最も廣く、人材最も多し。吳は江南を領して、土地人材魏に次ぐ。蜀は西方山間の地にして土地最も狭く、人材最も少し。唯諸葛亮の才徳秀でたるあるのみ。故に吳蜀は常に同盟して魏と相當れり。

第二節

△出師表



諸葛亮

諸葛亮

西紀二二二年、劉備の崩するや、諸葛亮誠忠を以て後皇帝を佐け、中原の地を略して、漢の舊業を恢復せんとす。よりに屢(甘肅省)祁山(甘肅省)に

出でしが、魏將司馬懿能く之を防ぎしを以て、諸葛亮は志を果す能はず。終に五丈原の陣中に病死せり。(二三)

蜀の滅亡

諸葛亮の死後、蜀の國勢頓に衰ふ。魏の將鍾會、

鄧艾來り攻むるに及びて、蜀遂に亡びたり。(三六)

晋の武帝

司馬懿大功ありしより、其の子師と昭と、相次

で權を専らにし、昭はやがて晋王に封せられたり。昭の子炎に至り、魏元帝の禪をうけて位に即く、晋武帝是なり。(五六)

吳の滅亡

蜀魏相次で亡びたれど、吳は猶江南に獨立せ

第五節

第四節

第三節

第六節 △武帝羊車に乗り其の行く所を恣にする

り。よりに武帝は杜預等を遣はして、之を滅ぼし、天下また統一に歸せり。(二八)

八王の亂 天下統一の後、武帝漸く佚樂に耽り、武備を去りしを以て、帝の崩後、惠帝の位に即くや、(二九)遂に大亂を來し、骨肉相争ふこと、凡そ十餘年に及べり。之を八王の亂といふ。(汝南王、楚王、趙王、齊王、河間王、成都王、長沙王、東海王)

第七節 △所謂竹林七賢あり、王戎、山濤、阮籍、阮咸、嵇康、向秀、劉伶

清談の流行 當時帝權全く衰へ、北方には所謂五胡、相次で興起せり。されど晋の士大夫は、老莊の學を尊び、清談を好み、實務を卑しめ、誠忠國を憂うる士なし。故に惠帝の後、懷帝、愍帝ともに、匈奴劉氏に滅ぼされたり。

第八章 東晋 五胡 (上)

第一節

匈奴の興起

匈奴は後漢の光武帝の時、降りて内地に雜居せしが、年を経て戸口繁殖し、晋初には今の山西の大部分を領したり。八王の亂に際し、劉淵といふもの匈奴より起り、自立して國を漢と號し、(三〇)更に帝位に登れり。劉曜、石勒の諸士、其の部下に在り。劉淵の子聰、嗣々に及び、石勒、劉曜等を將として晋を攻め、愍帝を執へて之を滅ぼしたり。(三一)

第二節

東晋元帝

晋の滅ぶるや、司馬懿の曾孫司馬睿は建康(吳業)に於て帝位に即き、江南の地を保てり。之を東晋の元帝といふ。帝は王導を相として、稍、中興の美をなせるも、北方を回復する力なかりき。

第三節

趙と燕

北方に於ては、漢劉聰の死後、劉曜、石勒自立して共に國を趙と號し、(劉は前趙、石は後趙)屢、相攻めしが、石勒終に勝ちて、

△石勒曰く、大丈夫事、當に磊々落落とせしむ

△王導は所謂風流宰相なり

然るに如く
て日月の皎
なるべし

△匈奴はト
ルコ種はト
△羯は匈奴
の別種はト
△鮮卑はト
△蜀はト
△巴はト
△蜀はト
△巴はト
△蜀はト

全く劉淵の故地を領せり。されど石勒の死後また國亂れて、燕王慕容儁（三）に滅ぼさるるに至れり。（四五）燕は鮮卑族にして、曾て遼東を領せしが、儁の父皝（六）の時初めて國を燕と號したりき。而して今や慕容儁は中國に入りて（七）鄴（八）（河南）に都せり。

五胡の表			
肥水 前戰			
種族	匈奴	羯	鮮卑
國名	漢	趙	燕
國祖	劉淵	劉曜	慕容皝
種族	氏	羌	
國名	前秦		
國祖	苻健		

匈奴、羯、鮮卑、氏、羌を五胡といひ、巴蠻を加へて六夷とも稱す。巴蠻の李雄は蜀に成國を建てたり。

第九章 東晋 五胡(下)

第一節

北方の統一 曾て後趙の亂るるに當り、氏種の苻健といふもの、長安に自立して前秦國を建てしが、健の死後、苻堅王

△王猛卒せ
し時曰く天
何ぞ我を王
とすやと云
ふ

第二節

△謝安客と
肥水のめと
見至る如く
もとの如く
既にして已
りて室に入
る喜ぶを
甚だ折る
覺えず

第三節

位をつぐに及び、王猛を用ゐて國力大に興隆せり。先づ前燕を亡ぼし、涼（張）代（拓跋）を併せて、全く北方を統一せしかば、塞外の諸國來貢するもの六十餘に及び、苻堅勢ひに乗じて東晋を伐たんとし、大軍を擧げて南下す。

肥水の役 東晋は元帝以後、勢ひ常に振はず。穆帝の時、桓温出でて軍事を督し、成國（蜀也）を滅ぼして、僅に國威を張りしが、未だ北方を恢復すること能はざりき。今や苻堅の來侵に當り、孝武帝位に在りて謝安、宰相たり。謝石、謝玄を遣はして秦軍を防がしめ、肥水（安徽省）の戰に大勝を得たり。（三八）

北方の分裂 苻堅敗れ還るに及びて、北方は四分五裂し、紛亂を極むること五十餘年にして、十二ヶ國の興亡あり。鮮卑の拓跋氏、遂に之を統一して、所謂北朝魏を成せり。

第四節

東晋の滅亡 東晋にては肥水の戦後、孫恩の亂、桓玄の叛、相次ぎて國勢日々に非なり。劉裕といふもの、此等の亂に大功ありて、威權並ぶものなく、遂に帝位を篡せり。(四二)之を宋武帝となす。また建康に都して、所謂南朝を成せり。

五胡表の二				
肥水戦後				
種族	匈奴	羯	氐	羌
國名	北凉 大夏		後凉	後秦
國祖	沮渠蒙遜 赫連勃勃		呂光	姚萇
種族	鮮卑			
國名	後燕	西燕	南燕	西秦
國祖	慕容垂	慕容冲	慕容德	乞伏國仁
			秃髮儁	拓跋珪

二趙(前後)
三秦(前後、西)
四燕(前後、南、北)
五凉(前後、南、北、西)
に成、夏を加へて十六國と云ふ。

第十章 南北朝時代

第一節

後魏の統一 南方に於ては、東晋亡びて宋(南朝)起り、北方に

於ては、後魏興隆せり。曾て苻堅の敗るるや、鮮卑の拓跋珪といへるもの自立して、國を魏と號し(三八)後平城(山西)に都す。之を道武帝といふ。帝の後、再傳して太武帝に至り、頗る武略あり。全く北方を統一して、國威四方に振へり。

第二節

後魏と柔然 柔然はもと匈奴の別種にして、匈奴の故地を領す。其の酋社崙といふもの、曾て屢、道武帝と戦へり。社崙の後、大檀つぎて、復後魏に入寇せしかば、太武帝は兵を進めて大檀を破り、蒙古の地を領したり。

第三節

宋齊の興亡 後魏の太武帝が柔然と戦へるに乘じ、宋文帝は王玄謨をやりて、後魏を伐たしめしが、却て太武帝の爲に破られて、宋朝の勢ひ衰へたり。時に權臣蕭道成といふものありて、遂に帝位を篡ふ。(四七)之を齊太祖とす。

第四節

後魏孝文帝 北朝にては、太武帝より三傳して、孝文帝に至る。(四七)帝は専ら中華の文化を尙び、制度禮樂を改革し、又都を洛陽に遷し、胡服胡語を禁じ、拓跋の姓を元と改めたり。故に帝の治世は、北朝文化の極に達したれど、亦優柔情弱の弊を生ずるに至れり。

第五節

後魏の分裂 孝文帝崩じ(四九)胡太后政を攝してより、北朝大に亂る。關西大都督宇文泰は、孝武帝を奉じて長安に據

第六節

△武帝廢身を佛寺に捨て自ら三寶奴と稱す



梁武帝

り、高歡は孝靜帝を立てて、鄴に都するに及び、魏は東西に分裂せり。(五三)梁武帝 南朝の齊は二十三年にして滅び、梁武帝之に代れり。帝は英武の資を有せしも、深く佛法を信じ

第七節

△楊堅周の政を執ることを九ヶ月、安坐して天下を取り、古より國を篡ふの如きは隋の如きはありと

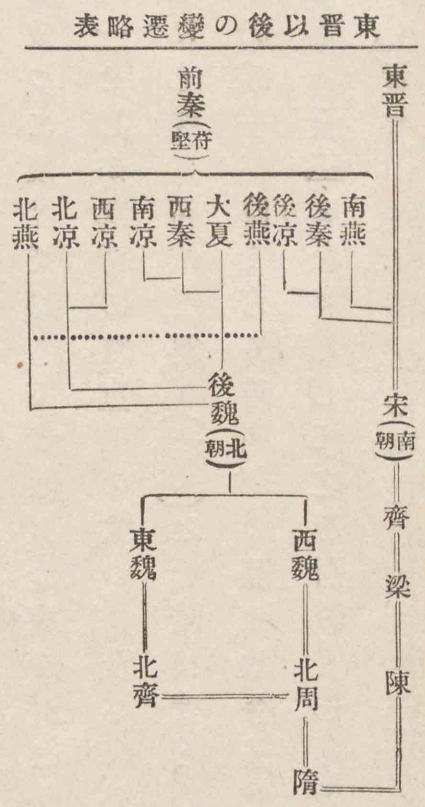
て政を怠り、殊に東魏の反臣侯景を納れしかば、侯景遂に復反して武帝を幽閉し、死に至らしめたり。是に於て陳霸先起りて帝位に即く。(七五)之を陳武帝となす。

北齊と北周 北朝にては、西魏、東魏相争ひしが、東魏の權臣高洋といふもの、帝位を篡して北齊を建て、(五五)西魏の宇文覺も亦帝位に即きて、北周孝閔帝といふ。(七五)其の後北周武帝立つに及びて、頗る英武なり。北齊を滅ぼして、再び北方を統一せしが、武帝の後、宣帝の立つに及びて、外戚楊堅權を専らにし、遂に帝位を篡す。(五八)之を隋文帝といふ。

第八節

隋の統一 隋文帝の時、南朝の陳は、政令甚だしく亂れしかば、帝は晋王廣を將として之を討滅せしめ、天下を統一せり。(五八)東晋以來南北分離せしこと、凡そ二百七十年なり。

△内子北のせら朝の四代天
△内子北のせら朝の四代天
△内子北のせら朝の四代天
△内子北のせら朝の四代天
△内子北のせら朝の四代天
△内子北のせら朝の四代天
△内子北のせら朝の四代天
△内子北のせら朝の四代天
△内子北のせら朝の四代天
△内子北のせら朝の四代天



第十一章 隋の世 唐の興起

文帝の内政 文帝は多年騷亂の後を受けて、位に登りしを以て、賦税を軽くし、刑法を寛にし、専ら民力を休養するこ
 とをつとめたるを以て、國內安らかなりしが、次子晋王廣の
 ために弑せられたり。(六〇)

第二節

煬帝の土木工業 晋王廣即位して煬帝といふ。帝は驕奢を好み、大に東京(洛陽)の宮殿を營み、また遊幸に便ならしめ
 んため、運河を穿ち、或は長城を増築して、人民を苦役せり。

第三節

煬帝の外征 帝は又外征を好み、南は林邑(暹羅)を伐ち、琉
 求(臺灣)を降し、西は吐谷渾を破り、國威四方に振ふ。我が國の公
 然使を遣はして、交通を開きたるも、此の時なり。(西紀六〇七我
 朝)されど煬帝は高麗を伐つに及びて、遼東より敗れ還り、(六
 一)再三の遠征皆功なく、却て國內の大亂を來せり。

群雄蜂起

土木に遠征に、連年苦役せられて、人民等しく
 亂を思ふ。帝が遼東に敗るゝに及びて、群雄四方に蜂起し、或
 は帝、或は王と稱す。李密(南河)竇建德(北河)林士弘(南江)の如き、其の重
 なるものなり。

第四節

第五節

△世民父に勤めて義兵を擧ぐ淵凱を破り今日を成すも亦汝に化して國となすも

唐の興起 此の時に當り、唐公李淵も亦兵を晋陽(山西)に擧げたり。淵の次子世民(後太)英武なりしを以て、夙く既に長安を取り、一旦恭帝を立てしが、淵遂に其の禪をうけて位に登れり。(六一)是を唐高祖となす。當時煬帝は猶江都(江蘇)にありしが、臣下のために弑せられたり。

第十二章 唐初の内政制度

第一節

△玄齡能く謀り如晦能く断ず其も善く魏徴其の没するや太宗悲て曰へりと

貞觀の治 高祖即位の後、凡そ七年にして、殆ど全く各地の群雄を征服せり。西紀六二七年(我が朝)高祖の後を承けて、李世民位に登る。是を太宗といふ。時に房玄齡、杜如晦、魏徴等の諸名士政を佐け、李靖、李勣等の良將、軍務を統へたるを以て、外は國威を揚げ、内は四民平安なり。後世之を貞觀の治といふ。

第二節



唐太宗

貞觀より開元(玄宗)の間に完成したる唐の制度は、頗る能く整備したるものにて、日本中古の制度も、之に則りたるもの多し。次に其の大要を述べん。

官制 中央政府には、先づ尙書、中書、門下の三省ありて、其の長官たるもの、宰相の權を有す。此の他猶三省あり。秘書殿中、内侍といふ。六省合せて政府を組織するも、殊に尙書の權最も重く、其の省内に六部あり。吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部といふ。中央政府の官吏は、凡て京官といへり。又地方の制度を見るに、天下を十道に分ち、道の下には州、州の下には縣あり。州には刺史、縣には令を置き、又道ごとに

第三節

巡察使を置きたり。總じて外官といふ。
兵制 十道の内に、六百三十四の折衝府キョウキョウを置き、折衝都尉を以て、其の長官となす。府には上(千人)中(千人)下(八百)の三等あり。凡て二十歳にして兵となり、六十歳にて免ぜらる。是を府兵の法といふ。

第四節

田制税法 唐にては均田法を用ゐたり。年十八以上の男子には田百畝を給す。内八十畝を口分田といひ、二十畝を永業田といふ。税法には租(田)庸(口)調(戸)の三種あり。

第五節

學制 帝都には國子學・大學・四門學等の學校を置き、地方の州・縣にも亦學校あり。凡て學校の出身者を生徒といひ、別に州・縣より推選するものを郷貢といふ。毎年生徒・郷貢を考試して、及第者を官吏とす。

第六節

刑法 刑法には笞・杖・徒・流・死の五種あり。皆相當の贖罪法あれども、君父に對する大惡は、贖ふ能はざるものとする。

部	六	省	六
中書	吏部	選任考課	
門下	戸部	戸口班田	
尚書	禮部	祀祭貢舉	
秘書	兵部	軍事	
殿中	刑部	律令刑法	
內侍	工部	百工山澤	

刑 法 略 表				
笞	杖	徒	流	死
十ヨリ五十	六十ヨリ百	一年ヨリ三年	二千里ヨリ三千里	絞 斬 二等

税 法 略 表		
租	庸	調
百畝ニ付 粟二石	一年ニ付 二十日	絹ハ二丈 布ハ二丈四尺

第十三章 唐初の外征

總叙 西紀六四九年、太宗崩じて、高宗其の後を承く。此の二帝は、數、外征を企てて、領土を擴張し、實に漢人種の最盛時

代をなせり。

第一節

唐と朝鮮

半島ト一交渉

△高麗百濟の建國

△新羅の建國

△神功皇后の三韓征伐

漢の武帝、古朝鮮を征して、四郡を置きしが、西紀前三七年、扶餘人高朱蒙といふもの起り、北方に高句麗國(後略して高麗)を建てたり。既にして朱蒙の子温祚は、南馬韓を滅ぼして、百濟國を成せり。(前一八年)

高麗の建國に先だつこと凡そ二十年、朴赫居正といふもの、辰韓の故地に新羅國を建てて、三國相對立せり。

三國のうち、新羅最も我が國に近し、皇紀八六〇年(西紀二〇〇年)神功皇后これを征服し、併せて高麗、百濟を降し、後弁韓の故地に、任那府を置きて韓半島を支配せり。されど新羅は叛服常なく、我が欽明天皇の朝、遂に任那府を陥れたり。(五六二年)

隋と韓

隋朝起るに及びて、新羅は好を通じたれど、高麗

第二

は却て遼西の地を侵したるを以て、隋煬帝再三之を征して効なかりき。(第十一^章參照)既にして唐朝興起せしかば、新羅は又好を通じて保護を求めたり。

唐と韓

西紀六四四年、唐太宗、高麗を親征して克たず。高宗に至りて、新羅、百濟相争ひしかば、新羅を助けて百濟を伐ち、之を滅ぼせり。(六六〇)時に百濟の王子豐璋、我が國に在りしを以て、天智天皇は阿倍比羅夫等を將として、豐璋を百濟に送らしめ、復興を謀りしが、成らずして已めり。

高宗、百濟を滅ぼして後、更に李勣を將として、高麗を伐たしめ、又之をも滅ぼせり。(六六八)よりて高宗は、安東都護府を平壤に置き、以て韓半島を支配せり。

第二節 唐と突厥吐蕃印度

北方は、匈奴衰微の後、鮮卑代りて之を領し、鮮卑の後は柔然これに代れり。柔然が曾て後魏の爲に破らるるや、突厥族(土耳其種)また之に代りて、北方を領せり。

突厥の二部 突厥は曾て阿爾泰山附近に在りしが、柔然を破りて其の故地を領し、(五五)更に兵を進めて中央亞細亞を攻略し、甚だ廣大なる版圖をなせるを以て、自ら東西二部に分れたり。

唐と東突厥 東突厥は、隋末に於て勢力強大を極めたり。唐の世となりて、其の國力漸く衰へしかば、太宗は李靖を將として、終に之を討滅せり。(六三)

唐と西突厥 唐太宗、東突厥を滅ぼし、更に高昌國(吐魯蕃地方)を略して、直に西突厥と境を接せしが、唐高宗の時、西突厥の

第一
△突厥は王
を可汗とい
ひ其の配を
可教といふ
△東突厥は
都斤山を本
據とす
△西突厥は
千泉に都す

第三

第二

第四

衰微に乗じて、終に之を征服せり。(六八)

唐と吐蕃 吐蕃は圖伯特種にして、多く世に知られざりしが、唐初に至りて勢ひ大に振ひ、西藏を領して數、唐に寇せり。太宗、高宗相次で之を征せしが、侵寇久しく已まざりき。

唐と印度 唐太宗の時、中天竺に戒日王ありて、政令殆ど全印度に及び、國勢頗る隆盛なりしが、使を唐に遣はし來れり。太宗も亦王立策を遣りて、好を通じければ、これより印度の諸王、唐に朝貢するもの多かりき。

第三節 唐と諸外國との交通

唐の盛勢 太宗、高宗二代に於て、唐の版圖は著しく擴張し、東は朝鮮、北は外蒙古、西は中央亞細亞に至るの地を領したるを以て、南は眞臘(柬埔寨)閩婆(暹羅)までも朝貢するに至れり。

第一

第二

されば四邊の諸國民との交通も、亦甚だ盛に起れり。

日本と唐

我が國と支那とは、漢時代に於て、既に私人の

交通ありしは疑なく、之を委奴國王の印

に徴すべし。されど我が朝廷と、彼の政府

との間に、初めて交通を開きたるは、我

が推古天皇の時、小野妹子を隋に遣はし

たるにあり。唐朝に至りては、我が國より留學生を送ること

愈多く、有名なる阿倍仲麿、吉備眞備が留學せるは、唐玄宗の

世なりき。かくて我が國は、朝典、國法概、唐朝に倣ふに至れり。

唐とサラセン帝國

西方に於ては、天山南路よりして、西

域地方と通商し、殊に亞拉比亞人とは、寧ろ海路によりて通

商盛に行はれたりき。亞拉比亞人は、西紀五七〇年、モハメツ

△此印は天
明四年筑前
賀那郡志
賀島の石窟
より發見す
賀島黄金方
七分八厘餘
高四分



漢委奴國王

第三

△アラビヤ
人は犀角象
牙香料等を
輸入せり



モハメド

ド生れて、イス

ラム教を唱へ、

サラセン帝國

を建てし時よ

り、始めて大に

著はれたり。其

の後代々の、カ

リフ(モハメツ
ド相續者)

は地を四方に拓きて、東、インダス河に及び、一方には宗教を

弘め、又一方には通商貿易をつとめたり。されば亞拉比亞人

の支那南方に航し來るもの次第に多く、唐中宗の頃には、廣

州(廣東)泉州(福建)に來集するもの、數萬人に及びたりと云ふ。

第十四章 唐の中世

第一節

武韋の禍 高宗は晩年、武皇后に政を委ねて、茲に禍の端を開けり。高宗の崩後、武后は中宗を廢し、睿宗を斥けて、自ら位に登り、國を周と號せり。(六九)之を則天皇帝といふ。當時張柬之等の如き名士、猶朝に在りしを以て、遂に武氏に迫り、廢帝中宗を位に復せしめられたれど、是より又韋后權を弄するこゝと甚だしく、後には帝を弑するに至りしかば、皇族劉基、兵を起して韋后を弑し、睿宗(劉基の父)を立てたり。(七一)

開元の治 睿宗の後、玄宗(隆基)位を承け、(七一)精勵治を圖る。外は十大鎮を置きて、四方の戎狄に備へ、内は姚崇、宋璟等の賢臣を擧げて相とし、國家平安なり。之を開元の治と稱す。

第二節

△唐の賢相前には房杜を稱し、後には姚宋を稱す。他人比すを得ず。

第三節

△安史の亂に當り、忠烈なるもの多かり。張巡、顔杲卿、南霁雲、雷萬石、李光弼等、其の著しき者なり。腹中何物か、對へて曰く、赤心ありのみと。

△郭子儀、徳共、高勳、威名に服せり。

第四節

安史の亂

玄宗在位久しきに及び、楊貴妃を寵して漸く政を怠り、安祿山を信任して、平盧、范陽、河東三鎮の節度使を兼ねしむ。祿山終に反して洛陽を陥れ、大燕皇帝と稱せり。(五七)郭子儀、李光弼等、共に賊を伐ちたるが、賊勢盛にして遂に長安に逼りしかば、玄宗は蜀に奔り、位を肅宗に傳へたり。既にして祿山の子慶緒、父を弑して自立し、賊將史思明また慶緒を殺して、自ら燕帝と稱せしが、李光弼に破られたり。程なく史思明は、其の子史朝義に殺され、賊勢衰微せしかば、代宗(肅宗の次)伐ちて之を平げたり。(七六)



郭子儀

吐蕃南詔

安史の亂後、吐蕃また入寇して、長安を陥れし

が郭子儀撃て之を退けたり。此の時吐蕃の屬領たる南詔(雲南の蠻族)獨立して、國を大理と號し、又數唐に寇せしが、久しからずして衰微せり。

十大鎮表				鎮名	所在地	防禦方面																							
平盧	范陽	河東	朔方	河西	營州(內蒙古)	幽州(今北京)	太原(山西省)	靈州(甘肅省)	涼州(甘肅省)	室韋 靺鞨	契丹	回紇	回紇	吐蕃 回紇	隴右	安西	北庭	劍南	嶺南	鄯州(甘肅省)	龜茲(新疆省)	庭州(新疆省)	益州(四川省)	廣州(廣東省)	吐蕃	西域諸國	西域諸國	吐蕃 苗族	南海諸國

鎮の長官は節度使なり。各數州の財政兵馬の權を有す。

第十五章 唐の衰滅

第一節

藩鎮の跋扈 安史の亂後、賊の降將を節度使に任じたりしかば、節度使次第に増加して、漸く驕横なるに至れり。殊に德宗(七八)の世には、魏博、成德等の諸鎮、朝命を拒みたりしが、朝廷之を征服すべき兵力なかりしを以て、藩鎮の跋扈愈甚だしきに至れり。

第二節

宦官の横恣 地方には藩鎮跋扈するに當りて、朝廷には又宦官の横恣あり。宦官は玄宗の時より、初めて勢力を得、遂には皇帝の廢立をも恣にするに至れり。憲宗、敬宗の如き、皆宦官に弒せられしかば、文宗之を除かんとして成らず。其の禍ひ益甚だし。

第三節

朋黨の争 藩鎮宦官の禍あるに當りて、又朋黨の争あり。文宗の世に、李德裕は李宗閔、牛僧孺と隙を構へ、互に黨をな

△文宗歎じて曰く河北の賊を去る

源田!!!

は易く朝中
の朋黨を去
るに難しと

して相争へり。爾來十數年の間、兩黨の争ひ甚だしく、政令爲
に亂る。宣宗(八四)の世に至り、牛李相次で死し、黨禍漸く已め
り。

第四節

△李克用は
所謂龍
を用ゐる
なり能く
其兵を
賊之を
へり
軍と
い

唐の滅亡 藩鎮、宦官、黨争の禍ひ相次ぎて、唐朝は既に衰
滅に近づけり。されば僖宗の世には、黃巢の賊起りて、長安を
陥れ、一時猖獗を極めたり。李克用等の力によりて、僅に之を
平ぐるを得しが、宦官猶專恣なりしかば、宣武節度使朱全忠、
兵を進めて宦官を鑿にし、時の皇帝昭宗を奉じて、洛陽に遷
れり。程なく全忠は帝を弑して終に唐朝を滅ぼし、自ら帝位
に即けり。(七九)之を梁太祖となす。

第十六章 漢唐の學術宗教

第一節

儒學 秦代に書を焚きて、學術一般に衰微し、漢高祖に至
りて、稍復興せり。漢武帝が董仲舒の所説に基きて、儒學を獎
勵したる結果、文運一時に隆起し、名儒輩出せり。後漢の末に
は大儒鄭玄ありて、能く兩漢の儒學を大成したりといふ。三
國末より晋南北朝には、老莊の學、並に佛教流行して、儒學振
はず。唐に及びて再び大に興隆せり。太宗學術を好み、孔穎達
等に命じて、五經正義を作らしむ。後韓愈出でて益、儒學を發
揮し、老佛を排斥せり。

△賈誼の論
策、司馬遷
の史、班固
の史、司馬
相如の辭、
賦、三絶なり
文は所謂漢
丕、曹操、曹

文藝 前漢には賈誼、司馬遷、司馬相如あり。共に文章を以
て著はる。後漢には史家班固あり。三國の世には、曹操父子、み
な詩に巧なり。晋時代の詩人としては、陶淵明を推して第一
とすべし。唐に至りては、文學の隆盛なること前古に比なく、

△李杜出でて唐詩大に興り遂に後世の模範となる

第三節



韓愈

李白

詩には李白・杜甫を初めとして、白居易其の他の名家輩出し、文章には韓愈(退之)・柳宗元(厚子)あり。共に六朝以來の弊風たる四六駢體の文を排斥し、古文の振興に力を用ゐたり。
宗教 漢時代には、佛教・道教のみなりしが、唐に至りては外國交通の結果として、數多の宗教傳來せり。左に項を分ちて述べん。

(一) 佛教は、後漢の明帝の時、支那に傳來してより、年を経て次第に傳播し、晋時代には甚だ隆盛に趣きたり。東晋末の頃、長安の僧法顯は印度に入り、錫蘭を経て南洋より歸れり。南

△唐代の八宗
三論、法相、律、華嚴、天台、眞言、淨土

北朝の世には、梁武帝深く佛教に歸依したるに當り、印度の達磨・支那に來りて禪宗を傳へたり。唐に至りては、太宗の時、僧玄奘印度に入り、十七年にして歸り、數多の經論を譯述し、又高宗の世には、義淨といへる僧も印度に遊び、二十四年を費して歸れり。此の如く唐代の佛教は頗る盛大なりき。

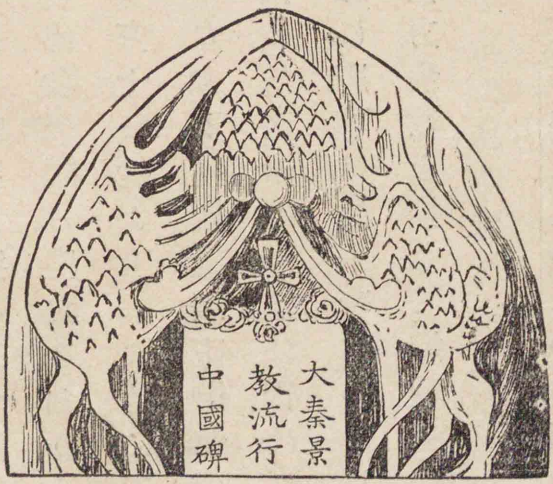
(二) 道教は、もと神仙を談ずる方士の徒より起り、遂に老子を以て、其の教祖となせるものなり。秦皇・漢武以下、神仙の説を信ずるもの多かりき。晋時代には老子の學盛に行はれ、隨て道教も盛大なるを致せり。殊に唐朝は、姓の李なるを以て、老子を祖とし、武宗の如きは極力佛教を排して、道教を保護せり。

(三) 景教は基督教の一派にして、ネストリウスの創唱せる

△景教の碑
は、大徳宗の
景浄寺の長
に立つる所
なり。明末
に發見せら
る。

△摩尼教の
寺を摩尼寺
といふ。

ものなり。唐太宗の時、阿羅本といふもの、之を支那に傳へて、一時流行せしことは、古碑に徴すべきなり。
(四) 祆教は、波斯太古の世、ゾロアスターの創唱せる宗教なり。火を拜するを以て、普通に拜火教といふ。唐に傳はりて一時行はれたり。
(五) 摩尼教は、西曆三世紀の頃、波斯人摩尼の開く所にして、拜火教に基督教を混じたるものなりといふ。亦唐に傳はれり。



碑頭

と、共に四方に流行して唐に入りぬ。されど武宗排佛の際に、景教以下概ね廢せられたり。



ゾロアスター

(六) 回教はマホメツド教なり。回紇人の歸依せしを以て此の名あり。亞拉比亞の國勢

第十七章 五代 契丹

後梁、西紀九〇七年、後梁太祖(朱全忠)位に登りて、汴(河南)に都せしが、其の政令の及ぶ所は、中央の一部局に過ぎざりき。

第一節
△朱全忠、李存勖と戦て大に敗れ、歎じて曰く

子を生まば
當に李亞子
(存)の如
くなるべし
と

第二節

晋王李克用もと朱全忠と隙ありて、數相戦ひしが、克用の子存勗(キヨク)に至り、遂に後梁を滅ぼして後唐を建てたり。(三九二)

後唐

莊宗(存勗)武略あり。岐蜀の兩國を服して、勢ひ盛なりしが、後聲色に耽りしかば、將士離叛し、明宗を推して位に即かしたり。帝は五代諸帝の中、明君の一なりしが、崩後に至りて、間もなく唐は亡び、(六九三)後晋之に代れり。

第三節

契丹

契丹は滿洲人種の一派にして、代々潢河(古内蒙)の邊にありしが、後梁の始めに耶律阿保機(ホキ)出づるに及びて、自ら皇帝と稱せり。(六九一)是を契丹の太祖となす。太祖西は吐谷渾、東は渤海を滅ぼして、領土頗る廣く、契丹の勢ひ大に興隆せり。

渤海は、もと靺鞨族(金と同種)にして、其の酋長祚榮といふもの、

△渤海國
粟末靺鞨
靺鞨
黒水靺鞨
靺鞨
ナ
金
ト
ル

第四節

初めて大に國勢を張り、唐玄宗より渤海郡王に封せられたり。其の地、西は契丹、南は新羅と相接す。渤海王武藝は、我が聖武天皇の御世に、高仁義を遣はして來聘せしめ、爾來通交絶えざりしが、契丹太祖に滅ぼされぬ。(九二六)

後晋

後唐の反將石敬瑭は、契丹太宗の援を借りて、後晋を建てしかば、北方十六州の地を契丹に獻じ、自ら臣と稱せり。出帝に至り、唯孫と稱して臣といはざりしかば、太宗怒りて後晋を討滅し、(六九四)翌年汴に入り尋で國を遼と稱せしが、三ヶ月にして北歸せり。

後漢

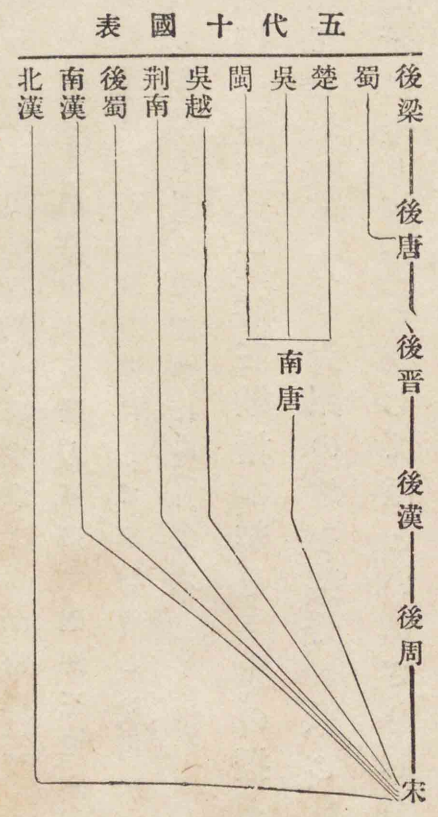
遼(契丹)の太宗の汴を去るや、河東節度使劉知遠、汴に入りて後漢を建てしが、二代五年にして亡び、宿將郭威推されて位に登れり。(九五)之を後周太祖とす。

後周

太祖の後、世宗位に即きて、頗る英武なり。北漢と遼

との連合軍を高平(山西)に撃破して、國威大に振ひしが、在位久しからずして崩じたり。(九五)たまく遼漢の兵、また入寇せしかば、將士等趙匡胤を推して帝位に即かしむ。(九六)之を宋太祖とす。

五代通じて五十四年、諸帝は唯中央の一局部を支配せしのみ。此の間四方には別に諸小國の興亡あり。左表の如し。



第十八章 宋遼夏の對立(上)

第一節

宋太祖の内政

太祖の帝位に即くや、先づ宰相趙普の策を用ゐて、藩鎮の弊を除かんことを務めたり。(一)從來の節度使を廢して、新に文臣を任用し、(二)轉運使を置きて、各地方の財政を掌らしめ、(三)禁旅を分遣して、邊城を守らしめ、以て財政・兵馬の權を悉く朝廷に收め、多年の積弊を除きたり。



宋太祖

天下の統一

太祖は内政を整備すると、共に諸將を遣はして、荆南・後蜀・南漢・南唐の諸國を順次に討滅し、更に北漢を

第二節

△宋の名將は曹彬、潘美

討たんとし、果さずして崩じたり。(六七)太宗其の後を承けて、北漢を滅ぼし、進みて遼と争へり。

第三節

△澶州の役

宋遼の和戰 宋太宗の兵を出して遼を攻むるや、遼には名將耶律休哥ありて、數宋軍を破れり。宋眞宗位に即くに及び、遼聖宗大舉して南侵せしかば、眞宗之を防ぎて澶州(直隸省)に至り、やがて和を講じて、宋より歲幣を納るることとなせり。(一四〇)

第四節

遼の極盛 聖宗の世は、遼の極盛時代なり。其の領土、西は天山に及び、南は今の直隸、山西の一部を含み、北は蒙古全部、東は海に至れり。國中に五京(東京、上京、中京、南京、西京)を有して、國勢甚だ振ひしが、聖宗の崩後は、(三一〇)漸々衰運に傾けり。

第五節

西夏の興起 西夏の祖は黨項(タングット)の人にして、拓跋思恭とい

△元昊の父 德明曰く、我族三十年、錦を衣る。思恭は宋の臣にして、自ら大夏皇帝と稱せり。(三八〇)時に宋は仁宗(眞宗)位にありしが、李元昊屢西邊を犯したり。

第六節

宋遼西夏の媾和 宋仁宗は、韓琦、范仲淹の二名將をして、西夏を防がしめしに、遼興宗も、亦大舉南侵せんとす。宋は已むなく歲幣を増して遼と和し、(四二〇)次で西夏も宋の歲幣を受けて和を講じ、三國一時は無事なるを得たり。

第十九章 宋遼夏の對立(下)

第一節

神宗と王安石 宋朝にては、太宗、眞宗、仁宗、英宗數代の間、或は遼、或は西夏の爲に、常に屈辱を蒙りたるを以て、神宗の

△に宗の時
王安石は釣
魚の宴に侍
し誤りて半
を食す終に
たれど悟り
之を食ひ盡
せり

第二節

△司馬光曰
過きたるも
の過ぎたる
生爲す所未
だ人に對し
たらざる者
しと



司馬光

位に即くや、(六七)王安石を登用して、専ら富國強兵の策を講ぜしめ、以て年來の國辱を雪がんとせり。王安石博學にして識見あり。富弼、歐陽修、司馬光等の反對あるにも屈せず、斷乎として新法を實行せり。神宗は内政を安石に委ね、更に大に外征を企てしが、先づ交趾を伐ちて功なく、西夏と戦ひて敗れ、一事も意の如くならずして已めり。

守舊派と新法派 王安石、一度新

法を發布してより、宋朝には自ら二大黨派を生じたり。哲宗(神宗)の時、司馬光入りて相となり、悉く新法を廢せしが、司馬光逝きて後は、新法派の蔡京等、また朝に進み、守舊派を貶し

第三節

て新法を復興せり。殊に徽宗の世には、蔡京の專恣最も甚だしく、次第に宋朝の衰微を來せり。
遼の衰運 遼は聖宗より興宗、道宗を経て、天祚帝に至り、衰運甚だしきに加へて、背後に金の興起せるあり。終に之が爲に滅ぼさる。

王安石の新法
富國策(青苗募役、市易等の諸法)
強兵策(保甲法、保馬法)

第二十章 宋遼金の盛衰

第一節

△鞞鞞はツ
ンクス種
△生女眞の
長阿骨打

金の興起 金は即ち女眞にして、もと黑龍江上に居り、黑水鞞鞞と稱せらる。遼の盛時に當りて、熟女眞、生女眞の二部あり。西紀一一一三年、阿骨打といふもの、生女眞の長となる

に及びて、屢、遼軍を破り、遂に國號を金と稱し、自ら帝位に即けり。(二五)之を金太祖とす。

第二節

金宋の同盟 金太祖の時、宋は徽宗位に在り。金と相合して遼を夾撃せんとし、次の如く條約す。第一、金は北より遼の中京を攻め、宋は同時に其の南京を撃つこと。第二、功成らば、曾て後晋(石敬瑭)の遼に與へたる地は、宋これを取り、他は金これを領す。第三、宋は遼に納れし歲幣を、金に納るること。

第三節

遼の滅亡 金太祖即ち兵を進めて、遼の上京・中京・西京を陥れたるに、宋將童貫は遼の南京(燕京)を攻め、却て敗北せり。太祖依りて自ら南京を陥れ、前年の約を破棄して、僅に燕京附近六州の地を宋に與へ、且つ歲幣を増さしめたり。(二一)遼天祚帝は、西夏に奔らんとししが、西夏また金に通ぜしかば、帝

△耶律大石西に走る

第四節

は金兵に捕へられ、遼亡びたり。(二五)されど遼の一族耶律大石は、西走して中央亞細亞に入り、西遼國を建てたり。

△二帝北去して所謂北宋終りを告ぐ

第二十一章 南宋と金

第一節

宋の南遷 金軍の北歸するや、欽宗の弟構、南京に於て即位す。之を高宗といふ。金軍また大に南下せしかば、高宗之を避けて南遷し、終に都を臨安(即杭州浙江省)に定めたり。(三一)是より

宋金の交戦 金太宗即位するに及びて、宋の虚弱なるを察し、大兵を出して南下せり。宋徽宗大に恐れ、位を欽宗に譲りて金に謝し、地を割き、金帛を納れて和を請ふ。其の後、宋朝は約に背きしを以て、金軍再び南下し、徽宗、欽宗を捕へて北に還れり。(二七)是より河北の地、金の領となりぬ。

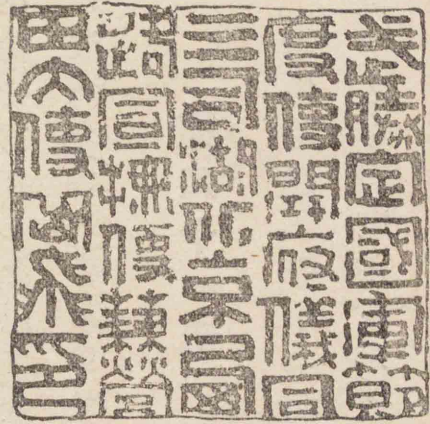
四十三
三十一
二
一

△岳飛遺印
文定曰武
勝定曰武
度使開軍
同三司湖
京西路宣
使兼營田
岳飛印

△金人曰岳家軍易動岳家難動

△岳飛曰文臣惜死士人惜生

第三節



岳飛の遺印

以後を南宋といふ。

秦檜と岳飛 この時宋朝には、主戦派と和睦派とあり。岳飛、韓世忠等の諸將は、飽まで北方を恢復せんとし、大に金軍を破りしが、秦檜は固く和議を主張し、岳飛を召還して之を殺し、遂に和議を結へり。(一)西は大散關(陝西)東は淮水を以て境界とす。(二)宋より銀二十五萬兩、絹二十五萬匹の歳貢を金に納るること。(三)宋の君主は金の封册を受くることとなり、これより秦檜の専恣甚だしく、大に忠良を貶斥せり。

宋金の平和 宋孝宗(高宗)位に即くに及びて、頻りに北方

△時人世宗を稱して小堯舜といふ

第四節

第一節
△漢唐訓詁の學
△宋代の理學

の回復を企てしが、時に金は中興の明主たる世宗位に在りしを以て、兩國遂に相和し、稍、戦亂の弊を醫するを得たり。
宋金の衰勢 宋にては孝宗より一代を経て寧宗に至り、韓侂胄(ダク)といふもの威權を弄して、頗る國政を紊亂し、また無謀の外征を試み、金を伐ちて敗北せしかば、金章宗大舉して江北を蹂躪せり。これより宋朝全く衰へ、金また振はざるに當り、北方に蒙古興隆せり。

第二十二章 宋の學術宗教

儒學 漢唐の儒學は、専ら經書の字句を解釋することを務め、所謂訓詁(クニカク)の學なりしが、宋に至り學風一變して、更に大に興隆せり。所謂理學是なり。理學を創唱せしは、周敦頤(濂溪)に

△朱陸の二派

第二節

△蘇老泉二十七歳にして初て大に



宋の文章大に興れり。それより蘇洵(老泉)蘇軾(東坡)蘇轍(潁濱)王安石・

蘇東坡 周敦頤 黃庭堅

して程顥(明道)程頤(伊川)つぎて出で、南宋の朱熹(晦菴)に至りて大成せり。朱熹と同時に陸九淵(象山)あり。悟道を主として一派をなせり。

文藝 歐陽

修一度出でて、

書を讀み三度科擧に應じて落第す。歸て著作所勤の文數百篇を燒き更に五年に文章大に進む

第三節

曾鞏等の諸名家相次で輩出せり。詩には歐陽修・蘇東坡・黃庭堅・山谷等最も著はる。南宋に至りて陸游(放翁)あり。亦詩を以て大名あり。

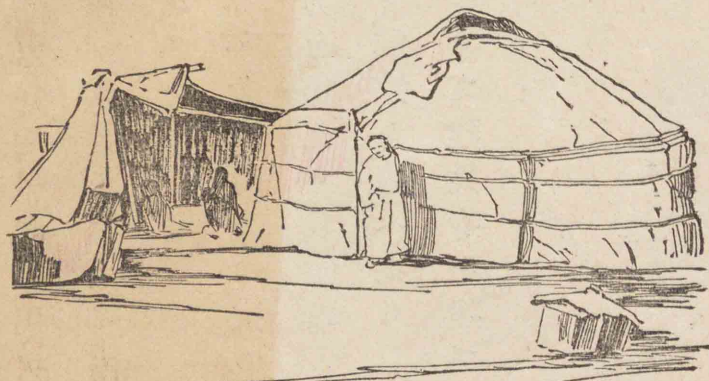
宗教 佛教は宋の世に於て甚だ盛なり。殊に禪宗最も勢力を得たり。我が國の僧榮西及び道元など、相次ぎて宋に入り、禪宗を傳へ來りしのみならず、宋の僧道隆は、我が鎌倉に來りて建長寺を建てたり。

第三編 近古史

第一章 蒙古の興隆(上)

第一節

△蒙古人は帳幕内に住して狩獵を多し一夫多妻の習慣あり男子は七八歳より騎馬を習ふ



(時現)幕天の人古蒙

蒙古部 斡難河畔の地に蒙古部ありて、其の民遊牧を事とし、久しく遼と金とに隸屬せり。西紀一九四年頃、鐵木眞其の部長となるに及びて、次第に近隣の諸部落を征服し、勢ひ強大なり。是に於て鐵木眞は、大汗の位に即き、成吉思汗と稱せり(〇六)

成吉思汗の南征 成吉思汗更

第二節

に南して西夏を降し、又金を伐つ。金宣宗、和を請ひ、後、都を汴に遷す。是に於て成吉思汗再び南侵して、悉く河北の地を取り、更に哲別を將として西征せしむ。

第三節

△西遼國又は黑契丹といふ

哲伯の西征 當時亞拉比亞人の勢力既に衰へて、セルジューク土耳其人、之に代り、中亞を領せしが、西紀一〇九二年頃より、又衰運に傾きたるに際し、遼の一族耶律大石、中亞に入り、土耳其人を滅ぼして、西遼國を建てたりき。

成吉思汗曾て乃蠻部を滅ぼししに、其の族屈出律遁れて西遼に入る。時に西遼の王は直魯克(大石の孫)といひ、國力振はず、屈出律終に之を滅ぼし(〇一三)漸く勢を張りて、成吉思汗に復讐せんとす。哲伯乃ち成吉思汗の命により、西征して屈出律を滅ぼし、西遼の故地を取りて、花刺子模と境を接せり(一一八)

第四節

成吉思汗の西征 當時花刺子模國王モハメツドは、波斯

△ホラズムの都はサムルカンド

△蒙古兵初めて露國に入る

全土を領して、勢力強大なり。偶、蒙古商人を殺戮せしを以て、成吉思汗大舉して之を伐つ。(一八二)モハメツドは、蒙古の兵氣盛なるに懼れ、裏海中の一小島に遁れ、茲に死せしかば成吉思汗は、全く花刺子模を征定し、西紀一二二四年軍を返せり。曾てモハメツドを追ひて裏海に至り、更に阿羅思(露國)の地に入り、諸侯の兵を撃破したる速不台哲伯の二將も、亦同年に東歸せり。

第二章 蒙古の興隆(中) 金の滅亡

第一節

△成吉思汗崩す

第二節

西夏の滅亡 成吉思汗は東歸の後、西夏を伐ちて之を滅ぼし、更に金を伐たんとし、果さずして崩じたり。(二七二)

金の滅亡 成吉思汗の第三子阿窩台位を承く。之を太宗

第三節

△リীগニツの戦

第四節

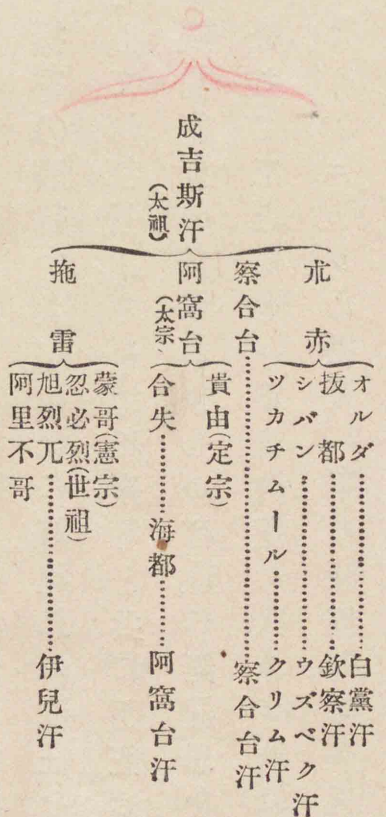
△金黨汗國

といふ。都を和林に定め(二九二)又父の志を繼ぎて、金を伐てり。金哀宗蔡州に走りて宋の援を請ひしが、宋理宗既に蒙古と好を通ぜしかば、却て夾撃して金を滅ぼせり。(三四二)

拔都の西征 太宗は、更に阿羅思の遠征を企て、拔都を將として海都貴由蒙哥速不臺等と共に西征せしむ。(三六二)拔都は武勇絶倫の良將なりしかば、直に阿羅思を征定し、更に軍を分ちて二となし、一軍は波蘭に入りて、北歐諸侯の聯合軍をリীগニツに破り、一軍は拔都自ら將として、匈牙利に入り、連戦連勝せしが、太宗の訃音に接して兵を班せり。(四一一)かくて拔都は阿羅思に留り、薩來(ガヘル)に都して、欽察汗國を建てたり。之を金黨汗國ともいふ。

太宗家と拖雷家 太宗の後、貴由位に即く(四五二)之を定宗

といふ。定宗は在位三年にして崩ぜしかば、拖雷の子蒙哥位を承く。之を憲宗といふ。是に於て太宗の子孫不平を抱き、遂に蒙古大帝國分裂の原因を醸すに至れり。蓋し蒙古には一定の相續法無かりしなり。



第三章 蒙古の興隆(下) 宋の滅亡

第一節

旭烈兀の西征

憲宗の位に即くや、弟忽必烈をして、南方

を征定せしめ、(五二)又、弟旭烈兀をして、西方波斯を伐たしむ。

(五三)旭烈兀は波斯に入りて、バグダッドを陥れ、更に西して小亞細亞を攻略し、ここに伊兒汗國を成せり。

△伊兒汗國

第二節

忽必烈の南征

忽必烈は先づ大理國(雲南地方)を降し、次で吐

蕃(藏)を伐ち、更に兀良合台をやりて、

交趾を征す。交趾は陳氏の王朝なり

しが、終に蒙古に降りぬ。程なく憲宗

崩ぜしかば、忽必烈は宋を伐つこと

を果さず、之と和して歸り、自ら大汗

の位に登れり。(六〇)之を世祖といふ。

世祖忽必烈



△世祖國號を立て、元といふ

第三節

宋の滅亡

宋朝にては、理宗、度宗の世を通じて、賈似道と

燕京に都し、又國號を建てて元と稱せり。

△天文祥
博學能文
厚忠義
元兵に敗れ
燕京に捕へ
獄に送らる
氣なはらる
作はらる
就なはらる
年の四十七
時に死す

いふもの權を弄し、驕横極りなし。元朝に對しても、敢て前年の和約を守らざりしかば、元世祖遂に大に兵を出して南侵す。元將伯顔、連戰連勝して恭帝を降し、臨安を取れり。文天祥、陸秀夫、張世傑等は、帝昺を擁して崖山(廣東省)に據りしが、元兵又來り逼るに及びて、軍皆敗れ、宋滅びたり。(七一七—七一九)

第四章 元の盛運

總叙

太祖より以下、元の諸帝、概ね皆英武にして外征を事とし、歐亞二洲に跨れる大帝國を創建し、世祖に至りて、隆盛の極に達したり。

第一節 元と高麗及び日本

高麗の興起 新羅は、唐と結託して高麗を滅ぼし、後次第に領土

第一

△新羅の統

を擴張して、浪江(大同江)以南の地を領せり。されど唐末に至りて、國勢衰微し、紛亂を極めしかば、王建といふもの起りて、王位に登り、國號を高麗と定め、(九一八)新羅及び後百濟を滅ぼして半島を統一せり。

第二

元と高麗 高麗は曾て契丹に臣事し、又金に事へたりき。

成吉思汗起るに及びて、高麗を援け、契丹族の寇を撃退せしことあり。太宗の時、高麗王高宗と事を生じ、征して之を降せり。世祖位に即くに及びて、高麗王元宗(高宗の子)に説き、之を介して、日本を招致せんとししが成らず。よりて世祖は忻都を將として、高麗の兵を合せ、日本を伐たしめたれど、敗れて還れり。(龜山天皇文永十二年西紀一二七四—二)

△文永の役

第三

元と日本 世祖は猶屈せず、高麗の忠烈王に皇女を嫁して、全く己れの腹心となし、又杜世忠を使節として、日本に至

△弘安の役

らしむ。我が北條時宗、これを鎌倉に斬りしかば、世祖怒ること甚だし。既にして宋朝も亡びしかば、世祖は勢に乗じて、日本を伐たんとし、范文虎等を將として、高麗の兵をも合せ、進みて九州の太宰府を犯さしむ。この時暴風大に起り、元艦殆ど全く覆没したり。（後字多天皇弘安四）世祖大に憤慨せしが、内亂に加へて、南方の關係ありし爲に、再舉を得ざりき。

第二節 元と南亞諸國

第一

元と緬甸 緬國は古へ揮國（漢代）或は驃國（唐代）と稱し、宋の世に之を緬國と稱したり。世祖之を征して、緬軍を破りしかば、乃ち歲貢を約して降り、（八一）暹國も亦次で入貢せり。

第二

元と交趾占城 交趾は曾て元に降りしが、其の王陳昉に至り、再び元の命を奉ぜざりしかば、世祖怒りて之を征服し、

△蘇木都刺瓜哇

第一

（九一）併せて占城を降せり。かくて元の勢威南洋を壓せしかば、蘇木都刺瓜哇みな朝貢するに至れり。

第三節 元の領土と東西の交通

元の領土

蒙古人は、非常なる武力を以て、西征東伐し、世祖に至りて、實に空前の大帝國を成したり。而して其の領内に、數多の汗國あり。（一）欽察汗國（金國）は、今の露西亞地方を領す。拔都の封地なり。（二）察合台汗國は、今の中亞の地にして、察合台の封地なり。（三）伊兒汗國は、今の波斯の地にして、旭烈兀の封地なり。是等の諸汗國は皆世祖統制の下にあるものなり。

歐亞の交通

蒙古人が大帝國を爲すと共に、歐亞二洲の交通盛に行はれ、泉州・福州等は、當時頗る繁昌せる貿易場な

△三大汗國の對外阿富台汗國ありし久しびたり

第二

△マルコポーロの来朝
七歳に於て忽ち大に
伊太利に於て大に
リスを忽ち大に
親に於て大に
支那に於て大に
七年に於て大に
七歳に於て大に
開闢の途に於て大に
國に於て大に
之を知らしめしむ
す

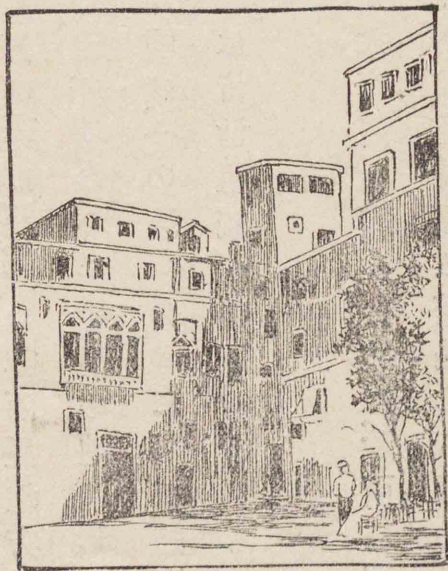
りき。有名なる伊太利人
マルコポーロも、此の



一ロポーコロマ

時來りて世祖に仕へ、亞

拉比亞、波斯の學者、或は佛蘭西、伊太利等の畫家、建築家等も
來りて、元朝に仕ふるもの少からざりき。



家の一ロポーコロマ

第五章 元の衰微

第一節

海都の反 曾て世祖の即位するや、太宗家の海都、大に不

△海都は阿
窩合汗なり

第二節

△元朝衰微
の四大原因

平を唱へ、蒙古に據りて反したり。欽察汗忙哥帖木兒並に察
合台汗八刺ともに海都を助け、推して大汗と爲せり。(六)世
祖は之を討滅し得ずして崩じ、成宗位に即き、海山を將とし
て海都を伐ち、大勝を得たり。程なく海都死して、四十年の大
亂一時鎮定したれど、欽察、察合台、二汗國は以後殆ど獨立せ
り。

元朝の弊政 (一)世祖は連年外征のため財政窮乏し、盛に

交鈔(布の)を發行せり。(二)世祖喇嘛教を尊びて、僧侶の專横を

來せり。(三)一定の相續法なくして、帝位繼承の争ひ多し。(四)將

相の重任には、皆蒙古人を用ゐて、漢人の恨を買へり。これ等
の弊政相合して、元朝衰微の原因となり、成宗以下數代、凡そ

四十年、常に騷擾のうちに經過せり。

第三節

△朱元璋の部下には劉基、徐達、常遇春等あり

元の末路 元朝最後の主たる順帝の位に即くや、天下大に亂れ、陳友諒(湖北)、張士誠(江蘇)、朱元璋(安徽)等各一方に割據せり。就中朱元璋の勢力大に振ひ、遂に金陵(江蘇省南京)を取りて根據を定め、次第に陳友諒、張士誠等を滅ぼし、勢に乗じて大兵を擧げ、徐達等を將として燕京を伐たしむ。順帝敵する能はずして、開平(内蒙古)に遁れたり。(六一三)是に於て朱元璋帝位に即く。明太祖是なり。

第六章 明の初世

第一節

太祖の政治 太祖は兵を遣りて、元の餘衆を追撃せしめ、漠南蒙古及び滿洲を略し、同時に蜀、雲南等の地を平けて、全く天下を統一せり。帝は専ら元朝の弊政を除かんことをつ

△胡藍の獄 胡惟庸、藍玉に關して功臣の殺されたるも四萬五千餘人なり

第二節

△方孝孺に死す

第三節

とめ、律令を改め、學校を起し、衣冠を唐代の舊に復し、又一族二十四人を各地に封じて王となせり。且つ邊要の地には、行都指揮使司を置きて、防備を嚴にしたれば、帝在世の間、天下平安なりき。されど帝は數多の功臣を誅除したるを以て、其の崩後に、内亂の起りしを、鎮定すべき宿將なきに至れり。
燕王棣の篡立 太祖崩じて(九一三)、惠帝位に即く。時に諸王漸く驕恣なりしかば、帝之を憂へ、次第に諸藩を削奪せんと謀れり。是に於て燕王棣遂に反し、大兵を擧げて南下す。金陵陥り、帝出奔して、燕王帝位に即けり。(一〇二四)之を成祖(永樂帝)となす。都を燕京に遷して北京といひ、金陵を南京と稱せり。
成祖と交趾 交趾(安南)は陳氏の王朝なりしが、この時黎季犛(暹羅)といふもの篡立せしかば、成祖は陳氏の族を援けて交趾

を伐ら、(一六四)之を平定して、勢ひ南方に振ふ。よりに暹羅、蘇門答刺、瓜哇等數十國、相次で入貢するに至れり。

第四節

成祖と韃靼瓦剌

蒙古は騷亂久しく相次ぎしが、元の皇孫本雅失里といふもの、韃靼可汗となりて、明に抗す。成祖親征して之を降せり。(一九四)時に瓦剌部の酋長馬哈木も勢力強大にして、明に寇せんとす。成祖また之を降せり。(一四四)されど韃靼、瓦剌の二部は、永く明朝の患をなせり。

△瓦剌の酋長馬哈木

第七章 帖木兒の雄圖

第一節

△帖木兒は又タメルラシと呼ぶる蓋し帖木兒の義なりといふ

帖木兒の興起 元朝の衰滅と、共に蒙古諸汗國、亦衰運に傾けり。この際帖木兒はサマルカンド附近の一村より起り、察合台汗國の衰微に乗じて、之を攻略し、都をサマルカンド

第二節

成吉思汗の疎族なり



帖木兒

に定め、(六九三)勢ひ漸く強大なり。

帖木兒と欽察

欽察汗國は、抜

都より數傳して月即別汗に至り、

(二三三)盛運を極めしが、後月即別の

統絶えて、國內騷然たり。帖木兒は

此の際、哥里米汗トクタミツシを助けて、欽察汗たらしめたるに、彼は其の好意を忘れて、不遜なりしかば、帖木兒怒りて之を征し、欽察を降したり。(九五三)

帖木兒と印度

印度は當時トグルック王朝の世にして、

國勢振はざりしかば、帖木兒又之を征して、德里を陥れ、掠奪を恣にして還り、(九九三)更に眼を西方に轉じたり。

帖木兒と土耳其

西紀一三〇〇年頃、伊兒汗國の衰微に

第四節

第三節

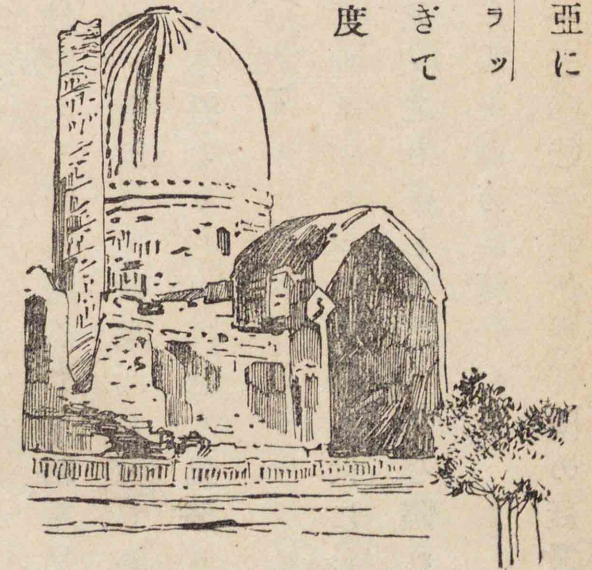
△史に傳ふアングラの戦は土耳其兵四十萬と蒙古兵八十萬との會戦なり

△帖木兒嘗て曰く世界は大きく世界にも我が大望に比するに足らずと

乗じて、土耳其人は小亞細亞に
オットマン帝國を建て、ムラツ
ド一世バジャゼット相次ぎて
歐洲を侵略せり。帖木兒、印度
より還り、大兵を擧げて
西征し、アングラの戦に
バジャゼットを破りて
之を擒とせり。(一四)

第五節 帖木兒の領土 帖木

兒は猶支那を伐たんとして兵を進めしが、途にして病死せり。
(一四) 其の領土は、歐亞二洲に跨りて、頗る廣大なるものなりしが、死後忽ち崩壊せり。



帖木兒の墓

第八章 明の中世

第一節

△土木の役

瓦剌の入寇 成祖より仁宗を経て宣宗に至り、賢臣政を
佐けて、國家平安なりしが、英宗の世に至り、瓦剌の酋長也先
といふもの入寇せり。英宗親征して土木に至り、大敗して擒
となりぬ。也先進で北京に逼りしが、遂に英宗を還し、和して
去れり。

第二節

宦官の横恣 成祖より以來、宦官漸く政に與り、英宗の時
には王振憲宗の朝には汪直ありて、共に威權を弄せり。武宗
の世に至りては、政治益亂れて、流賊蜂起し、又安化王の亂、寧
王の亂、相次ぎて起り、國力次第に衰微せり。

第三節

韃靼の入寇 武宗の後、世宗の位に即くや、(一五) 蒙古に俺

△俺答

第四節

△倭寇は八幡宮の旗を立てたるを以て明人は之を八幡船といひ恐るることを甚し

答といふものありて、連年北邊に寇せり。其の勢ひ猛烈にして、明朝これに苦むに當り、南方には又倭寇盛んなりき。

倭寇 倭寇は元末に起り、明太祖の時、其の勢ひ猖獗にして、明國及び朝鮮の南方沿海は、被害甚だしかりき。明成祖の時、日本は足利義滿將軍たり。互に和親を通ぜしかば、義滿も力を盡して倭寇を禁止せり。されど義滿の後、倭寇再び起りて、侵寇已ま



倭寇

ず。明世宗の時に至りて最も甚だし。良將俞大猷等の力により、僅に之を撃退するを得たれども、倭寇なほ臺灣を占領して、時々出沒し、沿海の地を侵掠せり。

第一節

△李成桂

△封冊文の物は石川家は織り存す地は現

第九章 明の末世

於柔懷茲
特封爾為
日本國王
錫之誥命

明より秀吉を封する文の一節

朝鮮 高麗は久しく元朝の壓制を蒙りて、國力衰微せしが、李成桂といふもの、倭寇を防ぎて功を成し、衆望を得て篡立せり。(九三)之を朝鮮太祖とす。後、明の封冊を受けて外藩となりしが、太祖八世の孫李昭の時、豊臣秀吉の爲めに蹂躪せ

第二節

られたり。

朝鮮の役 秀吉明國を伐たんとして、使を朝鮮に遣はし、路を借らんとす。朝鮮王聽かず。是に於て秀吉先づ朝鮮を征して(文一五九二年)連戦連勝す。明神宗大に驚き、李如松等を將として朝鮮を援け、亦大敗せり。よりにて和を議せしが和成らず。我が軍再び朝鮮に入りしも、秀吉薨するに及びて軍を班へせり。(慶長三年)

第三節

東林黨 朝鮮の役ありて、明朝の財政これが爲に亂れ、且つ北方には、既に滿洲人の興起せるあるに、内には朋黨の争ありて、一層の濁亂を加へたり。神宗の朝に顧憲成等、東林書院に學を講じ、朝政を可否せしかば、在朝の官吏之を惡みて、東林黨と稱し、これより互に軋轢せり。

△顧憲成

△魏忠賢

熹宗の世に至りて、非東林黨は、宦者魏忠賢と結託し、東林黨を貶斥せしかば、爾來魏忠賢の專恣甚だしく、流賊四方に蜂起せり。

第四節

△ヌルハチの姓は愛親
寔羅なり

滿洲の興起 金の滅亡後、滿洲人(女眞)は久しく沈淪せしが、努爾哈赤といふもの出づるに及びて、次第に諸部落を征服して、國を滿洲と號し、帝位に登れり。(一六六)之を清太祖となす。太祖は次で瀋陽を取りて茲に都し、太宗に至りて漠南蒙古を征略し、國號を清と改め、(三六六)朝鮮を伐ちて之を降せり。太宗の後、世祖位に即き、大舉して明を攻めしかば、明毅宗(熹宗の次)は吳三桂をして之を拒がしめたり。

第五節

明の滅亡 この時流賊李自成といふもの、虚に乗じて北京に逼り、毅宗帝防ぐ能はずして自殺せり。(四四六)吳三桂變を



鄭合せて自成を撃破し、世祖を北京に迎へたり。(六一四)

△成功の母田川氏亦支田成死せり
△鄭成功は所謂益し所の國姓(明)を以て朱を討つことあり

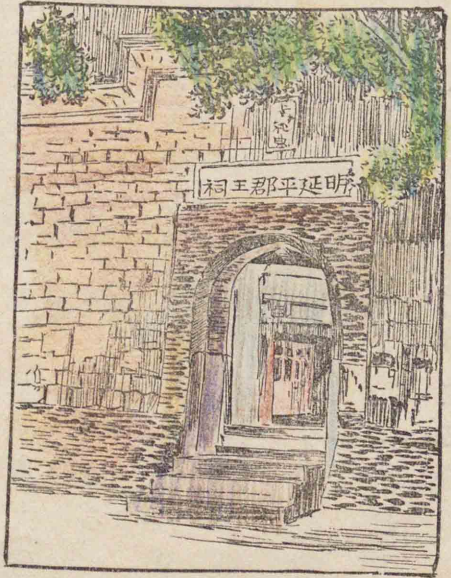
明の王族福王・唐王、相次で江南に據り、明祚を維持せんとししが、皆敗れ、最後の桂王は緬甸に走り、亦捕へられて明亡びたり。(六一六) 獨り鄭成功、臺灣に據り、力を盡して明朝の恢復を期せり。成功は芝龍の子にして母は日本平戸の人なり。成功忠にして勇なれども終に志を得ずして死せり。(六一六)

第十章

元明の儒學宗教

第一節 儒學

元明二代は、多く程朱の學説を奉じたのみ。元にては許衡、明にては薛瑄、胡居仁等大



鄭成功の墓

△良知の説

名あり。王守仁(明)出づるに及びて、陸象山を尊び、良知の説を唱へて、一世を風靡せり。之を姚江派といふ。

第二節 文藝

元代文學に於て最も著しきは、戯曲・小説の發達なり。有名なる小説水滸傳は、施耐菴の作なりといふ。明初には宋濂方孝孺、文章を以て著はれ、劉基・高啓(詩)を以て鳴る。孝

△水滸傳

△西遊記



宗世宗の間に、李東陽、李夢陽、詩文を能くし、其の後李攀龍、王世貞出でて亦盛名あり。戯曲・小説も頗る發達して、西遊記等の傑作出てたり。

第三節

宗教

- (一) 佛教は元より以後、全く衰微せり。道教も元の世に衰へたりしが、明に至りて復活し、今なほ大に行はる。
- (二) 喇嘛教は佛教の一派にして、印度より西藏に傳はりしものなり。元世祖、西藏を征服し、政略上喇嘛僧を尊びて帝師と稱す。これより大に勢力を得たり。明の世に至りて、黃教・紅教の二派に分れ、黃教は清朝に傳はりて、今も盛に行はる。
- (三) 基督教は唐以後久しく廢絶せしが、元の世に歐・亞交通

△ラマ僧は紅衣紅帽を著し、元以後は頗る懦弱にして、初め番明の子を以て、カバ(ツオ)とバ(ツオ)といふ。カバ(ツオ)とバ(ツオ)といふ。カバ(ツオ)とバ(ツオ)といふ。

△ザビエーは初めて日に来りて傳へたる人なり。



喇嘛廟

の結果、基督教徒の來りて布教するもの多し。殊に明末に至りては、ジェスイット派の宣教師にて有名なるマテオリシ、

フランシスザビエー、ミケールローシヤの如き、陸續として來りて傳導し、大に朝廷の信任を得たり。

第四編 近世史

第一章 清初の盛運

總叙 清初には聖祖(康熙帝)世宗(雍正帝)高宗(乾隆帝)相次ぎて帝位に登り、皆英武の資を以て、内は能く叛賊を征定し、制度を定め、文學を振興し、外は能く四方の蠻族を征服して、境域を擴張し、國威を宣揚して、清朝の盛運を極めたり。



康熙帝

第一節 三藩の亂

吳三桂 西紀一六六二年、聖祖(世祖の次)の位に即くや、先づ三藩の亂あり、其の初め、明の降將吳三桂(雲南)尙可喜(廣東)耿繼茂(福建)を南方の地に封じて、明の遺民を鎮

第一

△吳三桂衣冠を明代の舊に復し、毛髮を蓄ふ

第二

△鄭氏三代

撫せしめしが、其の勢力漸く強大なるを見て、朝廷また警備する所ありしかば、三藩安んぜず。吳三桂先づ反して、耿精忠(繼茂の子)尙之信(可喜の子)之に應援し、天下の大亂となりて、江南の地全く賊の手中に落ちたり。されど精忠之信相次で降り、三桂病死せしかば、騷亂九年にして漸く平ぎぬ。(八一六)

臺灣平定 鄭成功の死後、其の子鄭經なほ臺灣に據り、三藩に應援して、一時勢力を得たりしが、鄭經死して克塽(台湾)嗣ぐに及び、幼弱にして將士服せず。終に清朝に降れり。(八一六)かくて聖祖は臺灣平定の後、更に露西亞と交渉を開けり。

第二節 清露の交渉

曾て拔都が露國を征服してより、露人は凡そ二百四十年の間、蒙古人の壓制を蒙れり、既にして欽察汗國の勢力大に衰微せ

△露國の獨立

しかば、モスコイ大公イワン三世反旗を翻へして、初めて獨立せり。(一四八〇)後イワン四世に至り、連りに小汗國を討滅して、勢ひ強大なりしが、遂に露人東漸の端を開けり。

第一

△コサック酋長エルマツク

露人の東漸 當時コサック酋長エルマツクといふものあり。手兵八百を率ゐて、初めてウラル山を踰え(一五八〇)トボルスク附近のシビル汗領を征略して、イワン四世に獻じ、露人東漸の第一歩をなせり。

第二



クマリエ

探險し、アルバジン城(雅克薩)を築きて、滿洲を窺へり。時に聖

露清の交渉

エルマツク以後、露人は續々西比利亞に入り、西紀一六三九年には、オコツク海に達し、又ポヤルコツフ、ハバロフ等、相次で黒龍江地方を

△尼布楚條約

祖は臺灣を平定して、内顧の憂なかりしかば、兵を出してアルバジン城を攻め、互に勝敗あり。聖祖遂に書を露帝ピータに送りて、境界を定めんことを求む。是に於て兩國の使臣、**尼布楚**に會し、外興安嶺を以て露清の境とせり。(一六八九)

第三節 清朝と西北諸族

第一

△噶爾丹

外蒙古 聖祖の時、衛拉部(天山北路)の噶爾丹といふもの(外蒙)に侵入せり。喀爾喀部の酋長等、援を清朝に乞ひしかば、聖祖兵を率ゐて漠北に入り、噶爾丹を擊破して、全く外蒙古の地を收めたり。(一六九六)

第二

西藏 噶爾丹の姪、策妄阿拉布坦は、準噶爾部(衛拉四)を領し、西藏をも横領せり。聖祖聞きて、兵を發し、準噶爾部兵を逐

ひて、新に第六世達賴喇嘛を立て、全く西藏の實權を握るに至れり。(三〇七)

第三

青海 聖祖は在位六十一年にして崩じ、世宗(雍正)其の後を承く、(三二七)時に青海の羅卜藏丹津反せしかば、世宗兵を發して之を擊破し、又青海を平定せり。(二四七)

第四

天山北路 世宗の後、高宗位に即きて(三五七)乾隆と改元す。時に達瓦齊(策安阿拉布)といふもの、準噶爾部を領し、一族阿睦撒納と隙あり、阿睦撒納、清朝に降りて哀を乞ひしかば、高宗兵を發して、達瓦齊を執へ、阿睦撒納を準噶爾部長とせり。既にして阿睦撒納も亦叛せしかば、高宗之を滅ぼして、全く天山北路の地を領したり。(五七七)

△阿睦撒納
露國に走り
て死せしと
いふ

第五

天山南路 天山南路(回)は、喀什噶爾汗の領するところな

り。汗の子博羅尼特は、曾て阿睦撒納に應じて反し、猶庫車城に據りて、飽まで清朝に抗せしかば、高宗又之をも討滅して、天山南路の地を併せたり。(六一七)これより清の國威葱嶺以外に振ふ。

西北地方略表

蒙古	科尔沁部 (蒙古東部)
蒙古	漠南蒙古部 (内蒙古)
喀爾喀部	喀爾喀部 (外蒙古)
準噶爾部	準噶爾部 (伊犁地方)
衛拉	托爾格部 (全上)
(瓦刺)	テルベ部 (全上)
喀什噶爾	ホシヨ部 (青海地方)
喀什噶爾	天山北路
西藏	天山南路
西藏	ヒマラヤ崑崙山間の高地

第四節 清朝と南亞諸國

緬甸 緬甸は明神宗時代に、阿瓦、阿臘干、琵琶の三部に分

△雲籍牙

れて、互に相攻めしが、清高宗の世に、雲籍牙といふもの出て、三部を一統し、又暹羅を伐ちて、之を併呑せり。(六七七)

第二

△山田長政

暹羅 暹羅は久しく内亂外寇に苦みて、國勢振はず。明神宗時代に、我が山田長政、暹羅に入りて大功を建てたり。其の後また國力衰へて、終に緬甸に併せらるるに至れり。雲籍牙は勢に乗じて、清の南部を侵ししかば、高宗再度之を征して、遂に緬甸王を降せり。(六一七)時に漢人鄭昭といふもの、暹羅に自立し、盤谷に都す。(六一七)鄭昭の後、フアチヤツクリ位に即さしかば、高宗之を暹羅國王に封じたり。(八一七)之を現王朝の祖とす。

第三

△フアチヤツクリ位に即さしかば、高宗之を暹羅國王に封じたり。(八一七)之を現王朝の祖とす。

安南 安南は明成祖の時、一度明朝に歸服せり。其の後内亂相次ぎ、遂に南(大越)北(廣南)の二部に分れて相争へたりき。清高

△ゲールカ征伐

第一

△内閣
△六部
△軍機處
△理藩院
△總理各國事務衙門
△海軍衙門

宗の時、阮文惠といふもの起りて、先づ廣南を滅ぼし、次に大越を併せて(八六七)安南を統一せり。大越の黎氏、援を清朝に求めしかば、高宗兵を出し、阮文惠を撃ち、却て敗北せしが、阮氏罪を謝して降り、事平ぎぬ。(八一七)

安南事件の後、高宗はヒマラヤ山南の廓爾喀(ネル)を伐ち、之を降せり。これ實に高宗最後の外征なりき。(九二七)

第五節 清朝の制度學術

官制

清朝の制度は、聖祖高宗二帝の間に完備したり。中央政府には内閣あり。大學士を以て組織す。内閣の下に、吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部の六部あり。其の長官を尙書といふ。高宗の時、軍機處を設け、内閣大學士、及び六部の尙書等を勅選して之を組織し、軍國の大事を參決せしむ。此の他理藩院

督撫
省 提督
省 巡撫

第二

八旗
兵 漢人
滿洲 蒙古
綠旗兵

第三

△攷據の學

ありて、蒙古・西藏等を管轄し、現今は又總理各國事務衙門ありて、外交を處理し、海軍衙門ありて、海軍を統ぶ。支那本部は十八省に分れ、省の下に府、府の下に州及び縣あり。總督は概ね二省以上の政治、軍務を統べ、各省に巡撫、提督ありて、一は政治、一は軍事を掌る。其の他、知府、知州、知縣等の諸官ありて、地方政治を行ふ。

兵制 清朝の軍隊は、八旗兵と綠旗兵との二部あり。八旗兵は概ね京城を守護す。滿洲八旗、蒙古八旗、漢人八旗の三あり。綠旗兵は、各省の常備軍にして、提督の下に屬す。海軍は北洋、南洋、福建、廣東の四水師より成れり。

學術 聖祖、高宗の世には、文運大に隆起して、前朝の學風を一變し、諸儒みな攷據を務むるに至り、顧炎武、若璩、毛奇

第四

齡・戴震等の諸大家、相次で輩出したり。著述には、康熙字典、四庫全書總目等、最も著名なり。
文藝 文章には魏禧、朱彝尊、侯方域等の諸名家あり。詩には吳梅村、王漁洋等を以て最も著名なりとす。又戯曲、小説等にも、數多の名家を出せり。

第二章 歐人の東漸

總叙 歐人の東漸は、最近世史上、

最も注目すべき事件なり。露人は北方より、葡・蘭・英・佛の諸國は南方より東漸して、東洋の大勢、これが爲に一變し、印度、緬甸、安南等、皆其の獨立を



マガダコスツヴ

△露人の東漸は前章に述べたり

失ひ、支那は數度の大打撃を蒙れり。

第一節 葡蘭英佛人の東漸

第一

△ヴァスコ
ダガマ

葡萄牙人 西紀一四九八年、葡人ヴァスコ・ダ・ガマ初めて印

度に達し、茲に歐人東漸の端を開けり。これより葡人續々と

して來り、遂に印度西岸の

ゴアを取りて根據とし、^(五)

○次第に東漸してマラッカ。

爪哇を略し、支那海に入り、

阿媽港^{アママ}を取り、更に日本に

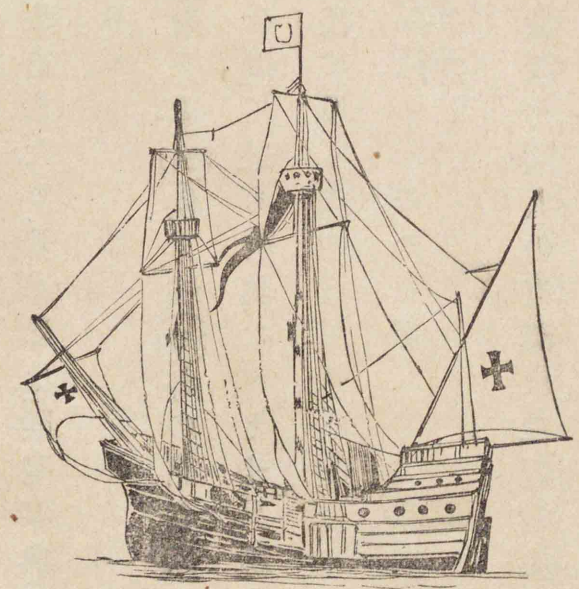
達して貿易し、勢ひ東洋に

振へり。

第二

△葡人メン
デスピント
初めて日
本に來る

和蘭人 葡人につぎて



船のマダゴスガ

西班牙人來り、比律賓群島を占領す。^(六五)和蘭人は西紀一五

九六年初めて印度に來り、爾來葡人と競争して、遂に錫蘭・マ

ラツカ・スマトラ、爪哇等を奪ひ、更に東して臺灣を占領し、^(二四六)

支那・日本と通商せり。殊に我が徳川氏の寛永鎖港より、蘭人

獨り通商を許されて、大に商權を伸張し、全く葡人を壓倒す

るに至れり。

第三

△東印度商
社

英吉利人 英人は西紀一六〇〇年、東印度商社の設立あ

りて、印度に來るもの漸く多く、遂にマドラスを根據として、

孟買^{ボン}・カルカタ等に商館を設立し、西紀一六八〇年頃には、全

く蘭人を凌駕し、更に大に佛人と競争するに至れり。

第二節 英領印度

第一

印度莫臥兒朝 帖木兒の後、印度は諸侯分立して、騷亂相

△バーベル
△アクバル
大帝
△アウラン
グゼブ帝



ルベ一建せり。

次ぎしが、帖木兒の後裔にして、バーベルといふもの、阿富汗より印度に侵入して、莫臥兒王朝を創り建せり。(二一五)バーベルの後、フマユンを經て、アクバル大帝に至る。(五一五)帝は莫臥兒朝第一の英主にして、アグラに都し、北中東部印度を統べ、帝威隆盛の極に達せり。帝の後一代を經て、アウラングゼブに至る。(五八六)帝亦英武にして、南部印度を征定せしが、印度教徒を虐待せしを以て、國內漸く亂れ、死後は騷亂殊に甚だしく、遂に英人に併吞せらるるに至る。
英佛の競争 佛人は西紀一六〇四年、印度商社を設立し、印度東岸のボンデシェリーを根據として、英人と競争せり。西紀一七四五年、英佛本國の開戦ありしかば、佛の印度知事

△モゴル諸
帝は回教信
者なり

第二

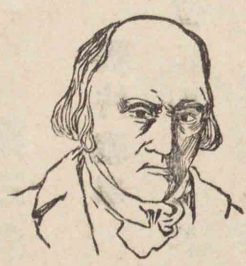
△クライヴ
は印度會社
の書記なり
し、が後軍人
となり諸所
に武功をあら
はせり

△ヘスチン
クス

△英國女王
印度皇帝の
位を兼ね



グイラク



スグンチスヘ

ウブレーは英領マドラスを占領して、一時英人を壓倒したり。されど英將クライヴ出づるに及びて、英人の勢力を回復し、プラッシーの戦(五七七)に、ベンガル侯と佛人との連合軍を破りて、最後の勝利を得たり。
英領印度 西紀一七七四年、クライヴに代りて、ヘスチンクス印度總督となり、次第に各地諸侯の實權を奪へり。かくて英人の勢力全印度を壓し、莫臥兒帝も亦遂に其の保護の下に立つに至れり。其の後、ベンガル土兵亂を爲ししが、(五七八)久しからずして鎮壓せられ、莫臥兒帝も嫌疑を蒙りて尊號を剝奪せられ、西紀一八七七年には、英國女王ヴィクトリア印度皇帝の位を兼ね

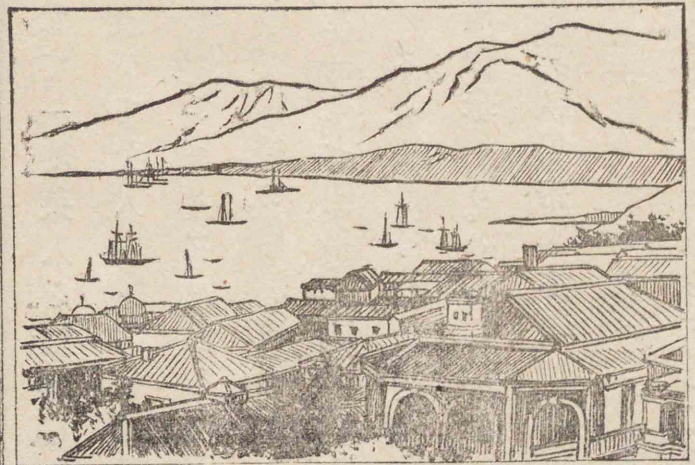
たり。

第三章 清朝の衰運

第一節

鴉片戦争 高宗の後、仁宗(嘉慶帝)

位に即く。これより内難外寇相つぎて、清朝の衰運をなせり。仁宗の初年には、白蓮教徒の亂ありて、七年に亘り、宣宗(道光帝)の世には、回部の亂あり、漸く平ぎて、又鴉片戦争起りぬ。この頃英人は、盛に鴉片を輸入して、流毒甚だしかりしかば、宣宗之を憂ひ、林則徐を兩廣總督



香港

△白蓮教徒の亂

△回部の亂

△林則徐

△南京條約

第二節

に任じて、鴉片の輸入を禁じ、又貿易を停止せしむ。英國政府大に怒り、エリオット等を將として、清國を伐ち、(一八四〇)連戦連勝して遂に鎮江を陥る。清國恐れて和を乞ひ、償金二千一百万元を納れ、香港を割き、五港(廣東、福州、寧波、上海、廈門)を開きて事平ぎぬ。(一八四二)

長髮賊

清朝は鴉片戦争の爲に、大に國威を損じ、且つ財政窮乏したるに乗じ、洪秀全といふもの、



會國兵を廣西に擧げたり。(一八五〇)之を長髮賊と藩いふ。時に宣宗既に崩じ、文宗位に即きしが、髮賊の勢ひ猖獗にして、連戦官軍を破

り、南京を取りて都とす。曾國藩、左宗棠等、奮戦之と相當りしも、賊勢衰へたる色なし。

英佛の來寇

髮賊の亂未だ平がざるに、英國商船アルロ

△曾國藩

△洪秀全は自ら耶蘇の弟なりといへり

第三節

△アムロ
ロイ
賊事件

一號と支那官吏との間に紛擾を生じ、同時に佛國宣教師の清人に殺されたるものありて、葛藤容易に決せず、英佛二國遂に同盟して清國を伐ち、白河より天津に進み、連戦連勝して北京に入れり。(六一八)清朝屈して和を講じ、償金一千六百萬を兩國に納れ、牛莊、登州、九江、漢口等の諸港を開けり。

長髮賊の平定



ゴ
ル
ド
ン

英佛同盟軍の北清攻伐ありて、賊勢又大に振ひしが、文宗崩じて穆宗(同治)立つに及び、英人ゴルドン官軍を援け、曾國藩李鴻章等と相前後して賊軍を破り、遂に南京を陥れて、十五年の大亂を平定せり。(六一八)

露清の交渉

露國は尼布楚條約の後も、東亞侵略の歩を進めて已まず。西比利亞總督ムラヴィヨフは、恣に黑龍江地方

△英人ゴ
ルドンの組
織せる軍隊
を常勝軍とい
ふ

第五節
△ムラ
ヴィ
ヨフ

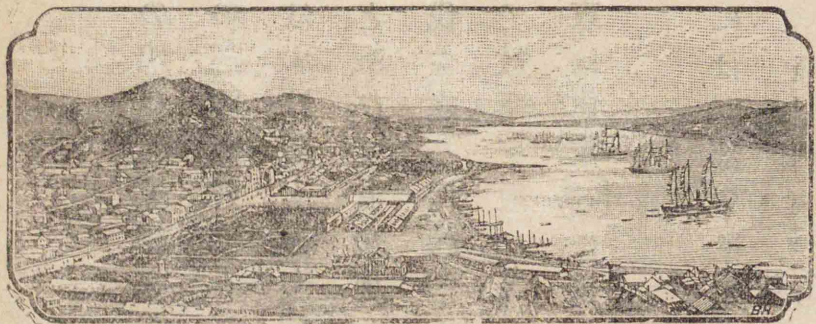
△愛
琿
條約

△イ
グ
ナ
チ
エフ

△北
京
條
約

△樺
太
事
件

を占領し、髮賊の亂あるを機とし、新に國境を定めんことを要求せり。清國已むを得ずして、愛琿條約を結び、黑龍江北の地を露國に讓與せり。(五一八)後英佛の軍、北京に入るに當り、露國公使イグナチエフが講和周旋の勞を執りたる報酬として、更に烏蘇里江東の地を取り、(一八六〇)浦鹽斯德を經營して根據地となせり。當時また樺太島に關して、日露間に紛擾ありしが、西紀一八七五年(明治)樺太を露國に與へ、千島を我に取りて事落著せり。



浦 鹽 斯 德

第四章 中亞に於ける英露

第一節

△基哈、布哈拉、敖罕

露國と中亞諸國 帖木兒の死後、中亞の地は騷亂相次ぎしが、十六世紀の初めに、基哈、布哈拉、敖罕の三國創建せられたり。されど互に攻伐を事として國力振はず。波斯も亦衰運に傾きければ、露國これに乗じ、數度波斯と戦ひて其の地を削り、又兵を中亞に出して、先づ布哈拉を伐ち、之を保護國とせり。(六八)後五年にして基哈を滅ぼし、次で敖罕を取れり。(八一)かくて露國は、全く中亞の地を領して、東は伊犁(清國)に接し、南は阿富汗に迫れり。

第二節

△清穆宗の時

伊犁事件 西紀一八六四年以來、清國には回部の亂あり。露人これに乗じて、商民保護を名とし、伊犁を占領せり。(七一八)

△曾紀澤

回部平定の後、清國は露國に對して、伊犁の返還を要求したれども、露國は之を承諾せず。清露の兵境上に相持して、一時危機に逼りしが、曾紀澤、露國に使用するに及びて、和議漸く成り、清國は九百萬ルーブルを納れ、且つ地を割きて、伊犁を取戻し、新に境界を定めたり。(八一八)

第三節

△第一阿富汗戦争

阿富汗戦争 英國は、露國が中亞より南下せんとするを見て、大に之を患ひ、阿富汗と相合して、露國の勢を扼止せんと企てたり。されど、阿富汗王ドスト、モハメッドは却て親露主義を取りしかば、英兵遂に阿富汗に侵入す。(三九八)講和の後も、阿富汗は露と親み、英人を排斥せしかば、英國再び阿富汗を征伐せり。(七七八)阿富汗遂に屈して和を乞ひ、英國と同盟するに至れり。蓋し露國が阿富汗を援けざりしを以てなり。

△第二阿富汗戦争

第四節

パミル問題 この後露國が、又阿富汗の西北を侵略せしを以て、英露の衝突となり、西紀一八八七年漸く落著せしに、間もなくパミルの境界につきて、又紛議を生じ、西紀一八九五年、僅に平和の局を結び得たり。

第五章 南亞に於ける英佛

第一節

英國と緬甸 緬甸は英領印度と境を接して、國力振はず。偶、アッサムに内亂あるに乗じ、緬甸人之を占領せしかば、アッサム人は、援を英國に乞へり。是に於て英、緬初めて兵を交ゆ。(一八) 緬軍敗れ地を割きて和せり。緬人深く英國を恨みて、此の後、猶二回の戦あり。英國遂に緬甸を滅ぼせり。(一五八)

佛國と安南 曾て阮文惠の廣南を滅ぼして、安南を統一

△第一第二
第三英緬戰
争ありて緬
甸亡ぶ

第二節

△阮福映



安南順化府城

(一三八)されど福映は、佛國に對する報酬の約束を履行せざるを

するや、廣南に阮福映といふものあり。佛國の援助を乞ひて、阮文惠の子孫を滅ぼし、安南を

領して、國號を越南と稱せり。

△柴根

△東蒲塞

以て、佛國遂に柴根を占領せしかば、安南屈して交趾支那の南部を佛國に讓與せり。^(六一八)翌年、東蒲塞も亦佛の保護國となりぬ。されば安南人は、佛人を恐れ且つ恨むこと深く、又葛藤を生ぜしかば、佛人安南を伐ち、遂に順化府を陥れて、之を保護國となせり。^(八三八)

第三節

清佛戦争

安南は、もと清國の封冊を受けたるものなりしかば、清國は佛安條約に異議を唱へ、遂に清佛の開戦となれり。^(八一八)佛將クールベールは、海軍に將として福州を攻撃し、殆ど福建艦隊を全滅せしめしが、清軍は陸戦に於て、稍勝利を得たり。既にして佛國內閣變動して戦を嫌ひ、終に清佛の講和成れり。^(八五八)即ち清國は安南に對する干涉の權を放棄し、佛國は償金の要求を撤回したり。

△佛將クールベールは澎湖島に憤死す

第四節

佛國と暹羅

當時暹羅の國勢亦振はざりしかば、佛國はメイコン河東岸の地が、曾て安南及び東蒲塞に屬せしを口實とし、兵力を以て之を占領せり。暹羅國如何ともする能はずして、終に佛國の要求を納れ、メイコン河を以て境界と定めたり。^(九一三)

△佛國メイコン河東の地を奪ふ

第六章 日清韓の關係

第一節

臺灣事件

明治五年、琉球の民六十六名、臺灣に漂着し土人に殺害せられし者ありしかば、我國之を清國に交渉せしに、彼は臺灣を以て化外の民なりと答ふ。よりて我が國は、西郷從道を將として臺灣を伐ちしに、清國前言を食みて異議を唱ふ。是に於て我が大久保利通、清國に使し、交渉の局、五十

△大久保利通

△琉球王を廢す

萬兩の償金を取りて和し、征臺の兵を召還せり。(一八七四)此の後、琉球王を廢して、沖繩縣を置きし時も、清國は異議を挾みしが、効なかりき。

第二節

△大院君

朝鮮獨立の承認 西紀一八六三年朝鮮王李熙位に即き、其の父大院君政を攝す。徳川幕府時代には、朝鮮と我が國と、互に交を通ぜしが、王政維新の際より、彼は我が國との通好を拒み、且つ我が軍艦を、江華島に砲撃せり。我が國、黒田清隆を遣りて詰問せしかば、朝鮮は罪を謝し、好を修めたり。故に我が國先づ朝鮮の獨立を認め、(一八七六)英露の諸國も亦皆之に倣へり。

△江華島事件

△朝鮮獨立の承認

第三節

△明治十五年の變

事大黨と獨立黨 朝鮮王政を親らするに及びて、政權全く閔氏に歸し、大院君常に不平を抱きしが、明治十五年(一八八二)

△朴泳孝金玉均

△明治十七年の變

亂兵を煽動して、閔氏數人を殺し、又日本公使館を焼けり。我が國其の罪を責め、償金五十五萬圓を取り、且つ京城に我兵を駐在せしむることを約して、事平げり。されば清國も多數の兵を、京城に駐むることとなりぬ。これより朝鮮の守舊派は、専ら清國に依り、(事大黨)改進黨は日本に依頼して、(獨立黨)互に軋轢せり。既にして獨立黨の朴泳孝等、王を擁して事を舉げ、事大黨の數人を殺せり。(一八八四)この際清兵は事大黨を援けて、獨立黨を破り、日本公使館を燒きしかば、我が國また朝鮮の罪を責め、償金を納れしめて事平ぎたり。

第四節

天津條約 我が國は別に伊藤博文を清國に遣はして、朝鮮暴擧の事を交渉せしめ、(一)兩國の朝鮮駐在兵を撤去し、(二)爾後朝鮮に出兵の要あるときは、互に先づ相通知すること

第五節

△東學黨の亂

等を約したり。之を天津條約といふ。(明治十八)

日清戦争

明治二十七年、朝鮮に東學黨の亂起りて、勢ひ猖獗なり。清國は亂民鎮定の名を以て、兵を朝鮮に出ししかば、我が國も亦出兵し、清國と協同して、朝鮮の内政を改革せんとす。然るに清國の全權委員は、朝鮮が



李鴻章

清の外藩たることを主張し、爲に日清の開戦となれり。清軍連戦連敗して、其の敵すべからざるを知り、李鴻章を遣はし來りて和を乞へり。我が伊藤博文、これと下

下ノ關係約

ノ關に會し、(一)清國は朝鮮の獨立を承認すること、(二)清國は償金二億兩を納れ、遼東半島、臺灣、澎湖島を我に割讓すること、(三)沙市、重慶、蘇州、杭州等を開放することを約して和を許

△三國干涉

せり。(明治廿八)されど我が國は露、獨、佛三國の忠告により、代償金三千萬兩を取りて、遼東半島を還附せり。

第七章 極東の近事

第一節

清國の困難

日清戦争以後、清國の衰弱は、歐洲諸國の等しく觀破する所となり、種々なる要求を提出せられて、清國は實に困難の位置に立てり。佛國は遼東半島干涉の報酬として、廣東、廣西、雲南の鑛山採掘權を得、露國は西比利亞鐵道を、滿洲に敷くことの承諾を得たり。而して獨逸は、宣教師の殺されたるを名とし、膠州灣を占領して、九十九箇年間、之を租借することとなれり。(明治廿一)

△膠州灣

第二節

旅順口大連灣

獨逸の膠州灣を租借するや、露國も清國

第三節

△佛國は廣州灣

に強請して、旅順口・大連灣を、二十五箇年租借することとなり、かくして海軍の根據とすべき不凍港を得たり。(明治一)
威海衛 英國は極東に於ける均勢上、獨露の行爲を傍觀する能はず。又威海衛を二十五箇年租借し、(明治一)佛國も同年廣州灣を租借せり。

第四節

△康有爲

守舊派と改進黨 清國は、此の如く歐洲諸國の侵害を蒙りしかば、光緒帝も深く之を慨嘆せられ、康有爲等の改進黨を登用して、大に國政の改革を企圖せしに、滿人の守舊派は之を憎み、西太后を擁して、悉く改進黨を貶斥し、却て攘夷の精神を鼓舞せり。

第五節

△西教排斥 洋人驅逐

義和團 西太后萬機を攝理し、端郡王以下、守舊派の朝廷に跋扈する時に當り、義和團の匪徒、山東省に起れり。彼等は

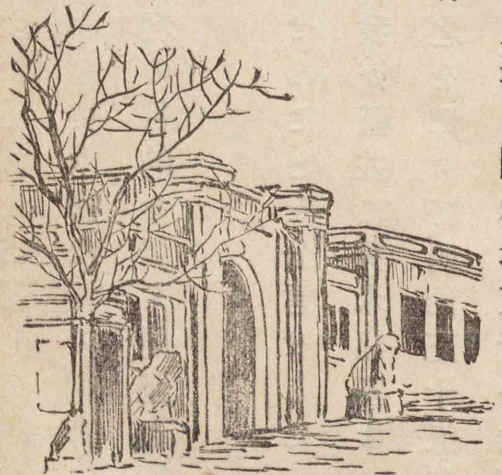
△列國の出兵

西教排斥と、洋人驅逐とを目的とするものなりしが、朝廷は之を義民と稱して、庇護する所あり。よりにて團匪いよゝ横行し、西紀一九〇〇年(明治三)には、外人の住宅を焼き、鐵道を破壊し、遂に各國の公使館を攻圍せり。是に於て日・英・米・露・獨・佛等の諸國共に出兵し、太沽を取り、天津を陥れ、北京に入りて、各國公使を救ひ出せり。此の際、清帝並に西太后は、難を避けて西安府(古の長安)に走り、慶親王・李鴻章をして列國と交渉せしむ。翌年和議終りに成り、列國各兵を撤回せしも、露國は獨り滿洲に兵を駐めたり。

△講和成る

△滿洲猶ほ露國の手に在り

第八章 日露戰爭



北京日本公使館

第一節

△二月十二日、日英同盟發表

日英同盟 露國は義和團事件以後、滿洲を占領して、極東の形勢不穩の狀ありしかば、此の間、日英兩國は其の利害の一致する點より、清・韓保全、東洋平和の目的を以て、同盟を締結せり。(一九〇二明治卅五)

第二節

△滿洲還附條約

滿洲問題 露國は滿洲を還附せんことを公言せしにも拘らず、之を實行せざりしを以て、我が國並に英米諸國より、屢清朝に警告する所あり。露國は之を憚りて、明治三十五年(一九〇二)滿洲還附條約を締結せしかば、諸國は其の實行の如何を注目したりき。

第三節

日露戦争 滿洲還附條約に據れば、明治三十五年九月廿六日(第一期撤兵期)より、次第に露兵は滿洲を撤退すべき筈なるに、翌年の三月第二撤兵期に達したるも、敢て撤兵を實行せず。

△二月十日宣戰の詔勅發布

△戰は二十七日より翌二十八日に亘る

△敵の艦隊

是に於て清・韓兩國の獨立及び領土保全を確めんが爲め、我が國は露國に對して交渉を開始せり。(明治三十八年八月)爾來露國公使ローゼンと、我が小村外務大臣との間に、十數回の會見ありたれど、事決せず。露國は益兵を滿洲に増遣し、旅順口の防備を嚴にせり。勢ひ此の如くなるを以て、明治三十七年二月五日、我が國は交渉を斷絶し、同月九日旅順口外の海戰ありて、我が軍大勝し、次で宣戰の詔勅發布せられ、陸軍は、鴨綠江に、南山に連戰連勝し、進んで遼陽を取り、明治三十八年一月旅順城塞を降し、同三月奉天の露軍を撃破して、之を北方に驅逐したり。同五月廿七日には、バルチック海より遠航し來れる露國の第二、第三艦隊を沖の島附近に邀へて大海戰あり。一舉に敵艦を全滅し、提督ロヂェストウエンスキーを捕虜

艦六隻を撃
沈し二隻を
捕獲す

とす。此の如き海戦の勝利は古今の歴史に比ひなき所なり。同七月には、我軍更に樺太に上陸し、八日の早朝コルサコフ市を占領し、猶進で首府アレキサンドロフスキーをも略取し、又沿海州に上陸して、戦線益々廣く、武威愈々發揚せしが、亞米利加合衆國の大統領ルーズヴェルト氏は世界平和の爲め、兩交戦國に對して熱心に講和を勸告する所ありしかば、我國これに應じて小村壽太郎・高平小五郎を全權委員とし露國の全權委員ウィツテ、ローゼンと合衆國のポーツマス(ニユー・ハンプシア州)に會せしめ、討議の末講和成立し、十月十四日に條約批准ありて此の大戦の局を結べり。條約中の重なる箇條は

一、北緯五十度を境界として、サガレン島樺太の南部を我

國に讓與すること。

一、露國は長春(寬城子)旅順口間の鐵道を我に讓渡すこと。

一、旅順口、大連灣の租借權を我に讓渡すこと。

等にして、露軍は勿論滿洲より撤退し、我國は朝鮮に於て卓絶なる權利を保有す。

第四節

日本の位置 今や東洋の形勢を察するに、中亞諸國、印度、

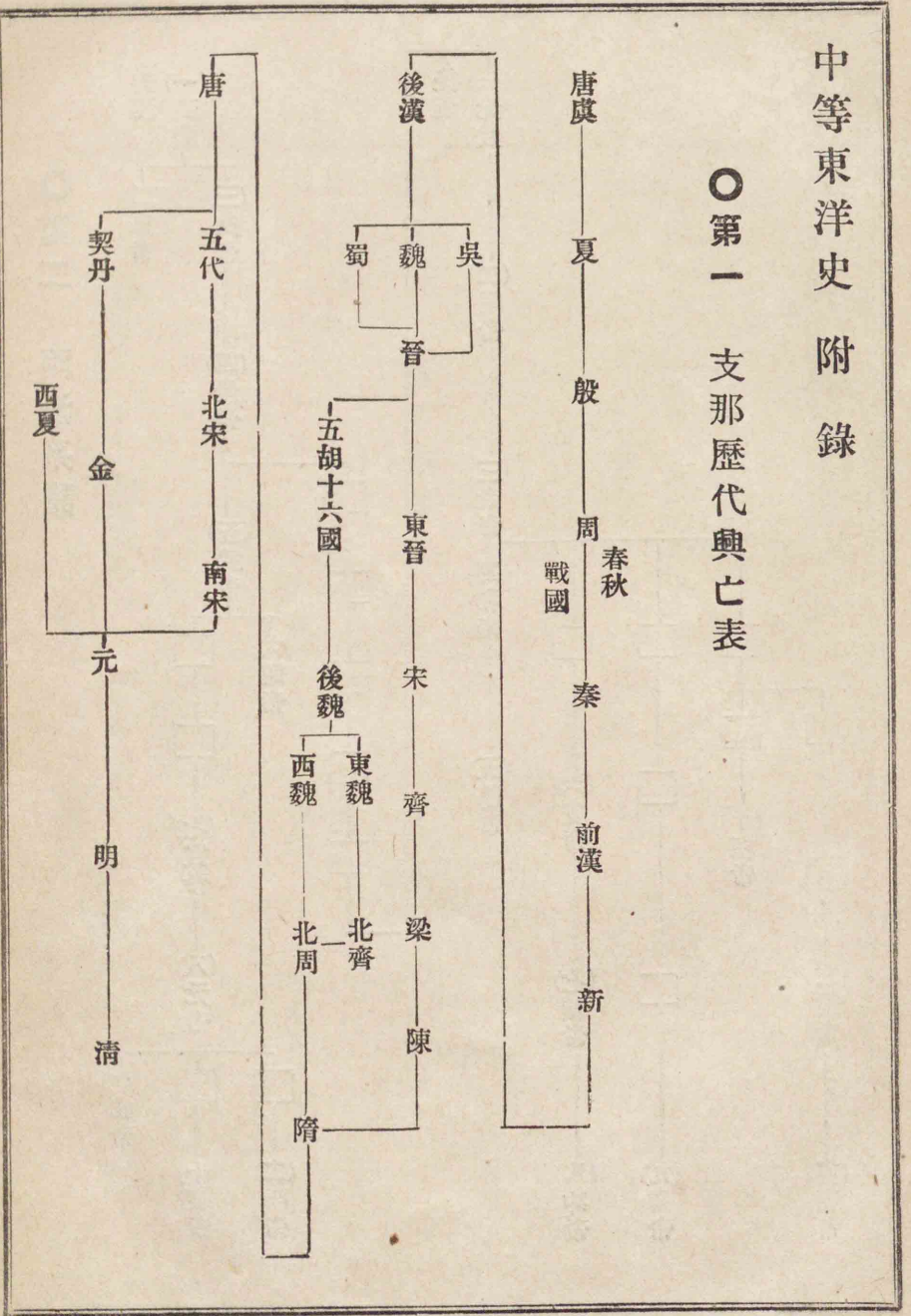
緬甸、安南等は其の獨立を失ひ、支那、朝鮮の如きは僅に獨立を維持するも、衰勢既に久し。故に其の文化に於て、武備に於て、歐洲列國と相當るべきは、獨り我が帝國あるのみ。即ち東洋諸國の勢力を扶植すべきは、我が國民の天職なり。今や歐洲の強國露西亞と戦ひて連勝し、大に我が國威を宇内に發揚す。然れども戦勝に伴ひて我が帝國の責任は、將來益々重大

を加ふるものあり。國民たるもの奮勵せずんば、何を以て其の責を完うするを得ん。

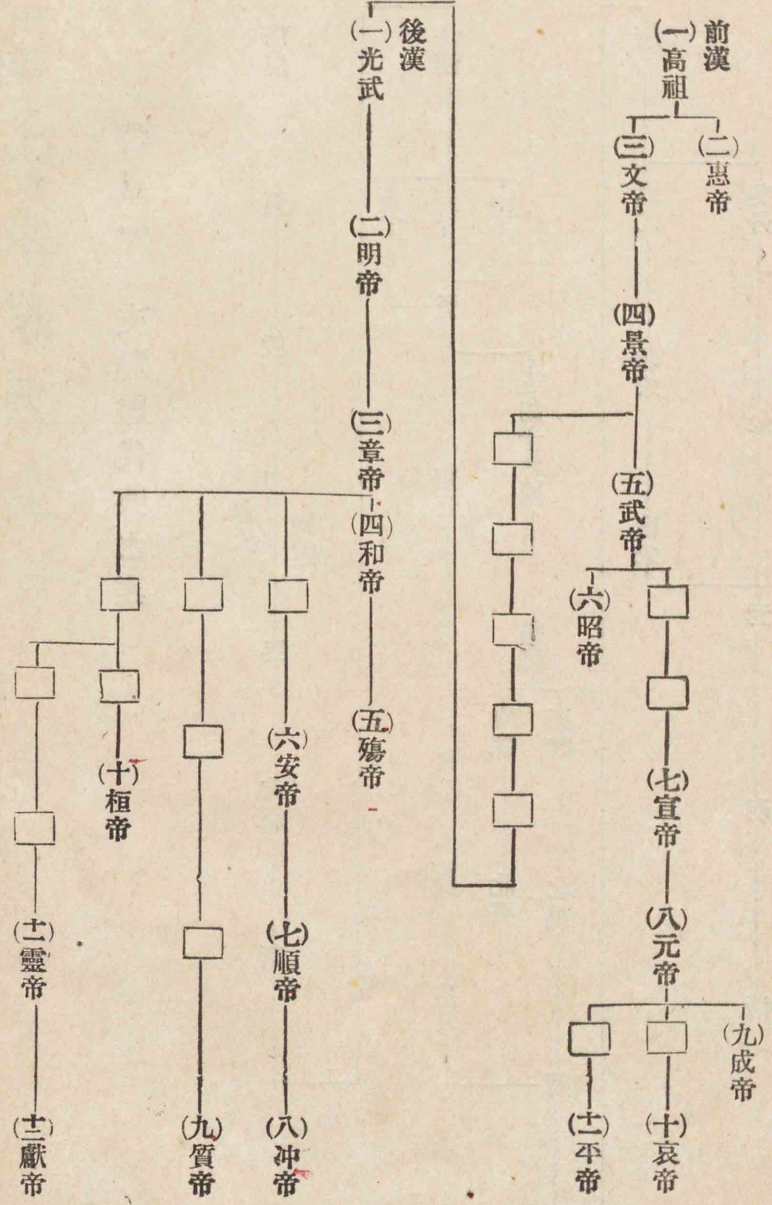
中等東洋史 終

中等東洋史 附錄

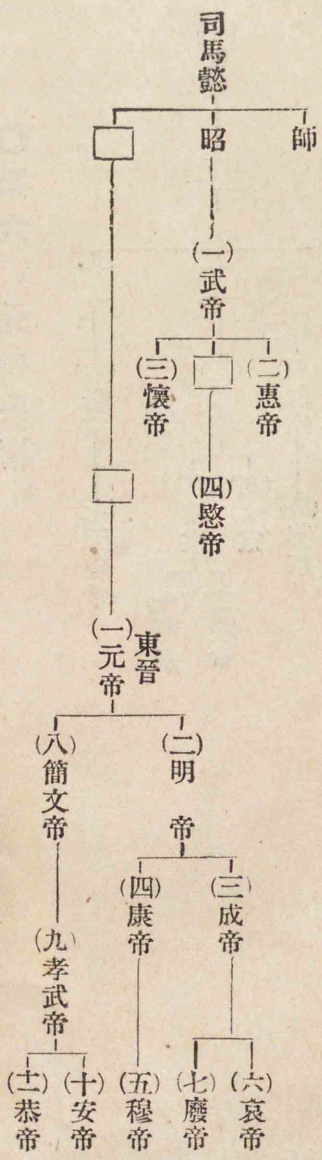
○第一 支那歷代興亡表



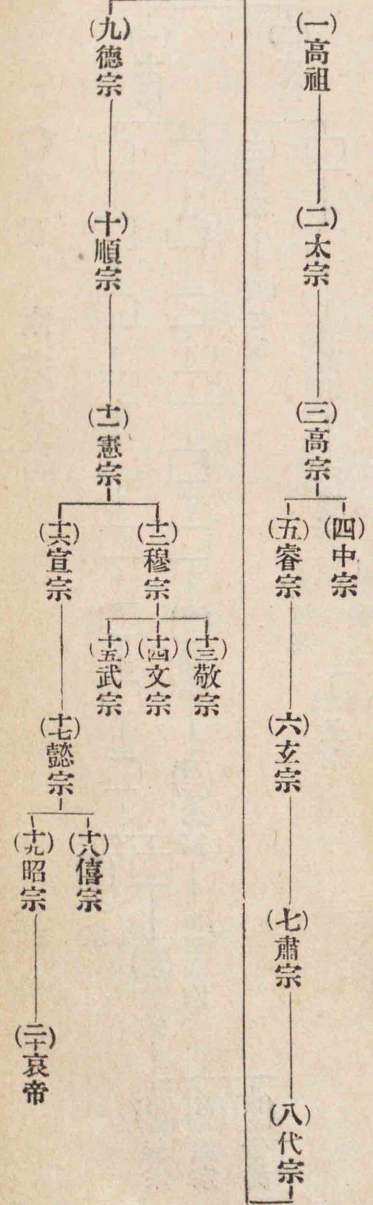
○第二 兩漢系譜



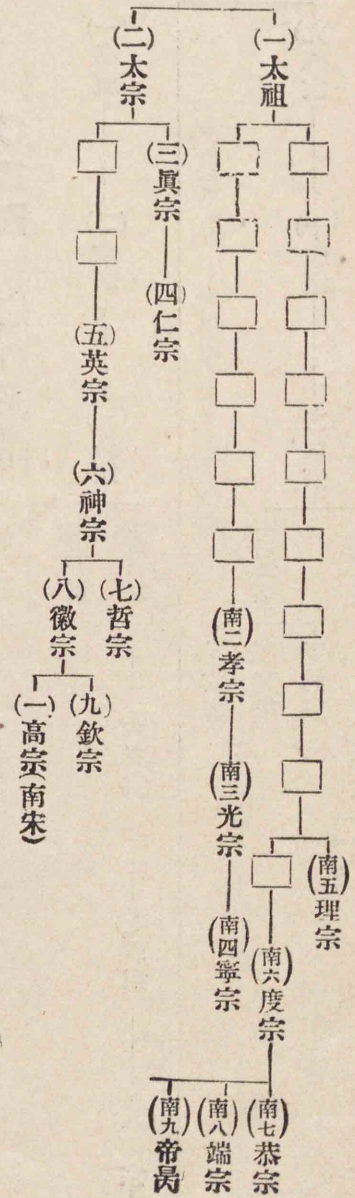
○第三 兩晉系譜



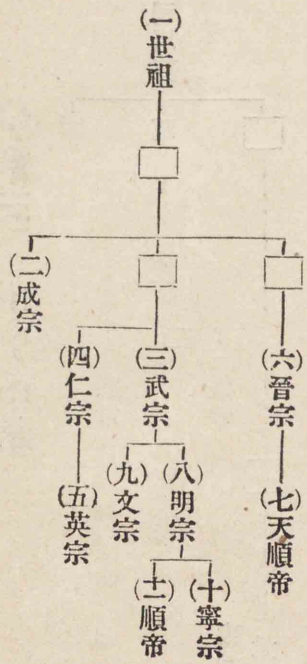
○第四 唐の系譜



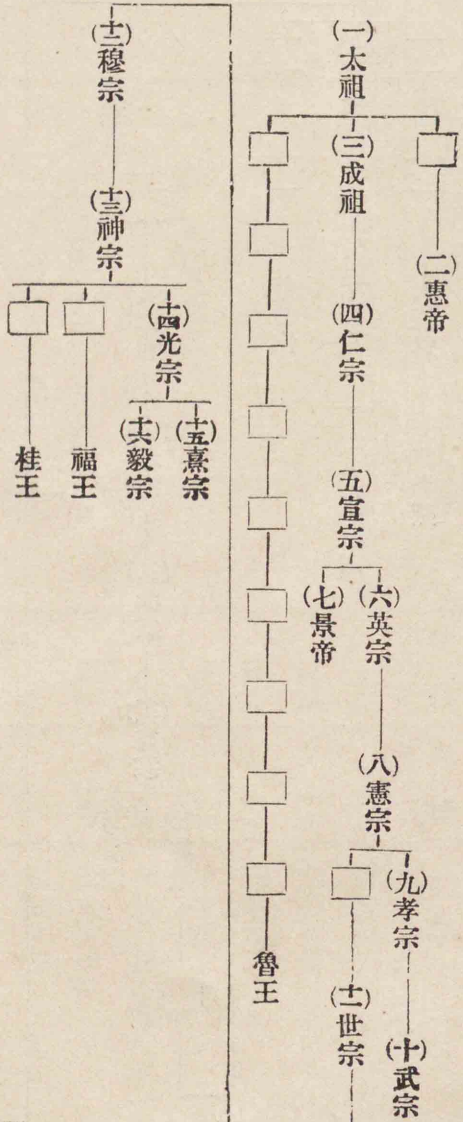
○第五 兩宋系譜



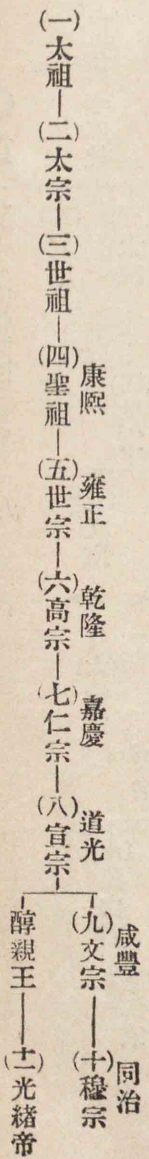
○第六 元の系譜



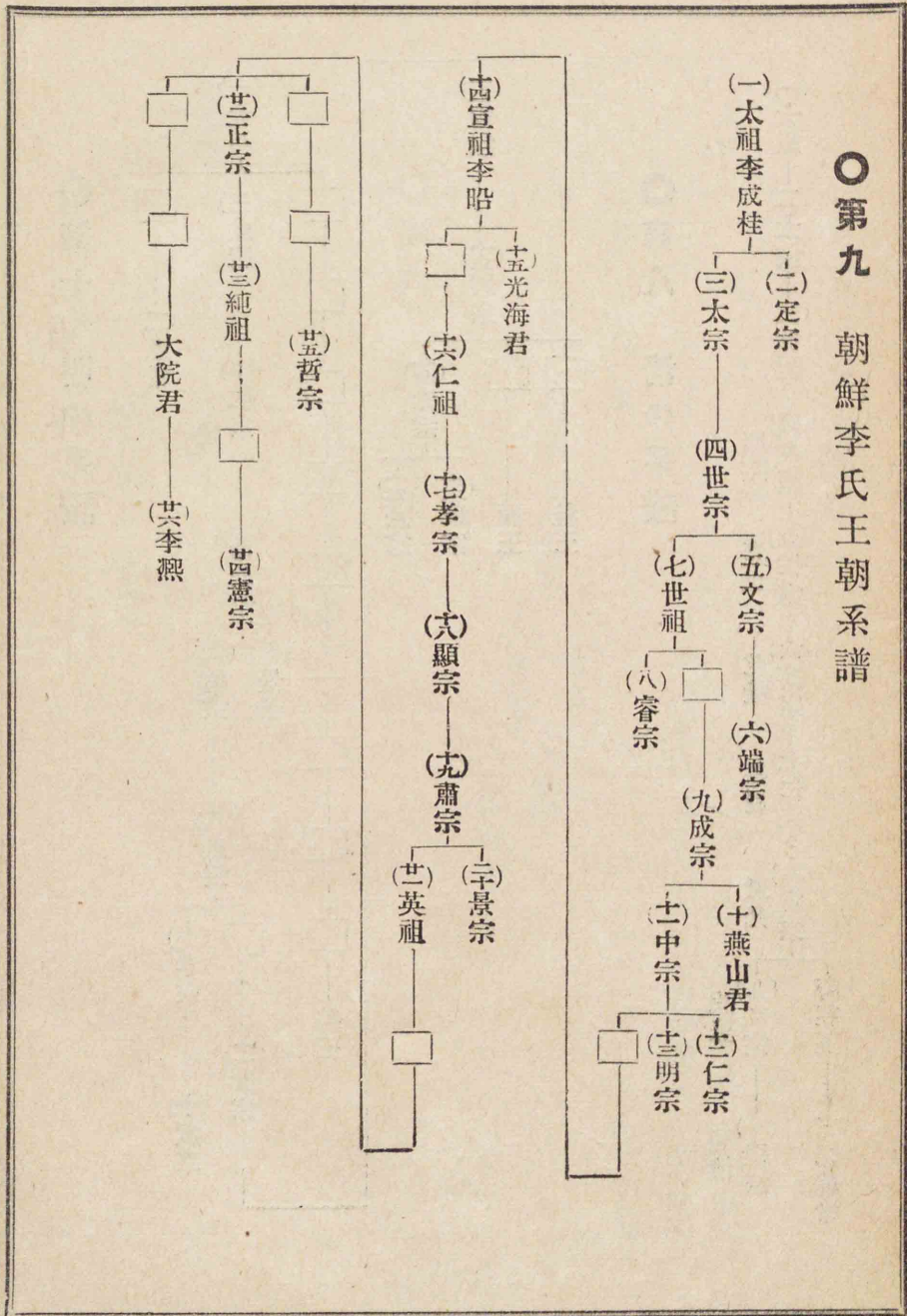
○第七 明の系譜



○第八 清の系譜



○第九 朝鮮李氏王朝系譜



大事年表

皇紀	西紀	事	蹟	皇紀	西紀	事	蹟
前一七四〇	前二四〇〇	黃帝の建國		四〇〇	三三	秦始皇天下を統一す	
一四〇〇	二二〇〇	禹即位す		四七	三四	始皇長城を修築す	
一〇〇〇	一六〇〇	夏亡び殷起る		四九	三三	漢高祖即位す	
四〇〇	二二〇〇	殷亡び周起る		四七	一九	古朝鮮亡ぶ	
二二	七七一	周の東遷		五〇七	一四	吳楚七國の亂平ぐ	
九三	七五三	以後を春秋の世とす		五二	一四〇	漢武帝即位す	
後九七	五六四	釋迦生る		五五	二六	張騫西域より歸る	
一一〇	五五一	孔子魯に生る		五三	一九	漢武帝朝鮮を平ぐ	
二五	四〇三	以後を戰國の世とす		五七	一七	漢武帝崩す。以後霍光攝政	
三八	三三三	蘇秦合従の策をなす		六〇	一五	朴赫居正新羅を建つ	
三三	三三七	歷山大王印度に入る		六四	一七	高朱蒙高句麗を建つ	
三五	三三〇	張儀連衡の策をなす		六四	一八	溫祚百濟を建つ	

六八	後	八	王莽漢室を篡す	九四〇	二八〇	吳滅ぶ
六五	二五	二五	後漢光武帝即位す	九六四	三〇四	匈奴の劉淵自立す
七七	六七	六七	後漢明帝白馬寺を建つ	九六六	三〇六	八王の亂平ぐ
七五	九	九	班超西域都護となる	九七六	三六	西晋滅ぶ。翌年東晋起る
七五	九七	九七	甘英大秦國に使用して達せず	九九九	三九	石勒前趙を滅ぼす
八六	一六	一六	黨錮の禍	一〇〇〇	三七〇	秦苻堅燕を滅ぼす
八四	一八四	一八四	黄巾賊起る	一〇四三	三三三	肥水の戰
八〇	二〇〇	二〇〇	神功皇后三韓征伐	一〇四六	三八六	拓跋珪魏國を建つ
八六	二〇八	二〇八	赤壁の戰	一〇八〇	四三〇	東晋亡ぶ。以下南北朝
八七	二二三	二二三	劉備蜀の成都に都す	一一二一	四五二	後魏太武帝宋軍を破る
八八	二三〇	二三〇	曹丕漢室を篡す	一一三	四七一	後魏孝文帝即位す
八二	二三三	二三三	劉備崩す	一一三九	四七九	宋亡び齊起る
八九	二三四	二三四	諸葛亮薨す	一二六二	五〇二	齊亡び梁武帝立つ
九三	二六三	二六三	蜀滅ぶ	一二九四	五四	後魏東西に分る
九五	二六五	二六五	晋武帝立つ	一二〇九	五四九	梁武帝崩す

一一〇	五五〇	一三六	六八	唐高宗高麗を滅ぼす
一一五	五五五	一三四	六八〇	唐高宗西突厥を滅ぼす
一二七	五五七	一三五〇	六九〇	則天武后國號を周と改む
同年	同年	一三七三	七三三	唐玄宗即位す。年號開元
一一三	五六二	一四二五	七五五	安祿山反す
一一〇	五七〇	一四六六	八〇六	唐憲宗即位す
一一七	五七七	一五〇七	八四七	唐宣宗即位す
一二四	五八一	一五四〇	八八〇	黄巢長安を陥る
一四八	五八八	一五七七	九〇七	唐亡ぶ。後梁太祖即位す
一六四	六〇四	一五七六	九六六	契丹の太祖帝と稱す
一六七	六〇七	一五七八	九八	王建高麗を建つ
一六八	六〇八	一五八三	九三三	後梁亡ぶ。後唐莊宗即位す
一八七	六二七	一五六六	九三六	契丹太祖渤海を滅ぼす
一九〇	六三〇	一五九六	九三六	後唐滅ぶ。後晋高祖立つ
二一〇	六六〇	一六〇七	九四七	契丹國號を遼と改む

一六〇七	九四七	後漢高祖立つ	一八六六	二〇〇六	蒙古鐵木真、成吉思汗と稱す
一六一一	九五二	後漢亡ぶ。後周太祖立つ	一八七四	二三四	成吉思汗、金を伐ちて和す
一六〇〇	九六〇	宋太祖即位す。宰相趙普	一八七八	二三八	成吉思汗、屈出律を滅ぼす
一六四三	九六二	遼聖宗即位す	同年	同年	成吉思汗、花刺子模を伐つ
一六四四	一〇〇四	澶淵の役。宋遼和す	一八八七	二二七	成吉思汗、西夏を亡ぼし、同年崩す
一六九八	一〇三六	李元昊大夏皇帝と稱す	一八九四	二三四	南宋、蒙古と合して金を滅ぼす
一七七七	一〇六七	宋神宗即位す。漸く王安石を用ゐる	一八九六	二二六	拔都、西征の途に上る
一七四六	一〇八六	宋哲宗即位。司馬光相となり新法を止む	一九〇二	二四二	リーグニッツの戦
一七五五	一一一五	金太祖帝と稱す	同年	同年	拔都、匈牙利より軍を班へす
一七八二	一一三三	金宋合して遼を伐つ。後三年遼亡ぶ	一九三三	二五三	旭烈兀波斯地方を征す
一七八七	一二七	金軍汗を陥る。北宋亡ぶ	一九二〇	二六〇	忽必烈即位す
同年	同年	南宋高宗立つ	一九二九	二六九	海都反して大汗と稱す
一七九八	二二八	南宋高宗臨安に都す	一九三一	二七一	忽必烈國號を元と稱す
一八〇二	二四	金・南宋相和し、岳飛殺さる	一九三九	二七九	南宋亡ぶ
一八六一	二〇二	屈出律、西遼を滅ぼす	一九四一	二八一	元軍大舉して日本に寇し、大敗す

一九五四	二九四	元世祖崩す	二〇〇九	一四四九	土木の役
一九七三	二二三	欽察月即別汗即位す	二四〇	一四八〇	モスコイ大公イワン三世獨立す
一九九三	二三三	帖木兒生る	二五八	一四九八	葡人ヴァスコダガマ印度に達す
二〇一五	一三五五	明太祖朱元璋兵を起す	二七〇	一五二〇	葡人印度のゴアを占領す
二〇二八	一三六八	元順帝蒙古に走る	二七九	一五二九	寧王の亂平ぐ
二〇二九	一三六九	帖木兒サマルカンドに都す	二八六	一五三六	バーベル、印度モゴル朝を立つ
二〇五〇	一三九〇	帖木兒欽察を征定す	二二六	一五三六	度アクバル大帝即位す
二〇五二	一三九二	朝鮮太祖李成桂即位す	二二二	一五三三	俞大猷等倭寇を破る
二〇五九	一三九九	帖木兒印度を征す	二二五	一五三五	西班牙人比律賓群島を占領す
二〇六一	一四〇一	燕王棣(成祖)篡立す	二四〇	一五八〇	コサック酋長エルマツク、ヴラル山を踰ゆ
同年	同年	アンゴラの戦	二五二	一五九二	秀吉大舉して朝鮮を伐つ
二〇六五	一四〇五	帖木兒崩す	二五六	一五九六	阮潢、廣南王と稱す
二〇六六	一四〇六	明成祖交趾を降す	二五六	一五九八	和蘭人印度に來る
二〇六九	一四〇九	明成祖韃靼を降す	二五八	一五九八	秀吉薨じ征韓軍歸る
二〇七四	一四一四	明成祖瓦剌を降す	二六〇	一六〇〇	英國印度商社成る資本金僅に三萬一千三百六十六ポンド餘

二六四	一六四	佛國印度商社成る	二三五	一七五	清世宗崩じ高宗嗣ぐ
二七六	一六六	清太祖努爾哈赤、帝位に登る	二四七	一七五	清高宗准噶爾を領す
二八四	一六四	和蘭人臺灣を占領す	同年	同年	英將クライヴ、印度ブラッシーの戦に大勝す
二九三	一六三	山田長政暹羅に於て死す	二四〇	一七〇	清高宗回部を領す
二九六	一六三	清太宗國を清と號す	二四七	一七〇	緬甸のオングセヤ、暹羅を併す
三〇四	一六四	流賊李自成北京を陥る	二四四	一七四	ヘスデングス印度總督となる
三〇四	一六四	清世祖北京に入る	二四三	一七二	フアヤチャックリ暹羅國王となる
三三三	一六三	清聖祖即位す。鄭成功死す	二四六	一七六	阮文惠安南を統一す
三三三	一六二	三藩の亂平定す	二四三	一七二	清高宗グルカを降す
三三三	一六二	鄭克塽降り臺灣平ぐ	二四三	一七二	阮福映安南を統一し越南と號す
三三九	一六九	尼布楚條約成る	二四四	一八〇	印度モゴル朝、英國保護の下に立つ
三三六	一六九	清聖祖外蒙古を取る	二四四	一八四	英緬第一戦争
三三六	一七〇	清聖祖西藏を領す	二四八	一八八	露國波斯を伐つ
三三二	一七二	清聖祖崩じ世宗つぐ	二四九	一八九	第一阿富汗戦争
三三二	一七二	清世宗青海を領す	二五〇	一八四	鴉片戦争起る

二五〇	一八五	長髮賊起る	二五五	一八五	光緒帝立つ
二五二	一八五	英緬第二戦争	同年	同年	日露交渉樺太を與へ千島を取る
二五七	一八七	ベンカル土兵亂をなす	二五三	一八七	露國放軍を滅ぼす
二五八	一八八	露清愛琿條約を結ぶ	同年	同年	日本朝鮮の獨立を承認す
同年	同年	佛人柴棍を占領す	二五七	一八七	英王ヴィクトリア、印度帝位を兼ね
二五〇	一八六	英佛聯合軍北京に入る	二五八	一八八	第二阿富汗戦争
同年	同年	清露の北京條約成る	二五二	一八一	清國伊犁を取戻し新に境界を定む
二五三	一八三	交趾支那佛領となる	二五三	一八三	朝鮮人日本公使館を襲ふ
二五三	一八三	朝鮮現王李熙即位す	二五四	一八三	佛國安南を保護國とす
同年	同年	東浦塞佛領となる	二五四	一八四	清佛戦争起る
二五四	一八四	長髮賊平ぐ	同年	同年	朝鮮兵及び支那兵日本公使館を焼く
二五八	一八六	露國布哈拉を保護國となす	同年	同年	日清天津條約成る
二五三	一八一	露國伊犁を占領す	二五四	一八五	英國緬甸を滅ぼす
二五三	一八七	露國基哈を屬國とす	二五五	一八五	日清戦争の媾和成る
二五四	一八七	日本臺灣を征す	同年	同年	バミル問題の終局

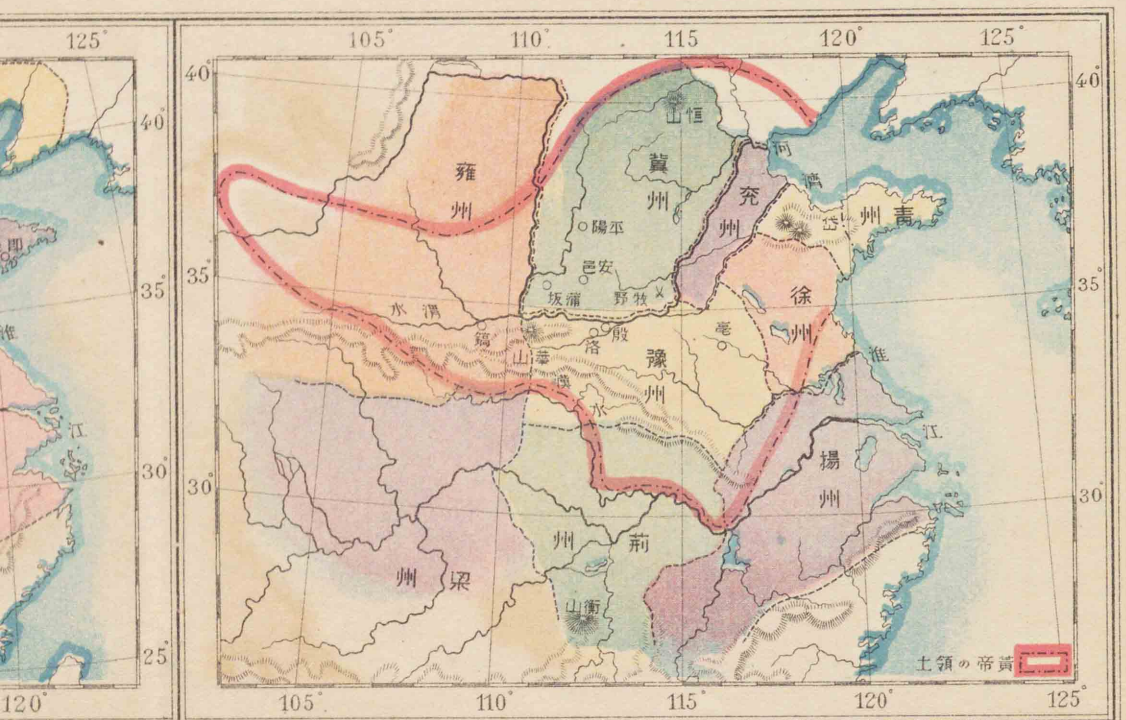
最近年表

西紀	明治年	月日	
二五五	同年	二、九	獨逸膠州灣を租借す
同年	同年	同年	露國旅順口・大連灣を租借す
同年	同年	同年	英國威海衛を租借す
同年	同年	同年	佛國廣州灣を租借す
二五〇	同年	一、〇〇	義和團匪起る
二五六	同年	一、九二	清國と列國との和成る
一九〇二	同	一、三〇	日英同盟成る
同	同	三、二	滿洲還附條約成る(露清)
同	同	九、二	第一期滿洲撤兵期
一九〇三	同	三、二	第二期滿洲撤兵期
同	同	八、二	露國に對して我が國提議す
同	同	一〇、三	小村外務大臣ローゼン公使
同	同	九、二	第一期會見
同	同	九、二	第三期滿洲撤兵期

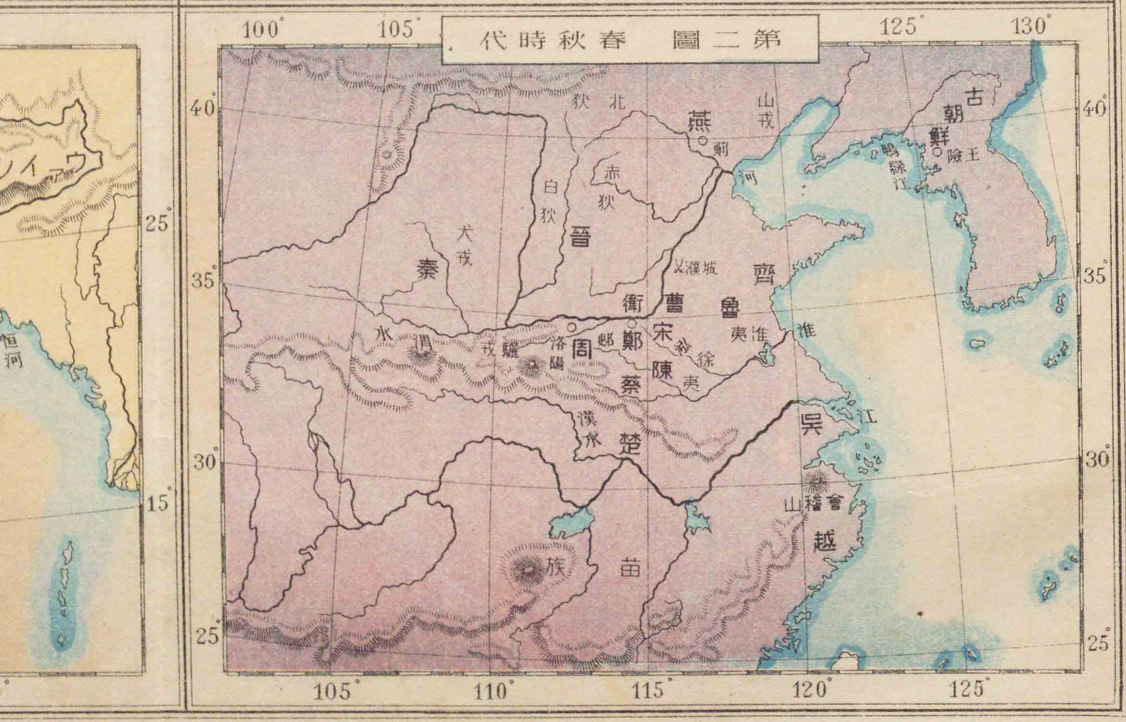
大事年表 終

一九〇四	同	二、五	交渉斷絶を露國に通知す
同	同	同、九	旅順口外海戰、我が軍大勝
同	同	同、〇	宣戰詔勅發布
同	同	五、一	鴨綠江の戰
同	同	同、六	南山の戰
同	同	九、四	遼陽占領
一九〇五	同	一、一	旅順城塞降る
同	同	三、〇	奉天占領
同	同	同、六	鐵嶺占領
同	同	五、二	日本海海戰我が艦隊敵艦隊を殲滅す
同	同	七、八	樺太コルサコフ市占領
同	同	七、四	樺太アレキサンドロフスキ市占領
同	同	九、五	講和條約書成る
同	同	一〇、四	條約書批准せらる

州九の古太那支 圖一第



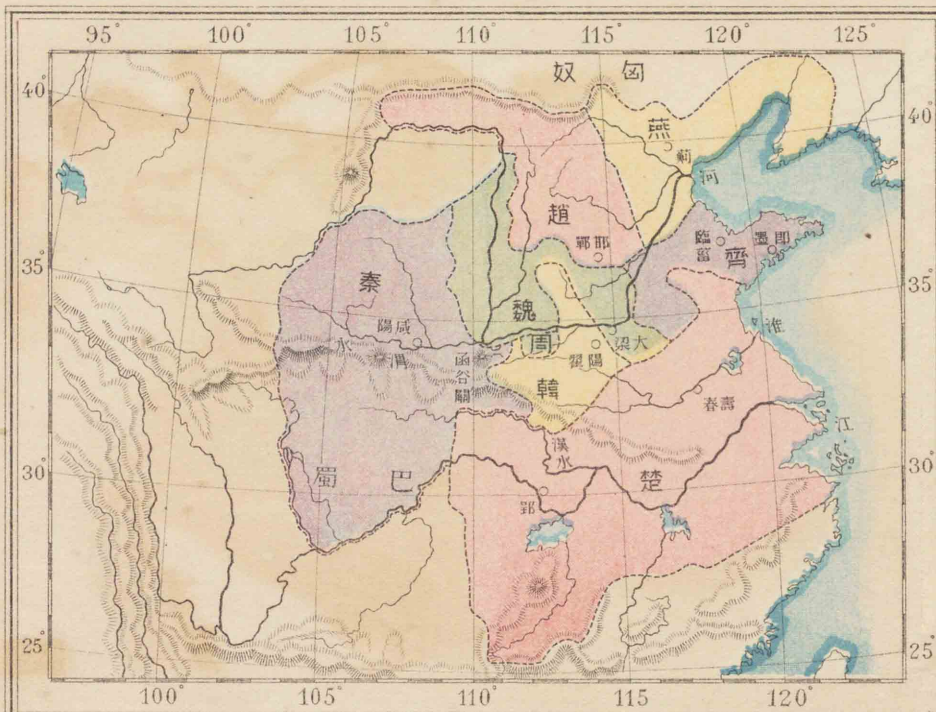
代時秋春 圖二第



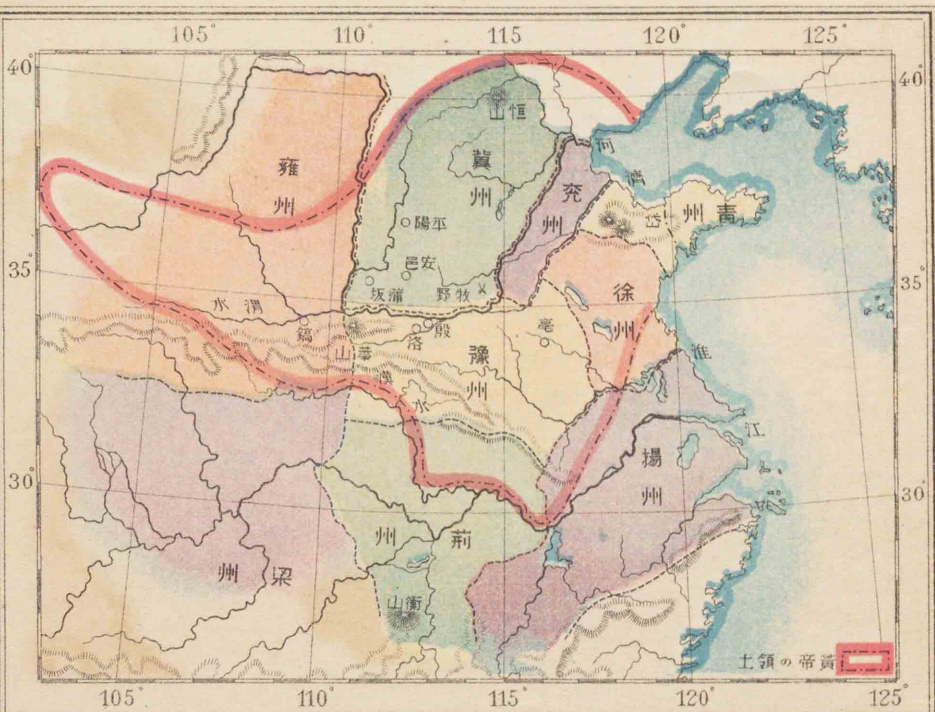
同	同	同	一九〇三
同	同	同	三、三
九〇、三	八、三	三、三	露國に對して我が國提議す
三期滿洲撤兵期	第一回會見	小村外務大臣ローゼン公使	第二期滿洲撤兵期

大事年表終

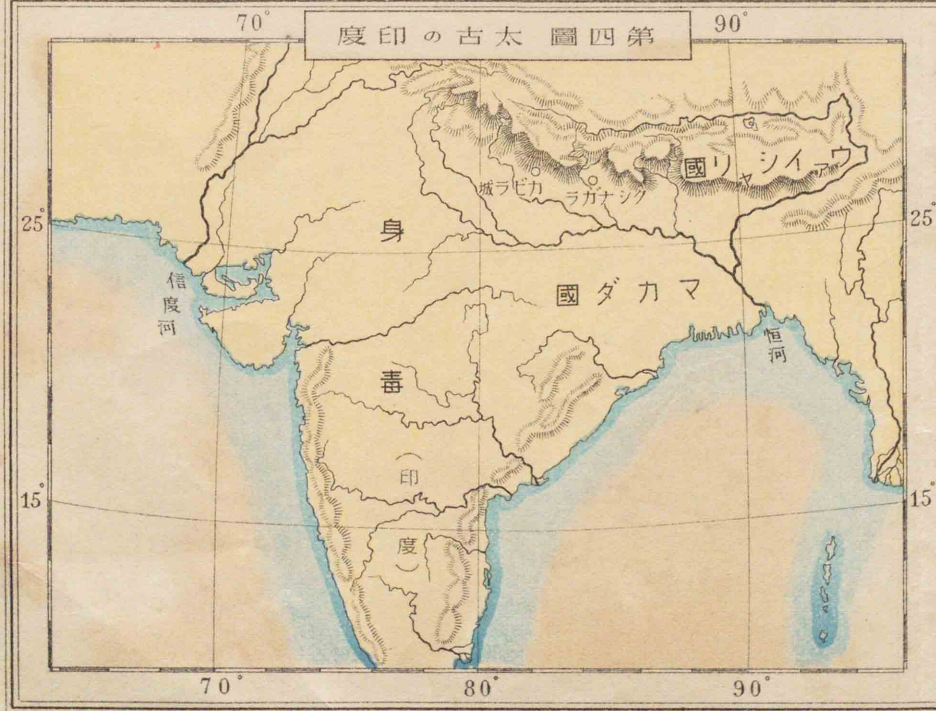
雄七國戰圖三第



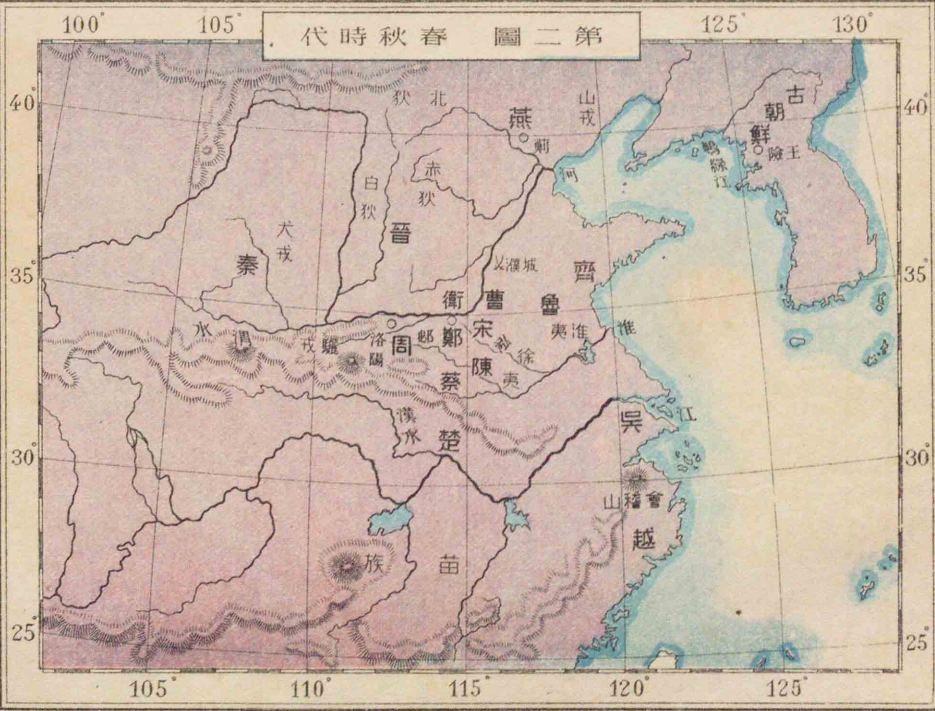
州九の古太那支圖一第



度印の古太圖四第



代時秋春圖二第

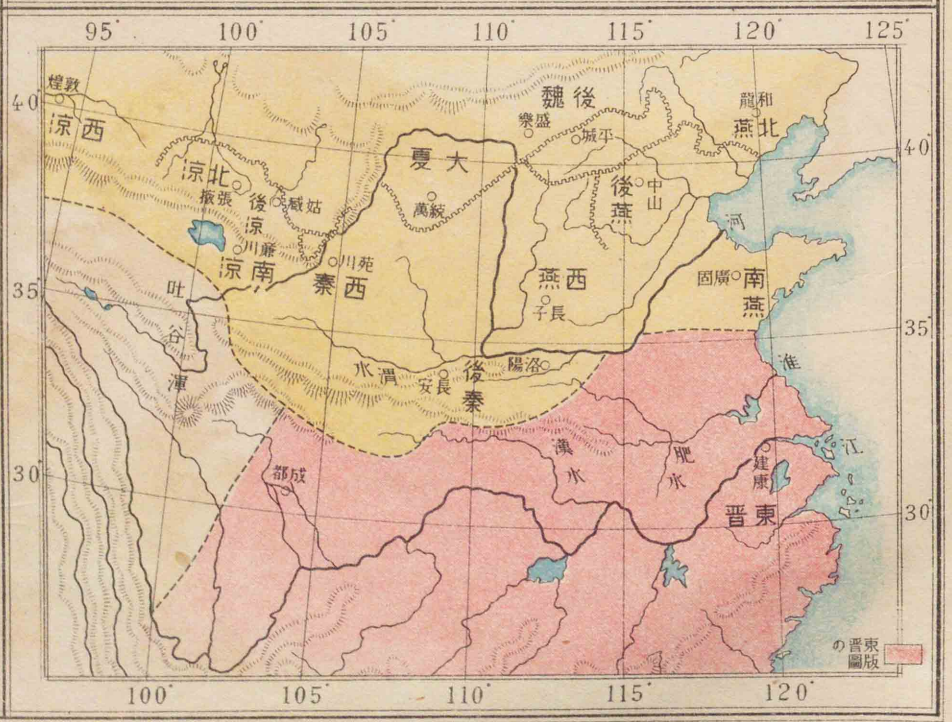
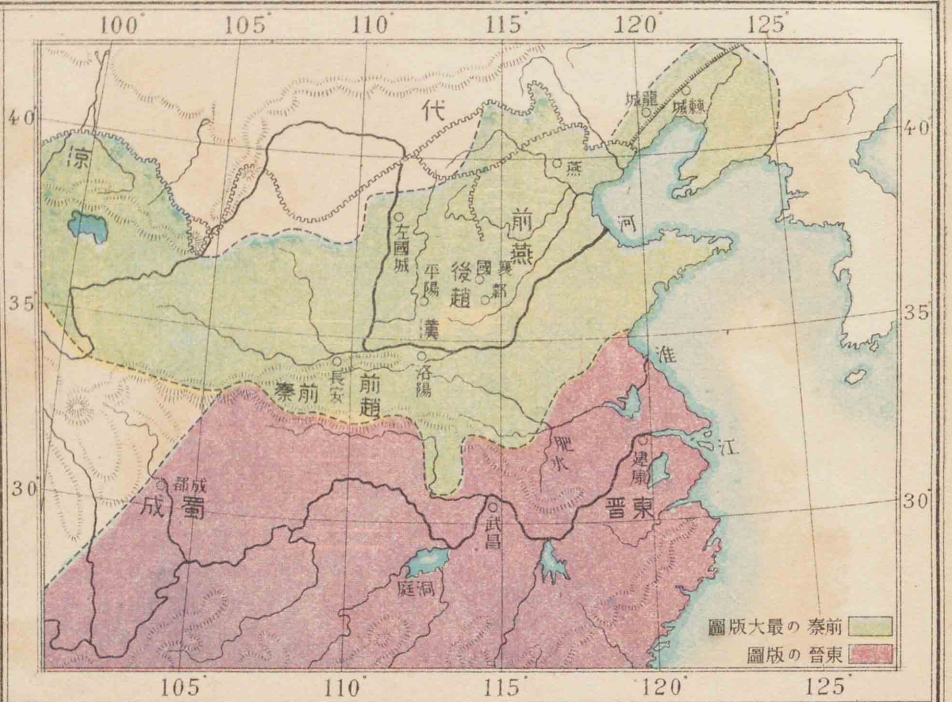


亞細亞代漢圖五第

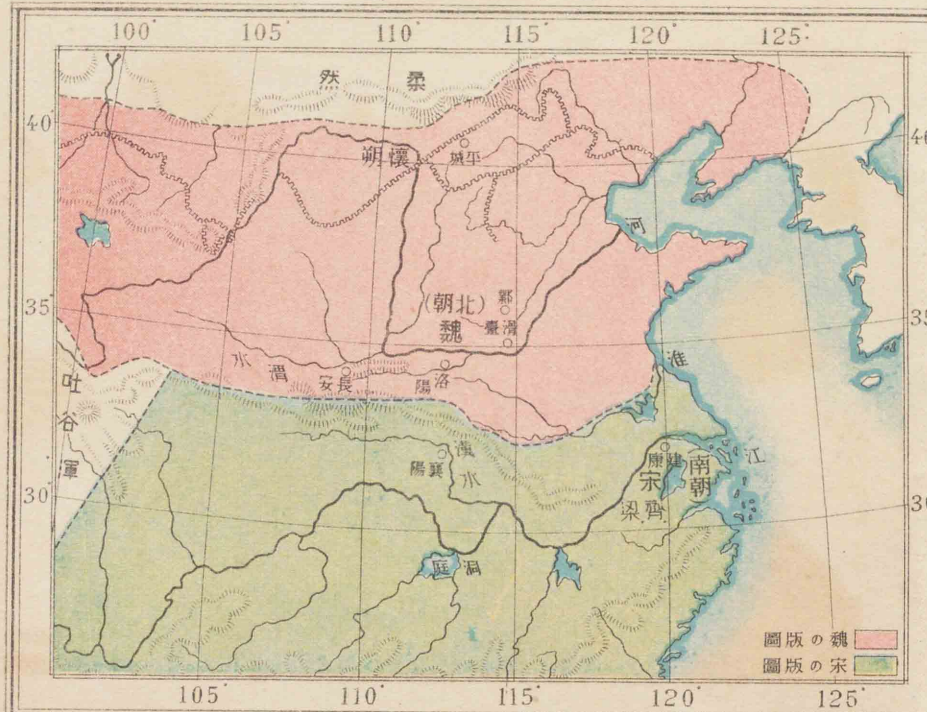


亞細亞代漢圖五第

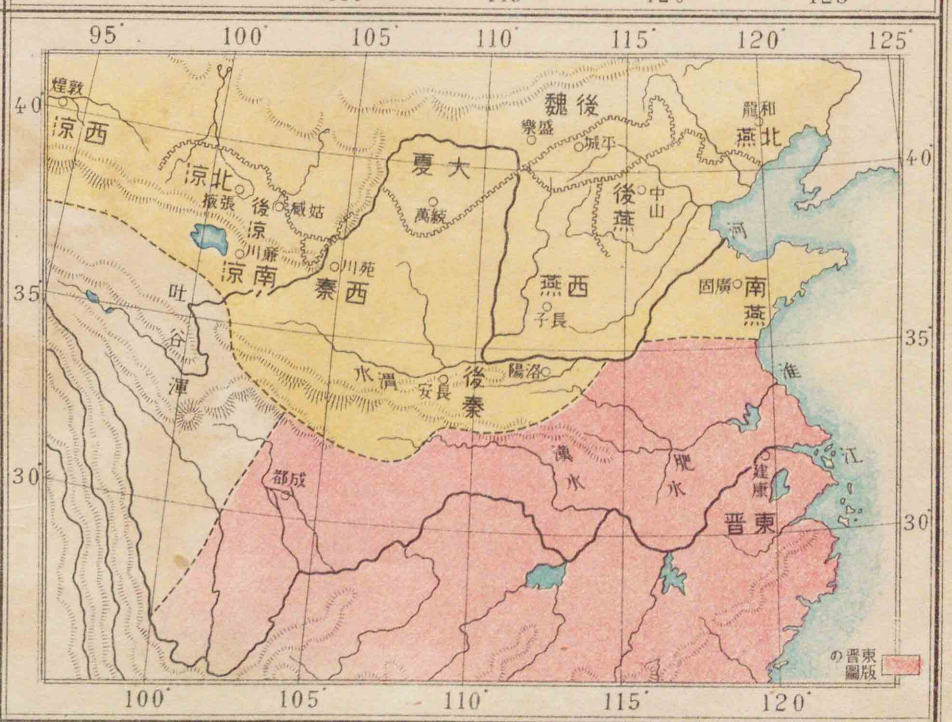
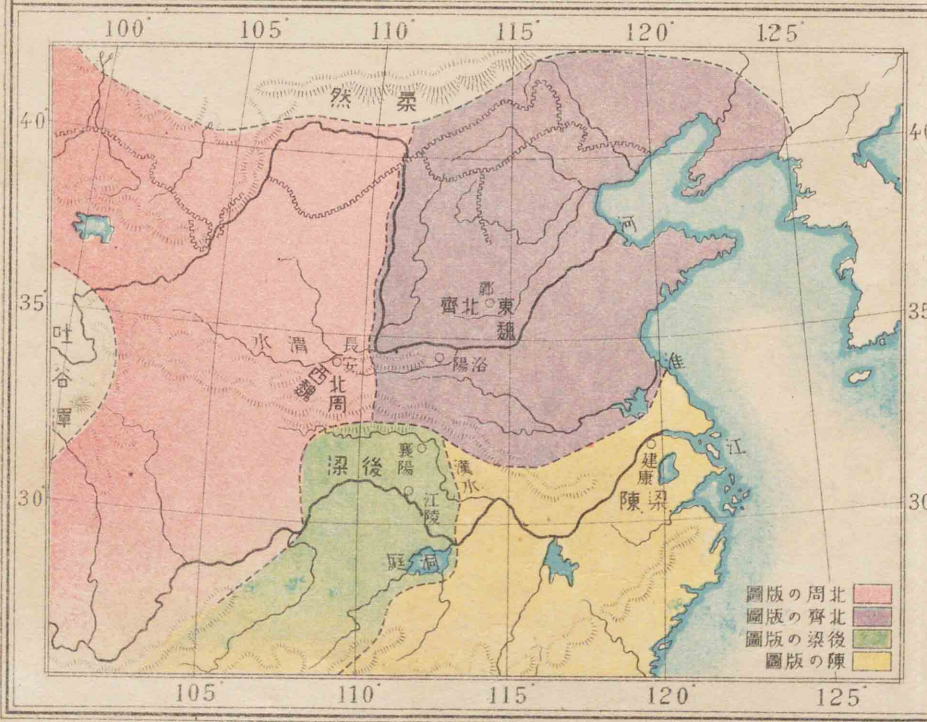
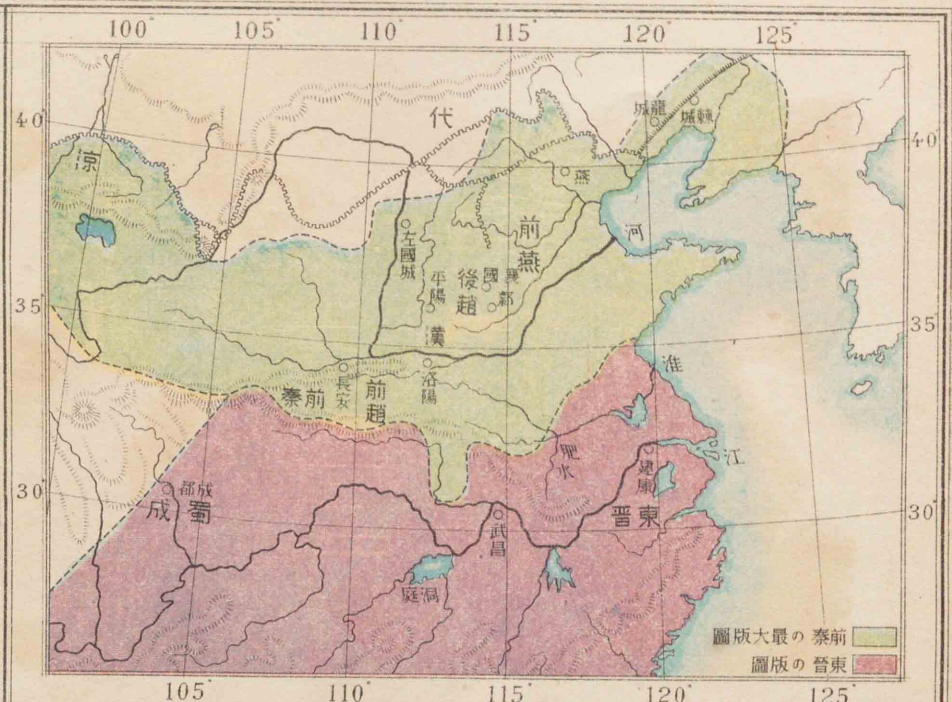




(下上)立對朝北南 圖七第



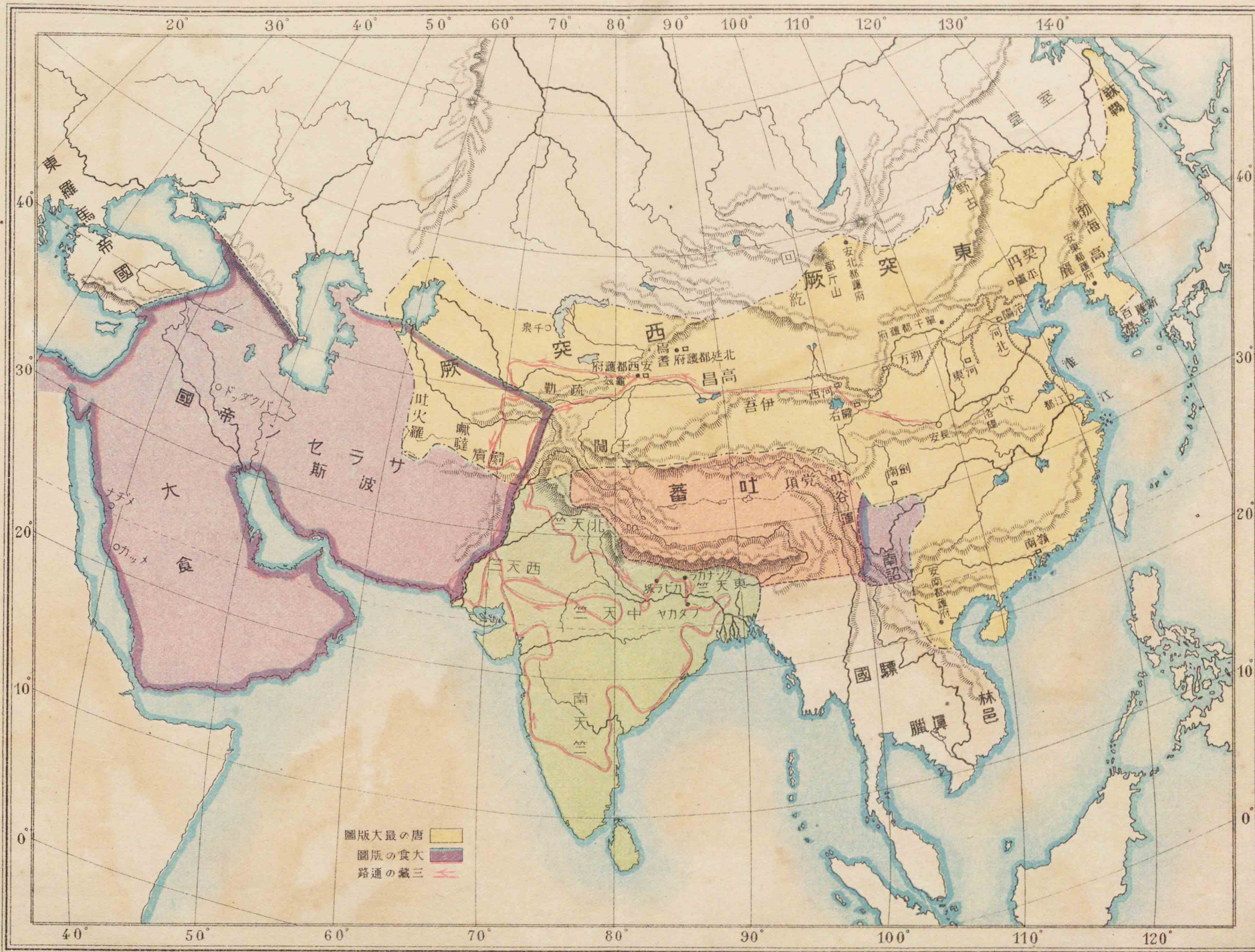
(後戰水肥)下(前戰水肥)上 國六十胡五 圖六第



亞細亞代唐圖八第



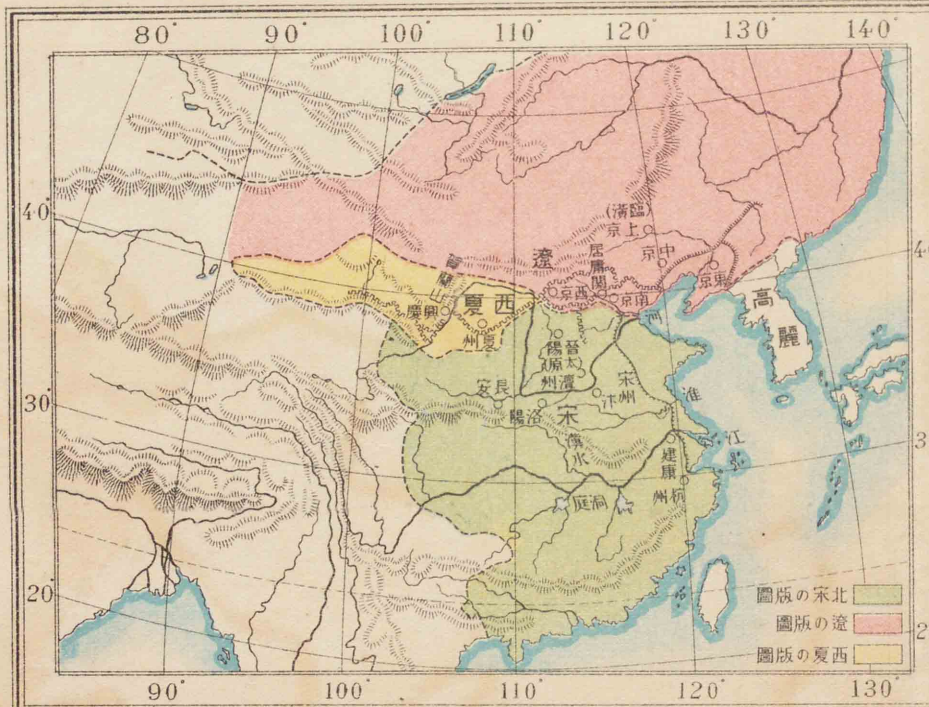
第八圖 唐代亞細亞圖



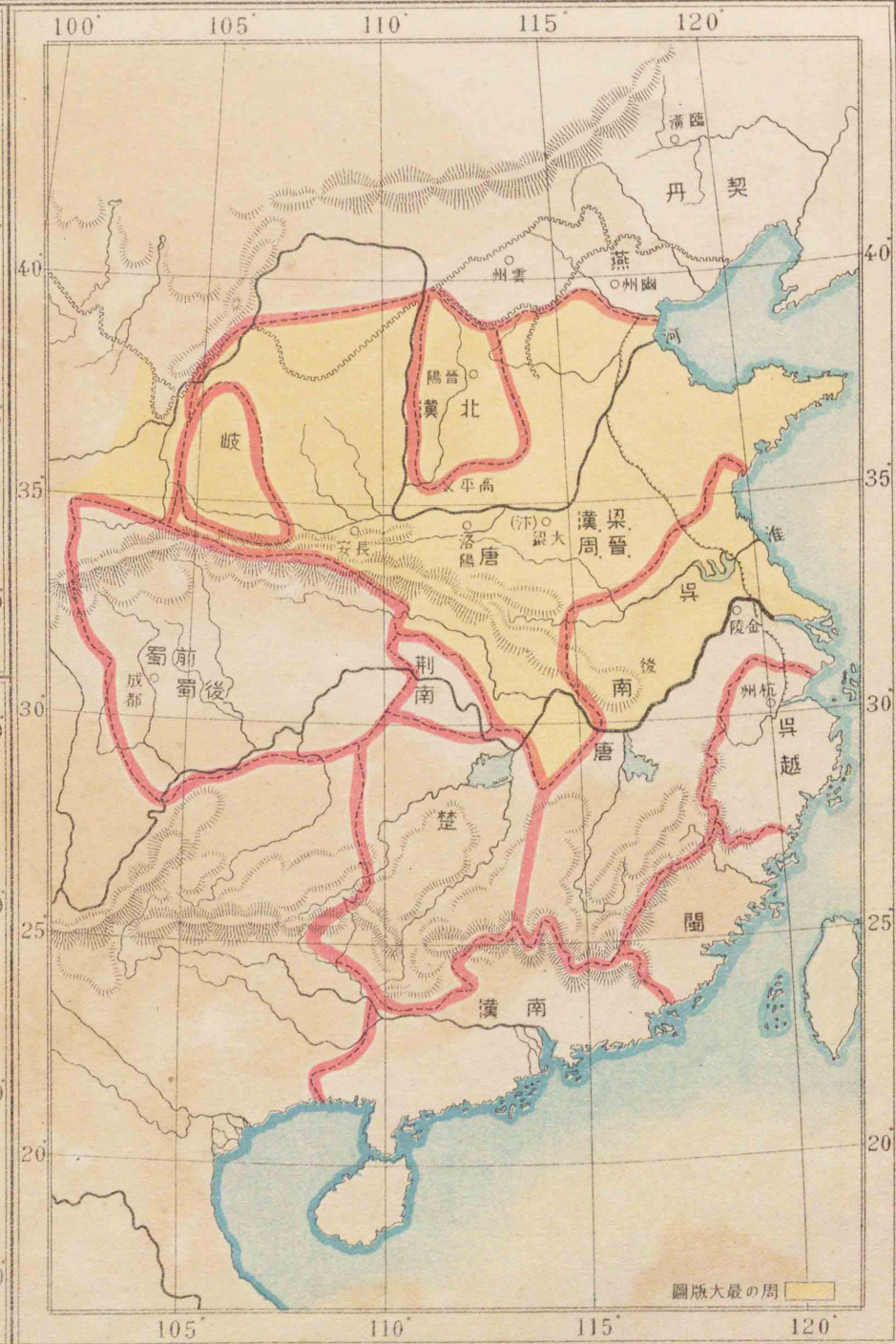
第九圖五代十代



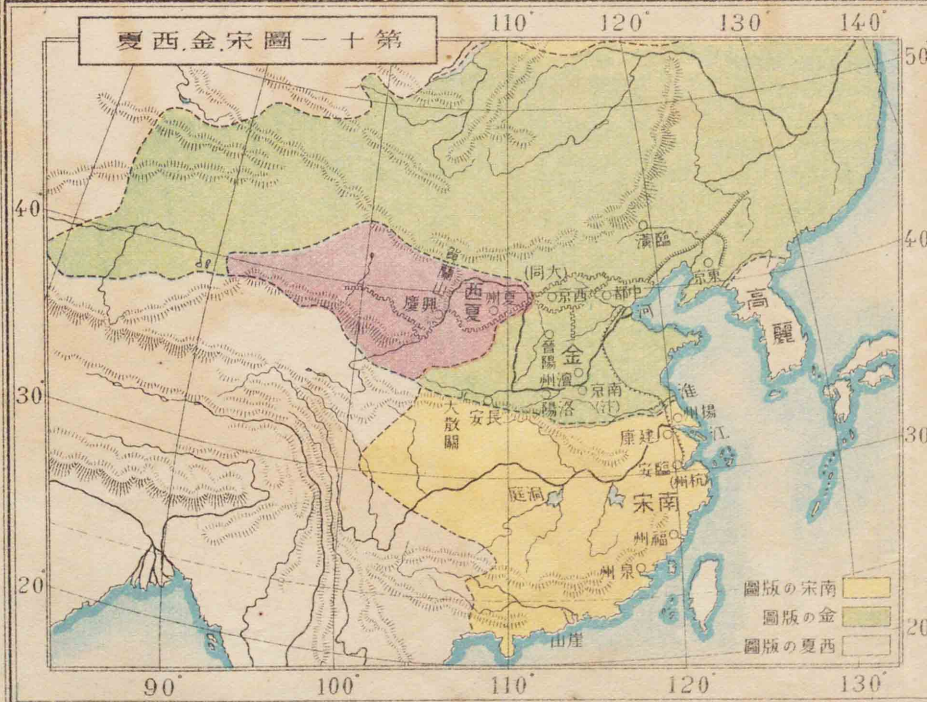
夏西遼宋圖十第



圖十代五圖九第



夏西金宋圖一十第



圖版大最の元圖二十第



圖版大最の元圖二十第

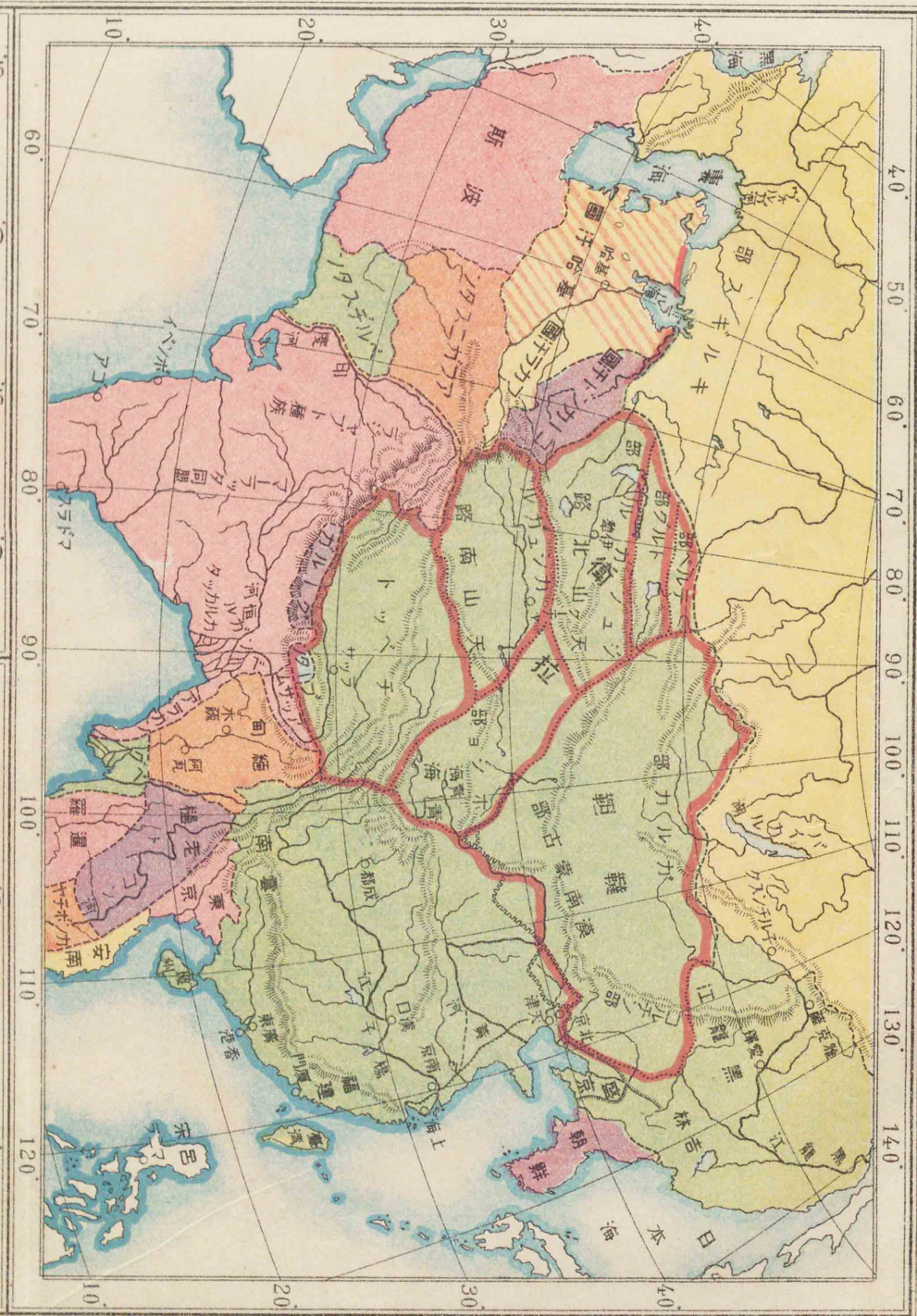


亞細亞代明圖三十第



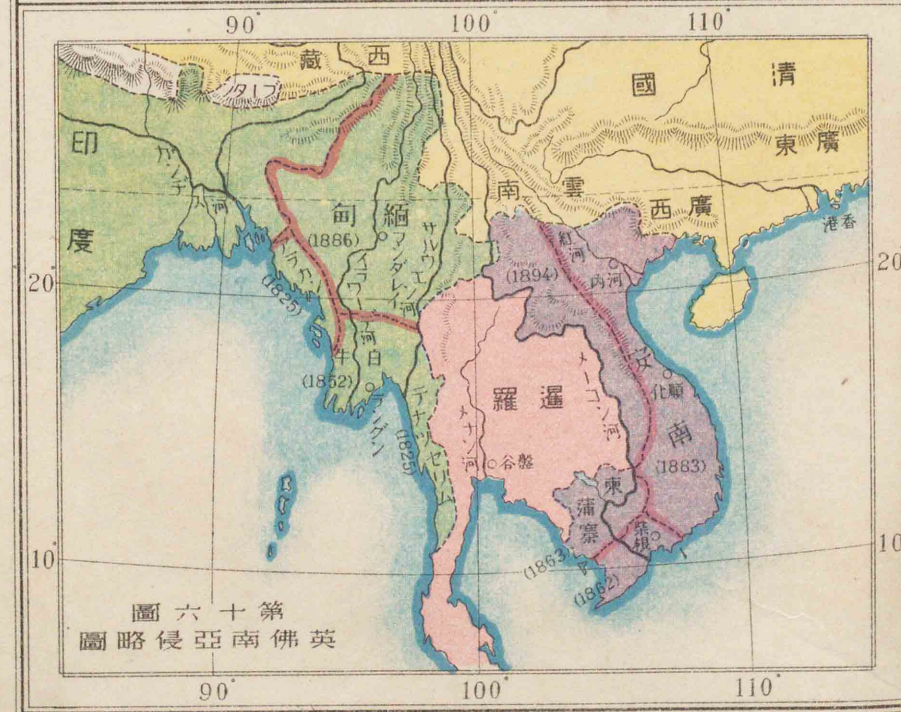
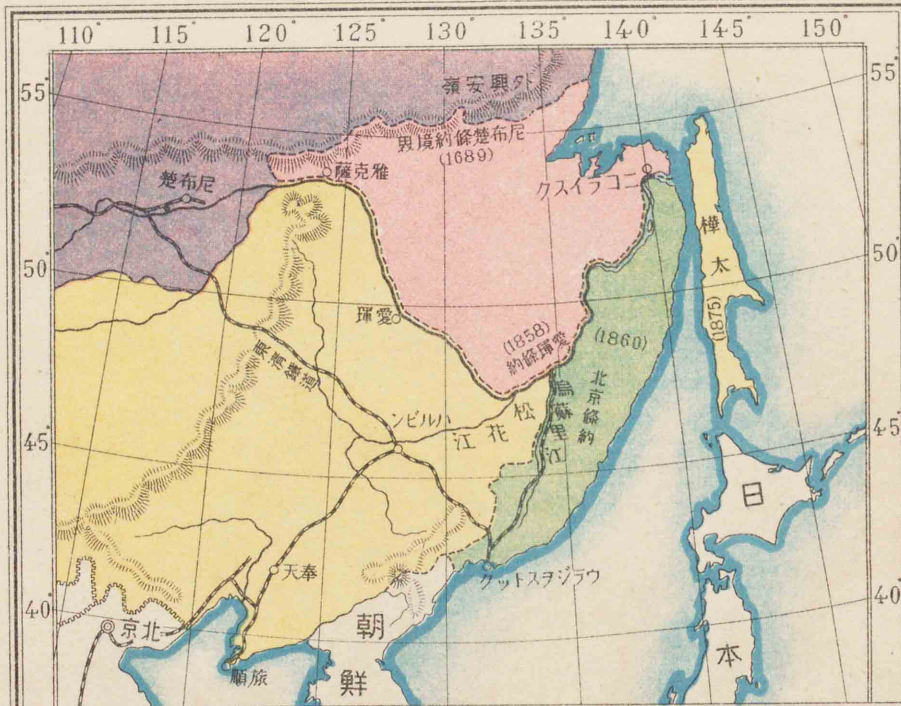
亞細亞代明圖三十第



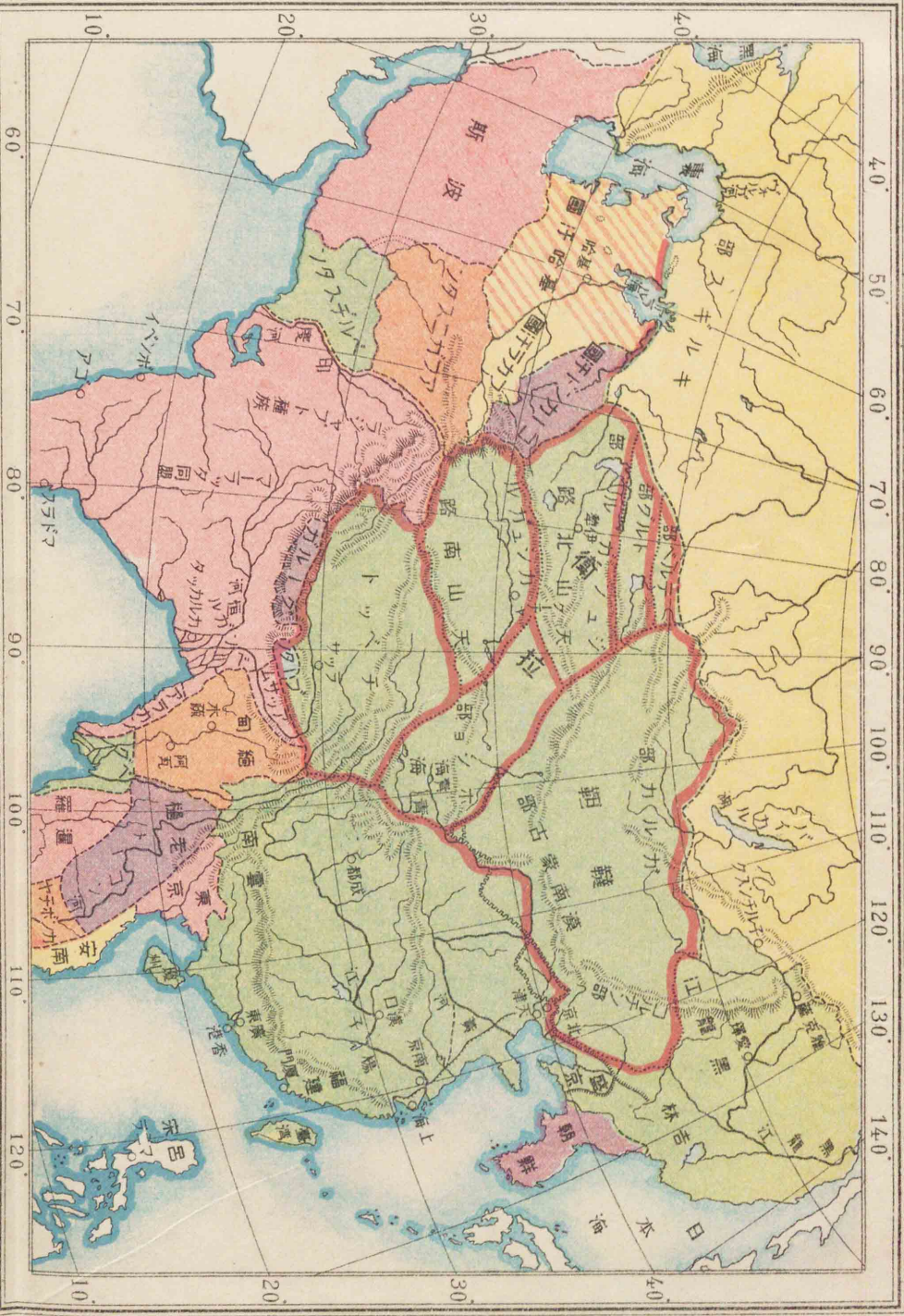


亞細亞の初清圖四十第

圖略侵東極國露圖五十第



圖六十第
圖略侵亞南佛英



亞細亞の初清圖四十第

國諸亞細亞代現圖七十第



國諸亞細亞代現圖七十第



明治三十八年八月十五日印刷
明治三十八年八月二十日發行
明治三十九年一月十四日訂正再版印刷
明治三十九年一月十七日訂正再版發行

中等東洋史

定價金七拾五錢

著者權所有

著者

著者

發行者

印刷者

印刷所

中野禮四郎

猪狩又藏

前川一郎

石井要藏

丸利印刷合資會社

東京市日本橋區通旅籠町十一番地

東京市神田區三河町一丁目十四番地

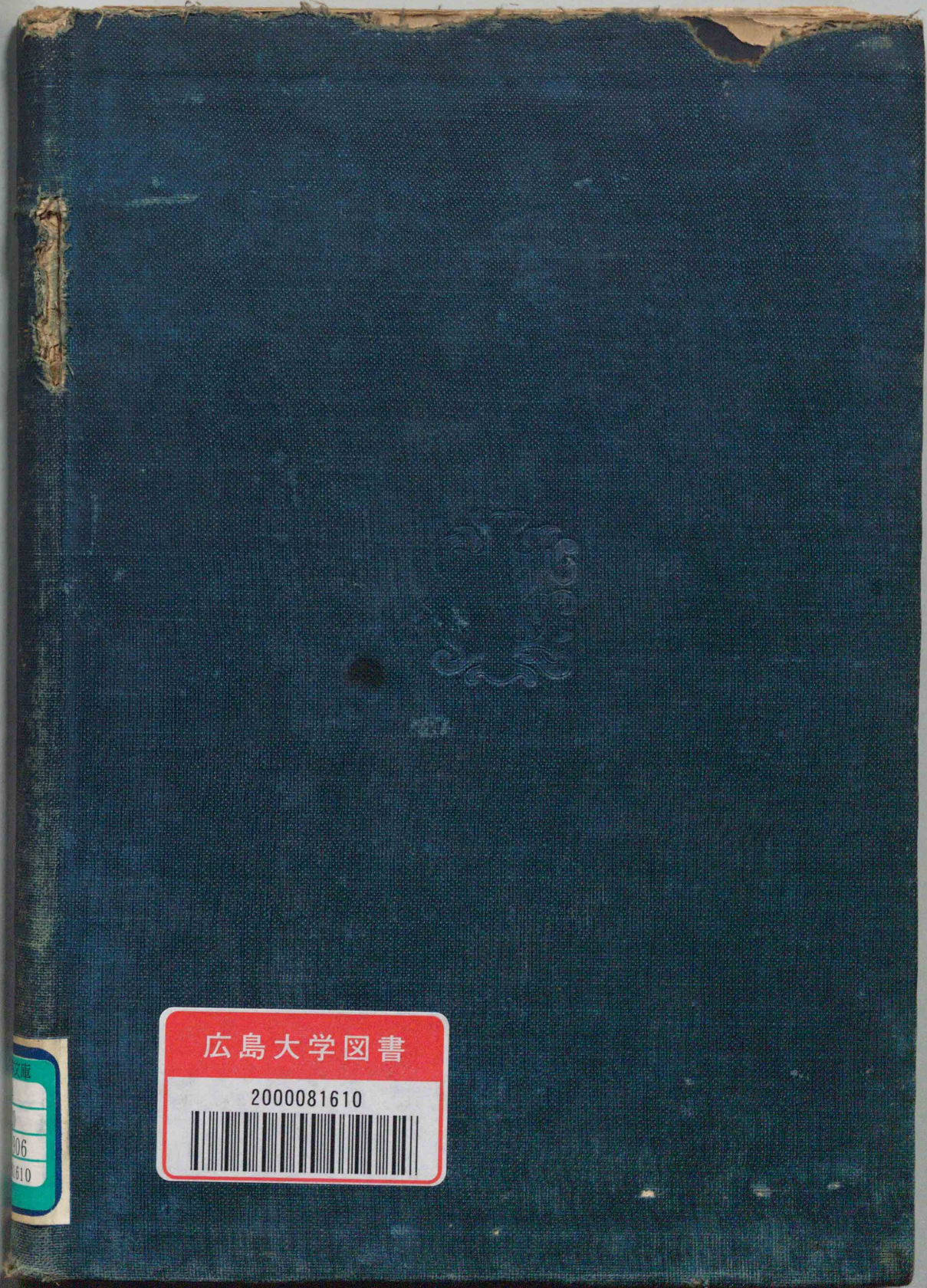
東京市神田區三河町一丁目十四番地

發兌元

東京市日本橋區
通旅籠町十一番地

學海指針社

45. 819



広島大学図書
2000081610



06
610